

市之関前田遺跡II

2005

群馬県前橋市教育委員会

市之関前田遺跡II

2005

群馬県前橋市教育委員会



第30号住居址完掘状況

序

市之関前田遺跡は県営柏倉地区土地改良事業に先立って調査が行われたもので、旧石器時代・縄文時代・平安時代・中世～近世にかけての大規模な複合遺跡で、集落跡など数多くの遺構や遺物が発見され、地域の歴史を知る上で貴重な資料が提示できたものと考えます。本報告書が地域の歴史や文化を解明する上での一助となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたり終始ご指導、ご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く感謝の意を表し、序にかえさせていただきます。

平成17年3月

前橋市教育委員会

教育長 中澤充裕

例　　言

1. 本書は、県営柏倉地区土地改良事業に伴い発掘調査を実施した、群馬県前橋市市之関町前田795ほかに所在する市之関前田遺跡の発掘調査報告書である。本遺跡の発掘調査報告書は I 『旧石器時代編』・II 『縄文時代前期ほか』・III 『縄文時代中期後半以降』により構成され、これらの内、I・IIIは既刊である。
2. 発掘調査は昭和62年度～平成元年度にかけて行い、引き続いて整理作業、報告書の作成を行った。なお本書の作成に係る整理作業は I・IIIの刊行後断続的に実施し、平成16年度に報告書の作成を行った。
3. 群馬県勢多都宮城村は、平成16年12月5日に前橋市と合併した。このため地名等の変更があったが、本文中では旧地名を用いて表記する。
4. 発掘調査並びに整理作業は国宝重要文化財保存整備費補助金・前橋土地改良事務所委託金・村費市費を使用して行った。
5. 調査組織は次のとおりである。

合併前（～平成16年12月4日）

宮城村教育委員会事務局

教育長 平林 始

事務局長 六木本庫一

主査 内山信也

主任 小川卓也

合併後（平成16年12月5日～）

前橋市教育委員会事務局

教育長 中澤充裕

管理部長 中原恵治（1月1日より課長を兼務）

文化財保護課長 高橋正男（～12月31日）

埋蔵文化財係長 前原 豊

6. 本書の編集は小川が担当した。執筆については以下の通りである。

第3章 パリノサーヴェイ団

上記以外 小川

7. 縄文時代の石器の実測の一部は諸星良一氏による。

8. 石製品の石材鑑定は阿久澤智和氏による。

9. 自然科学分析はパリノサーヴェイ株式会社による。なお調査より十数年が経過しており、本報告にあたっては、分析を依頼したパリノサーヴェイ株式会社に再校正を行っていただいた。

10. 現場における遺跡の写真撮影は細野高伯氏（現：株式会社シン技術コンサル）が行い、遺物写真は小川がこれを行った。

11. 本報告にかかる出土品・調査記録図面及び写真等は前橋市教育委員会が保管している。

12. 本書の作成にあたっては次の諸氏・諸機関より貴重な御指導・御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。

（五十音順、敬称略）

新井喜昭、有山径世、伊藤順一、井上慎也、今井和久、大平理恵、笠原仁史、加部二生、疋伸明、

川田強、藏持大輔、小菅将夫、小林修、櫻井和哉、齊藤準、島田志野、鷲村一志、鈴木徳雄、

関根慎二、早田勉、高橋敦、高橋清文、谷藤保彦、千葉博俊、富田孝彦、中里正憲、中島直樹、

中島広顯、荻谷千明、長谷川福次、日沖剛史、福田貴之、保阪太一、松田哲、水谷貴之、

諸星良一、矢内歎、山口逸弘、綿田弘美、

技研測量設計株式会社、群馬県教育委員会文化課、御群馬県埋蔵文化財調査事業団、

パリノサーヴェイ株式会社

凡　　例

1. 本書の挿図中の方位記号は座標北を示す。
2. 本書に掲載した遺構図・遺物図の縮尺は概ね下記の通りだが、詳細については各図版中のスケールを参照されたい。
遺跡全体図 1/400 住居址・土坑の一部 1/60・土坑 1/40・遺物実測図 1/2～1/4
3. 事実記載中の遺物出土量は、接合関係のあるものは1点とカウントし、同一個体でも接合関係のないものはそれぞれ1点とカウントした。
4. 事実記載・土坑一覧表中の数値で、()付きのものは推定値を表す。また、遺物観察表中の()付きのものは残存値を表す。
5. 図版中の表示は次のことを意味し、この他の表示については図中にその意味を記した。

【遺構平面図】 ● 土器・▲ 石器 【遺構断面図】 ■■■ 土器・■■■ 石器・■■■ 地山

【土器実測図】 ● 繊維混入 【石器実測図】 △△△ 磨滅・磨面

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 検出された遺構と遺物	1
第1節 繩文時代前期の住居址と遺物.....	1
第2節 土 坑.....	24
第1項 繩文時代の土坑.....	24
第2項 古代の土坑.....	53
第3項 中世～近世の土坑.....	54
第3節 遺構外出土遺物.....	70
第2章 付 編	78
第3章 自然科学分析	79
I. 層序.....	79
II. 土壌の性質.....	81
III. 考察.....	86
IV. おわりに.....	87

挿図目次

第1図 第6号住居址	2	第29図 縄文時代の土坑⑨	37
第2図 第6号住居址出土遺物	3	第30図 土坑出土遺物①	39
第3図 第8号住居址①	4	第31図 土坑出土遺物②	41
第4図 第8号住居址②	5	第32図 土坑出土遺物③	43
第5図 第8号住居址出土遺物①	6	第33図 土坑出土遺物④	45
第6図 第8号住居址出土遺物②	7	第34図 土坑出土遺物⑤	47
第7図 第8号住居址出土遺物③	8	第35図 土坑出土遺物⑥	49
第8図 第12号住居址	9	第36図 土坑出土遺物⑦	50
第9図 第12号住居址出土遺物①	11	第37図 土坑出土遺物⑧	51
第10図 第12号住居址出土遺物②	13	第38図 古代の土坑	53
第11図 第20号住居址	14	第39図 土坑出土遺物	53
第12図 第30号住居址①	15	第40図 中世～近世の土坑①	55
第13図 第30号住居址②	16	第41図 中世～近世の土坑②	56
第14図 第30号住居址出土遺物	17	第42図 土坑出土遺物①	57
第15図 第31号住居址	18	第43図 土坑出土遺物②	58
第16図 第31号住居址出土遺物①	19	第44図 時期不明の土坑①	59
第17図 第31号住居址出土遺物②	20	第45図 時期不明の土坑②	60
第18図 第32号住居址①	20	第46図 時期不明の土坑③	61
第19図 第32号住居址②	21	第47図 時期不明の土坑④	62
第20図 第32号住居址出土遺物	22	第48図 時期不明の土坑⑤	63
第21図 縄文時代の土坑①	25	第49図 時期不明の土坑⑥	64
第22図 縄文時代の土坑②	27	第50図 時期不明の土坑⑦	65
第23図 縄文時代の土坑③	29	第51図 遺構外出土遺物①	69
第24図 縄文時代の土坑④	30	第52図 遺構外出土遺物②	71
第25図 縄文時代の土坑⑤	31	第53図 遺構外出土遺物③	73
第26図 縄文時代の土坑⑥	33	第54図 遺構外出土遺物④	74
第27図 縄文時代の土坑⑦	34	第55図 遺構外出土遺物⑤	75
第28図 縄文時代の土坑⑧	35	第56図 遺構外出土遺物⑥	76
第3章 自然科学分析			
図1 第1地点の層序と分析試料の層位	79	ダイアグラム	83
図2 第2地点の層序と分析試料の層位	81	図6 第2地点(黒ボク土)の重軽鉱物組成	84
図3 第1地点の鉱物分析試料の採取位置	82	ダイアグラム	84
図4 第2地点(黒ボク土)の各分析試料の採取位置	82	図7 第2地点(黒ボク土)の各土層の1g中の花粉粒量	85
図5 第1地点(ローム層)の重軽鉱物組成			

挿表目次

第1表 縄文時代前期住居址出土石器等観察表	23	第7表 土坑一覧表(2)	66
第2表 土坑出土石器等観察表	52	第8表 土坑一覧表(3)	67
第3表 土坑出土土器観察表①	53	第9表 土坑一覧表(4)	68
第4表 土坑出土土器観察表②	57	第10表 遺構外出土遺物観察表	77
第5表 土坑出土石製品観察表	58	第11表 縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器等観察表	78
第6表 土坑一覧表(1)	65		

第3章 自然科学分析

表1. 第2地点（黒ボク土）各土層の土壤理化学 分析結果.....	81	表3. 第2地点（黒ボク土）の重軽鉱物組成.....	84
表2. 第1地点（ローム層）の重軽鉱物組成.....	83	表4. 第2地点（黒ボク土）各土層の花粉化石の 組成.....	86

写真図版目次

PL-1	1	第6号住居址完掘状況	6	第55号土坑完掘状況	
	2	第8号住居址完掘状況	7	第56号土坑完掘状況	
PL-2	1	第6号住居址遺物出土状況	8	第66号土坑土層観察状況	
	2	第8号住居址炉址完掘状況	PL-9	1	第102号土坑遺物出土状況
	3	第12号住居址完掘状況	2	第107号土坑完掘状況	
	4	第12号住居址土層観察状況	3	第155号土坑完掘状況	
	5	第12号住居址遺物出土状況	4	第156号土坑土層観察状況	
PL-3	1	第12号住居址炉址土層観察状況	5	第156号土坑完掘状況	
	2	第12号住居址炉址完掘状況	6	第161号土坑土層観察状況	
	3	第20号住居址遺物出土状況	7	第172号土坑土層観察状況	
	4	第20号住居址炉址完掘状況	8	第174号土坑土層観察状況	
PL-4	1	第30号住居址完掘状況	PL-10	1	第180号土坑土層観察状況
	2	第31号住居址遺物出土状況	2	第180号土坑完掘状況	
PL-5	1	第30号住居址遺物出土状況	3	第181号土坑土層観察状況	
	2	第31号住居址土層観察状況	4	第185号土坑土層観察状況	
	3	第31号住居址炉址完掘状況	5	第1号土坑遺物出土状況	
	4	第32号住居址炉址完掘状況	6	第2号土坑堅壁土層観察状況	
	5	第32号住居址遺物出土状況	7	第2号土坑完掘状況	
PL-6	1	第6号土坑土層観察状況	8	第3号土坑完掘状況	
	2	第6号土坑完掘状況	PL-11	1	第25号土坑遺物出土状況
	3	第7号土坑遺物出土状況	2	第53号土坑土層観察状況	
	4	第18号土坑土層観察状況	3	第53号土坑完掘状況	
	5	第18号土坑遺物出土状況	4	第111号土坑遺物出土状況	
	6	第18号土坑完掘状況	5	第26号土坑土層観察状況	
	7	第19号土坑完掘状況	6	第38号土坑完掘状況	
	8	第20号土坑完掘状況	7	第40号土坑土層観察状況	
PL-7	1	第21号土坑土層観察状況	8	第68号土坑土層観察状況	
	2	第22号土坑土層観察状況	PL-12	1	第74号土坑土層観察状況
	3	第22号土坑遺物出土状況	2	第75号土坑土層観察状況	
	4	第23号土坑土層観察状況	3	第109号土坑完掘状況	
	5	第27号土坑土層観察状況	4	第130号土坑完掘状況	
	6	第27号土坑完掘状況	5	第173号土坑土層観察状況	
	7	第28号土坑土層観察状況	PL-13	第6号住居址出土遺物	
	8	第36号土坑土層観察状況		第8号住居址出土遺物①	
PL-8	1	第36号土坑完掘状況	PL-14	第8号住居址出土遺物②	
	2	第37号土坑遺物出土状況	PL-15	第8号住居址出土遺物③	
	3	第50号土坑土層観察状況		第12号住居址出土遺物①	
	4	第55号土坑土層観察状況	PL-16	第12号住居址出土遺物③	
	5	第55号土坑遺物出土状況		第30号住居址出土遺物①	

P L-17 第30号住居址出土遺物②
第31号住居址出土遺物①
P L-18 第31号住居址出土遺物②
第32号住居址出土遺物
P L-19 土坑出土遺物①
P L-20 土坑出土遺物②
P L-21 土坑出土遺物③
P L-22 土坑出土遺物④
P L-23 土坑出土遺物⑤
P L-24 土坑出土遺物⑥

第3章 自然科学分析

図版1 重鉱物

図版2 軽鉱物

P L-25 土坑出土遺物⑦
P L-26 遺構外出土遺物①
P L-27 遺構外出土遺物②
P L-28 遺構外出土遺物③
P L-29 遺構外出土遺物④
P L-30 遺構外出土遺物⑤
縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器①
P L-31 縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器②
P L-32 縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器③

図版3 花粉化石・花粉分析プレパラートの状況

図版4 花粉分析プレパラートの状況

第1章 検出された遺構と遺物

第1節 繩文時代前期の住居址と遺物

ここでは、繩文時代前期前半の住居址を取り上げる。第6・8・12・20・30・31・32号住居址の7軒が該当する。前期の住居址は北西—南東方向にのびた台地の先端部分に集中しており、台地先端部を取り囲むように配置されている。いずれも標高は283~285mほどのところに立地している。本遺跡同様芳見沢川右岸の台地に立地し、北方800m程のところにある市之間遺跡でも、ほぼ同時期の住居址1軒が検出されており(宮城村教育委員会1988)、本遺跡が立地する台地上に繩文時代前期前半の集落が複数展開していたことが窺える。

第6号住居址(第1・2図)

位 置 調査区南西側、南西方向に緩やかに傾斜してゆく台地である25-32グリッドに位置し、標高は283.0m程度である。また第8号住居址、第4・36号土坑に隣接する。**重複関係**なし。**遺存状態**南東隅をトレンチにより壊されるもののほか遺存状態は良好である。**規模・形状**長軸側を主軸方向と想定すると北西—南東方向に主軸をとり、主軸方位はN-54°-Wである。長軸3.07m・短軸2.71mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。**壁・壁周溝**壁高は北壁で24~29cm、南壁で5~6cm程度で、外傾して立ち上がっている。壁周溝は検出されなかった。**柱 穴**東壁及び西壁に沿って柱穴列が検出され(P1~P8)、床面上や北壁・南壁では柱穴は検出されなかつた。主柱穴配置はP1~P6(P7)の6本柱を想定した。**炉 坯**炉址を見られる施設は確認されなかつたが、住居址中央部西寄りのところで集石が検出されており、炉に相当する施設であった可能性がある。**遺物出土状況**住居址中央に集中して分布している。垂直分布から住居址下層から床面直上付近に集中して分布する傾向が窺える。**遺 物**土器16点・石器2点を図示し得た。器種は全て深鉢である。地文は単節斜縄文が主体で(1・2・4~14)、ほとんどが0段多条である。その他正反の合(15)や附加条縄文(16)を地文とするものが若干含まれる。いずれの土器も胎土には纖維を含む。

1は脚部下半～底部の復元個体である。短く直立した脚部を持った上げ底状の底部から緩やかに外反して立ち上がる器形を呈する。外面には多段のループ文を施し、底面にはRL単節斜縄文が施される。

2～4は半截竹管を用いた平行沈線により文様を施すものである。2は口縁部片、3・4は脚部片だが、3は口縁部文様帯の一部と考えられる。また2・3の平行沈線には刻みが施され、梯子状を呈する。2は平縁で、直線的に開く器形を呈すると考えられる。口唇部は内削ぎ状を呈し、7個ほどを1単位とする集合角状突起を有する。口縁部直下には縦線の刻み列を施す。半截竹管を用いた平行沈線により口縁部文様帯の上下を区画し、下端を区画する平行沈線には刻みを施す。文様帶内には半截竹管によるコンパス文及び円形貼付文を施す。以下は多段ループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜縄文を施し、脚部には半截竹管によるコンパス文が1条巡る。3は下半部に緩い屈曲がみられ、頸部で外反して開く器形を呈すると考えられる。2～3条1対の有刻の平行沈線により菱形等の幾何学文を施し、無文部分には3～5本1単位の刻みを充填する。4は半截竹管によるコンパス文を2条巡らせ、コンパス文間に2条1対の半截竹管を用いた平行沈線による鋸齒状文及び円形貼付文を施す。平行沈線はその一端を重ねて施す。地文は羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文を施す。

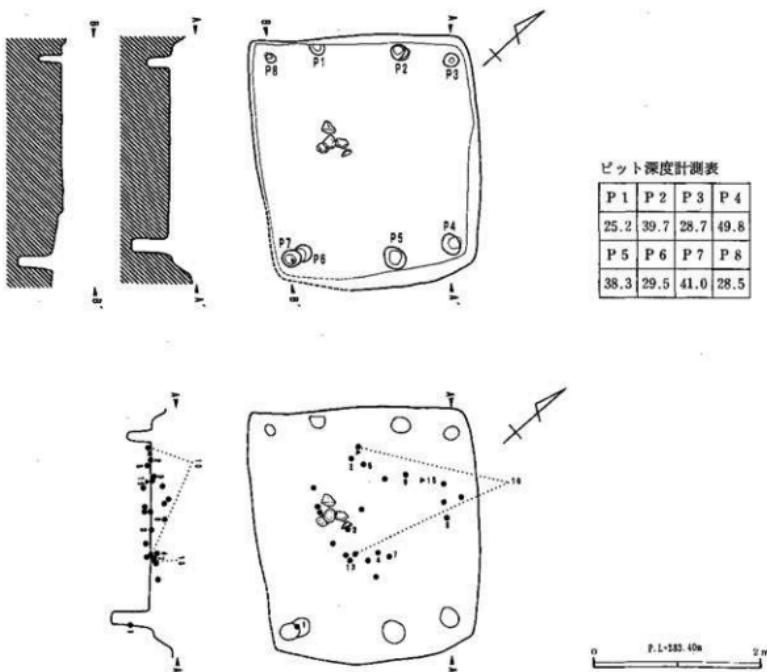
5は平縁で、口縁部直下に屈曲がみられ、若干内湾して立ち上がる器形を呈するとみられる。口唇部は内削ぎ状を呈する。LR単節斜縄文を地文とし、口縁部直下には半截竹管によるコンパス文を施し、円形貼付文を付す。コンパス文は崩れて波状を呈する。

6～11は半截竹管によるコンパス文を施すもので、6は口縁部片、7～11は脚部片である。6・7は有刻のコンパス文、また10・11のコンパス文はやや崩れて波状を呈する。6は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する口唇部を有し、有刻の白歯状突起を持つ。また口縁部直下には刻み列を有する。地文はいずれも羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文とみられる。

12～14は羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文のみを施した脚部片で、12は多段のループ文を伴う。13は閉端環付である。

15は羽状構成をとる正反の合(LRとRLをRに撲ったものとLに撲ったもの)を施す脚部片。16は附加条第3種RL+rを地文とし、半截竹管によるコンパス文を3条巡らせる。

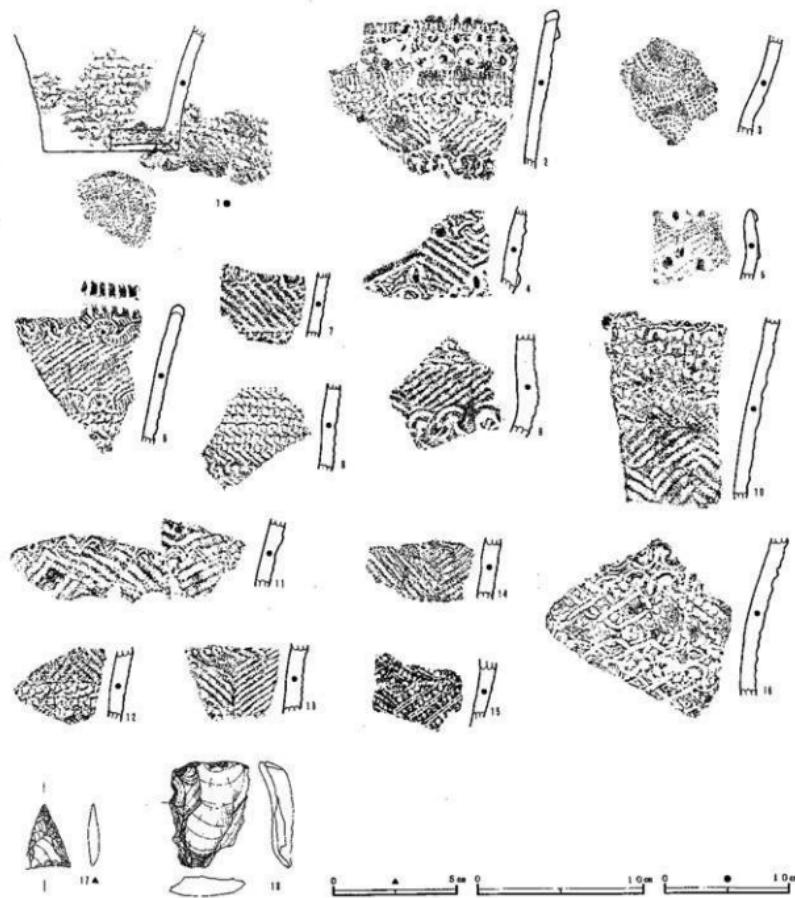
17は黒色頁岩製の凹基無茎鍬で、脚部を一部欠損する。18は黒色頁岩製のスクレイパーである。



第1図 第6号住居址

第8号住居址（第3～7図）

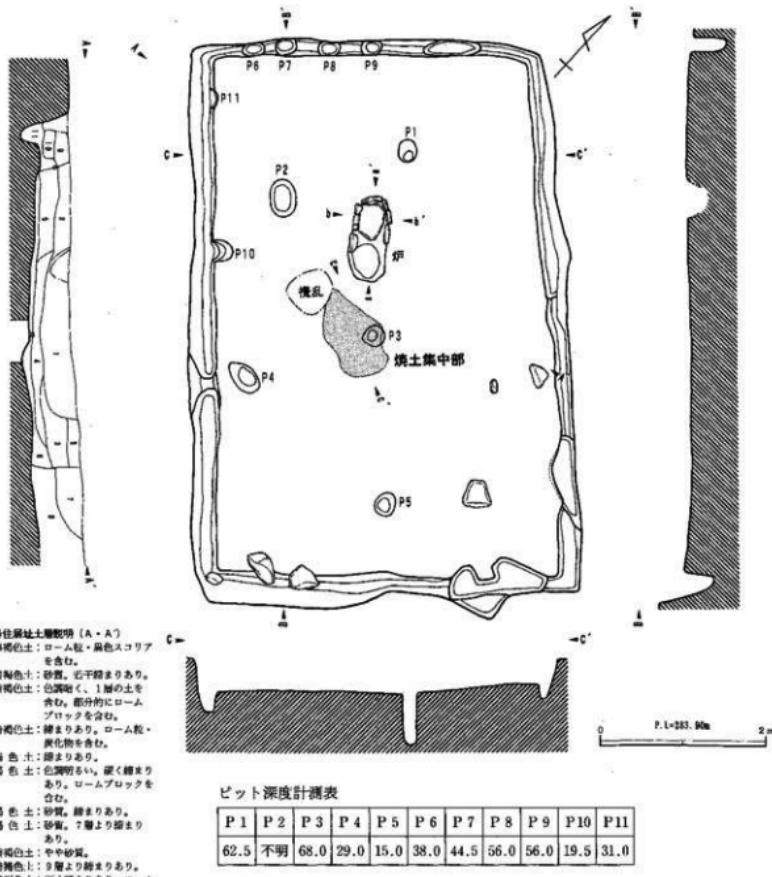
位 置 調査区南西側、南西方向に緩やかに傾斜してゆく台地の平坦面である26-31～32グリッドに位置し、標高は283.5m程である。また第6号住居址に隣接する。**重複関係** なし。**遺存状態** おおむね遺存状態は良好である。**規模・形状** 北西—南東方向に主軸をとり、主軸方位はN—43°—Wである。長軸6.83m・短軸4.18mを測り、平面形は長方形を呈する。**壁・壁周溝** 壁高は北壁で31～50cm、南壁で2～41cm程で、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁周溝は全周し、北壁では壁柱穴を連結する形で検出されている。**柱 穴** 床面上で5基、壁周溝内及び壁周溝に連絡するものが6基検出された（P 1～P 11）が、その主柱穴配置を捉えることができなかった。**主軸周辺に位置するP 2・P 3・P 8・P 9** が他の柱穴より深さを有していることが特徴的である。**炉 址** 石團炉である。住居址中央部やや西寄りのところで検出された。掘り方は、長軸104cm・短軸46cm・床面からの深さ19.5cmを測り、平面形は橢円形を呈する。炉の北側には南方を開けた「コ」字状の石囲いを配し、石囲部中央に扁平な石を敷く。石囲部南側には橢円形の掘り込みを持つ。また炉の南側には焼土を上層に含む焼土集中部が検出されている。**備 考** 土層断面を観察すると、住居埋没後に新たに掘り込まれた様子が窺える。また焼土集中部は焼土を多量に含む層が床面から離れて浮いており、その他本住居址で主体をなす遺物より時期の新しい遺物（第7図55）が出土していることから、本住居址に「入れ子」状に別構造が重複していた可能性が考えられる。**遺物分布状況** 住居址全面にまばらに分布するが、南東部にやや集中する。垂直分布は住居址上層から床面直上まで散漫に分布する傾向が伺える。**遺 物** 土器44点・石器11点を図示し得た。器種は全て深鉢である。地文は単節斜



第2図 第6号住居址出土遺物

縦文を主体とし、ほとんどが0段多条である(19は0段2条の可能性がある)。その他正反の合を地文とするもの(41~43)等を少量含む。55を除き、いずれも胎土に纖維を含むが、7はその含有量が少量である。

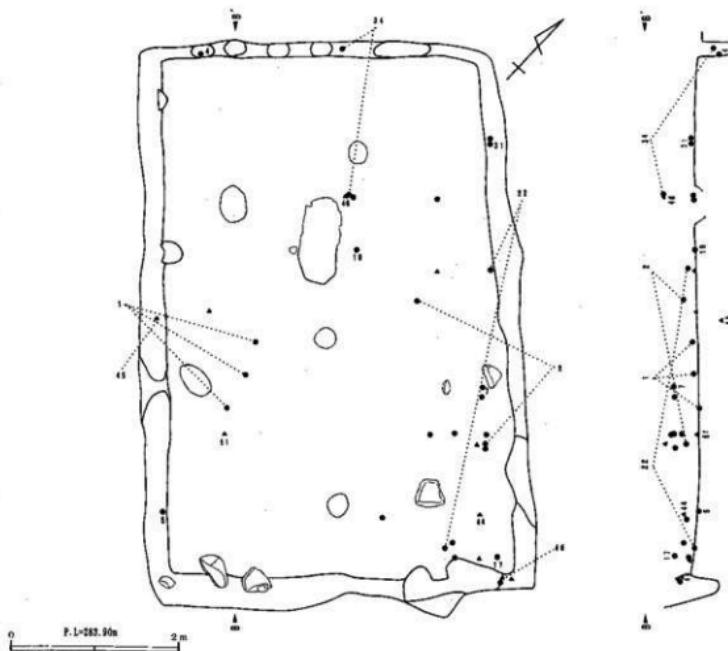
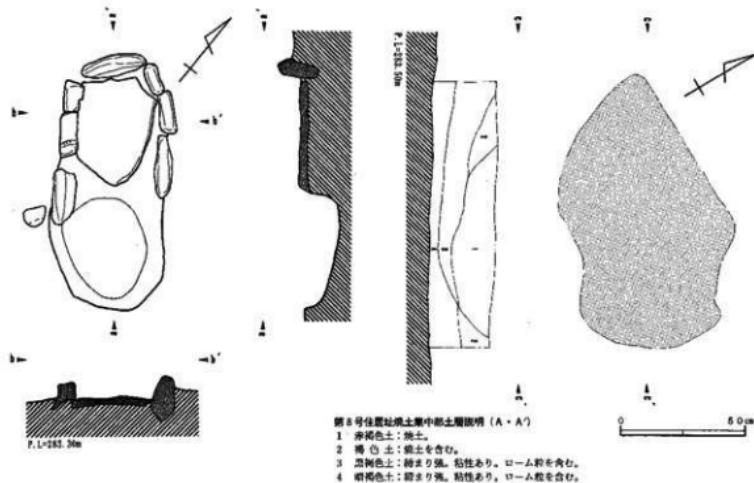
1・2は復元個体である。1は胸部上半から下半で、胸部中位が強く膨らみ、頸部で括れて、口縁部は外反して開く器形を呈するとみられる。多段のループ文及び羽状構成をとる閉縫環付のLR・RL単節斜繩文を施文後、胸部中位には半截竹管を用いた3条1单位の平行沈線による鋸齒状文を、胸部下半には半截竹管による1条のコンバス文をそれぞれ施す。鋸齒状文の平行沈線はその一端を重ねて施文する。また胸部中位には未貫通の焼成後の穿孔がみられる。2は胸部下半から底部にかけての破片で、緩やかに立ち上がる上げ底状の底部から強く外反



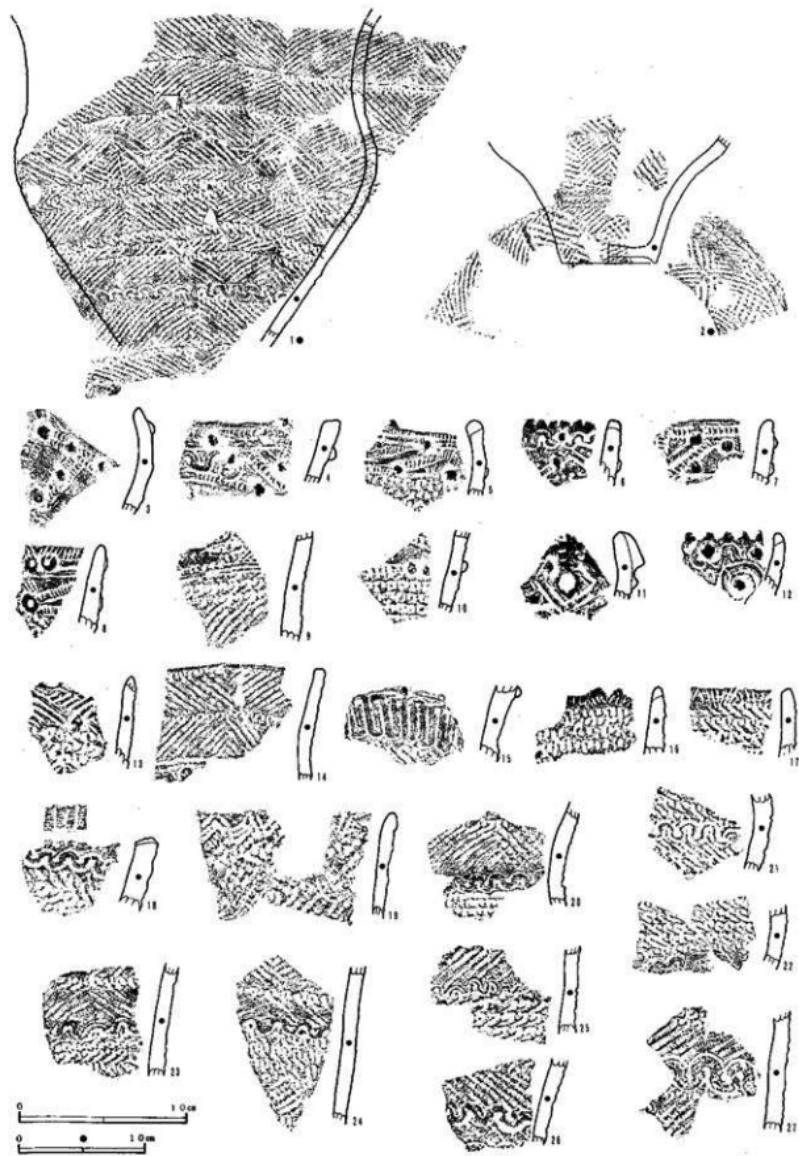
第3図 第8号住居址①

して立ち上がる器形を呈する。地文は多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL 单節斜綱文を施す。3~15は多段のループ管等により幾何学文等の文様を施す口縁部ないし口縁部付近の破片である。平縁が主体で(4~8・12・14)、波状縁も認められる(3・11)。口唇部は内削ぎ状を呈するもの(4・5・7・8・14)が主体で、丸頭状を呈するもの(3)も認められる。また突起を有するものもあり、(集合)角状突起(4・5・12)と、臼歯状突起(6)の2者がみられる。文様を施す平行沈線は有刻のもの(3~10)と無刻のもの(11~15)がある。

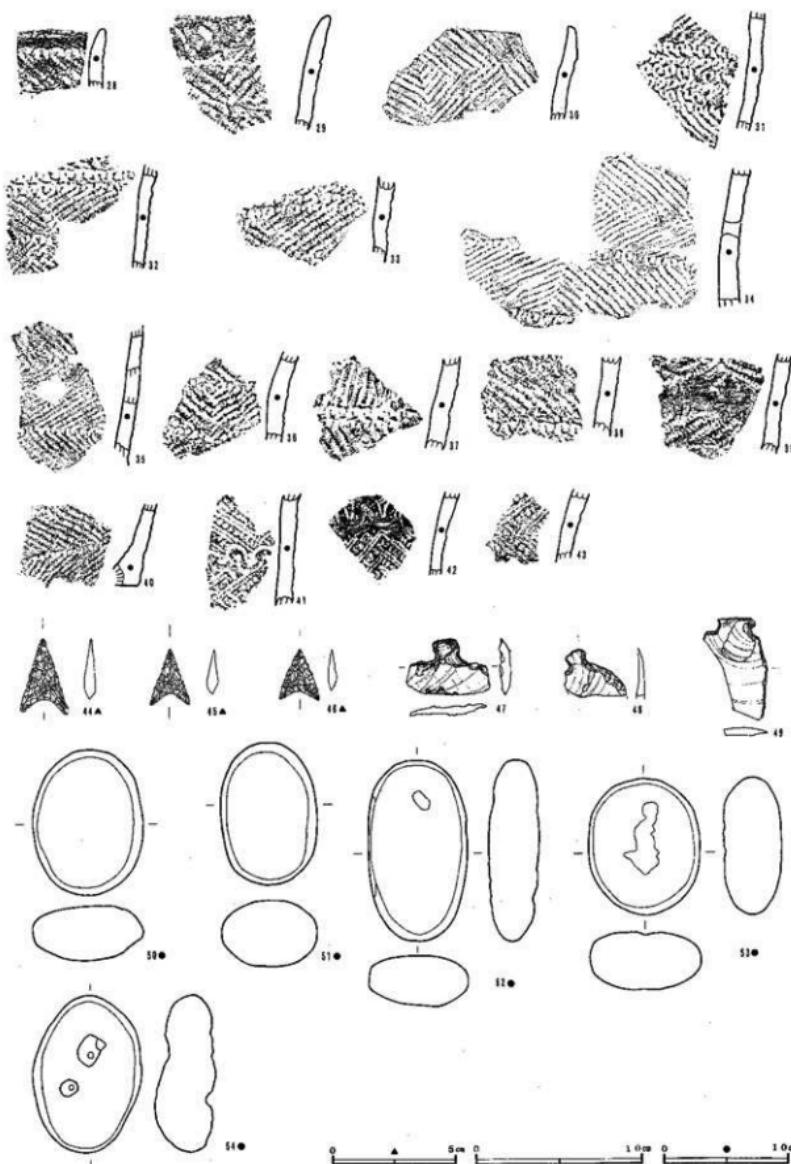
3は2条1対の爪形の刻みを有する平行沈線により幾何学文を施し、円形貼付文を付す。4は部分的に爪形の刻みを施した平行沈線を、上端は2条、下端は1条として口縁部文様帯を区画する。区内には3条1単位の半截竹管による斜位の平行沈線やコンパス文・円形貼付文を施す。平行沈線はその一端を重ねて施し、中央の1条を除く外側の2条に爪形の刻みが施される。5是有刻の平行沈線により口縁部文様帯を区画し、文様帯内には



第4図 第8号住居址②



第5圖 第8號住居址出土遺物①



第6圖 第8號住居址出土遺物②



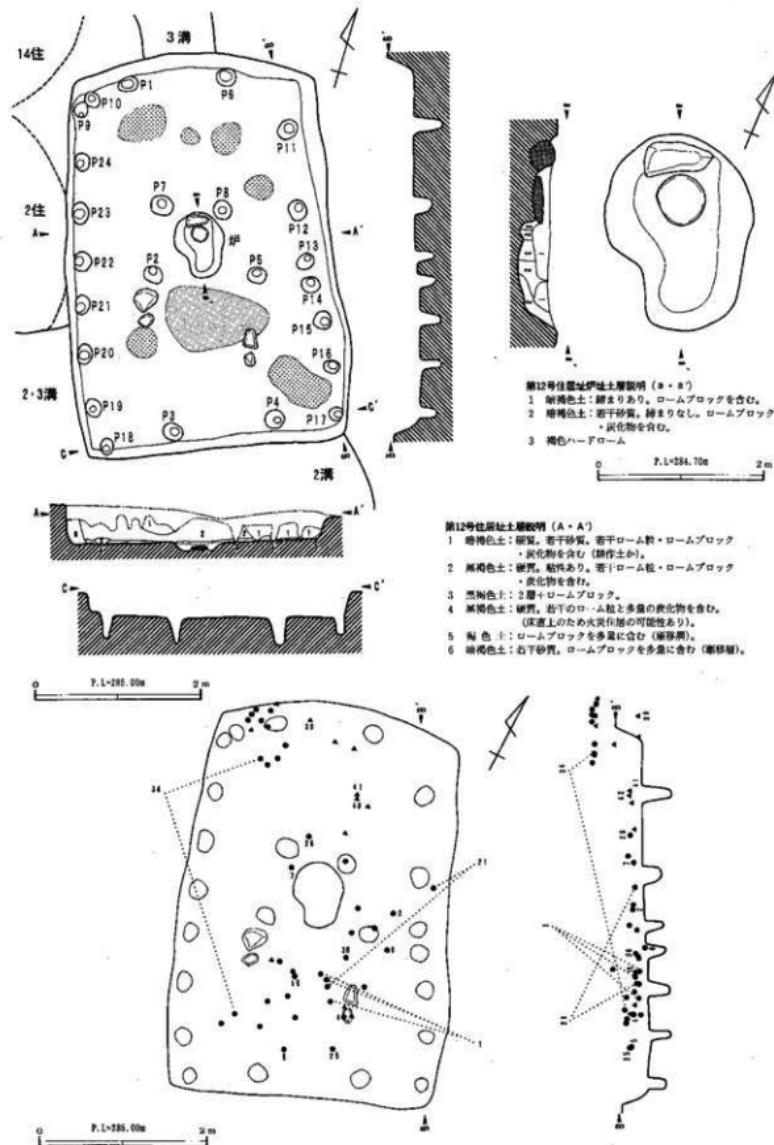
第7図 第8号住居址出土遺物③

有刻の平行沈線を斜位に施し、円形貼付文を付す。以下は多段のループ文を施す。6は口縁部直下に半截竹管によるコンパス文を施して口縁部文様帯の上端を区画する。文様帯内には円形刺突を沿わせた有刻の平行沈線により鋸齒状文を施し、無文部分には3本1単位の刻みや円形貼付文を施す。7は有刻の平行沈線により口縁部文様帯の上端を区画する。文様帯内には斜位・縦位・横位に有刻及び無刻の平行沈線を施し、半截竹管によるコンパス文を施す。横位に施された平行沈線は口縁部文様帯の下端を区画している可能性もある。その他円形貼付文を付す。8は口縁部直下に4～5本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。口縁部文様帯の上端は2条1対の平行沈線により、下端は有刻の平行沈線によりそれぞれ区画する。文様帯内には有刻の平行沈線を斜位に施し、3本1単位の刻みを充填する。また中央に円形刺突を施した円形貼付文を有する。以下はループ文を施す。9は2条1対の半截竹管を用いた平行沈線により口縁部文様帯の下端を区画し、文様帯内には半截竹管を用いた斜位・弧状等の平行沈線を施す。平行沈線には爪形の刻みを施すが、施文は平行沈線からズれており、やや粗雑な印象を受ける。以下はループ文及び閉端環付のLR単節斜繩文を施す。10は有刻の平行沈線により口縁部文様帯の下端を区画する。文様帯内には有刻の平行沈線を斜位に施し、無文部には先端部の尖った工具による2段の刺突列を横位に施す。また同様の工具により刺突を施した貼付文を付す。以下は多段のループ文を施す。11は下端に指頭状工具による円形刺突を有する隆帯を波頭部より垂下させる。垂下した隆帯を中心として平行沈線による菱形文や円形貼付文を施す。12は口縁部文様帯内に半截竹管によるコンパス文や渦巻文を施し、円形貼付文を付す。13は口縁部付近とみられる脣部で、半截竹管を用いた集合沈線により鋸齒状文を施し、沈線はその一端を重ねて施文される。また中央に円形刺突を施した貼付文を付す。以下は多段のループ文を施す。14は頸部に脣部がみられ、頸部で外反して開く器形を呈するとみられる。羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を地文とし、頸部に半截竹管による平行沈線を1条巡らせる。その直下には半截竹管によるコンパス文を施す。15は半截竹管による平行沈線を巡らせ、直下に支点を上下にズラしたコンパス文を施し、円形貼付文を付す。以下は閉端環付のRL単節斜繩文を施す。

16・17は口縁部直下に3～4本1単位の鋸齒状の刻み列を施す口縁部片で、以下は多段のループ文を施す。いずれも口唇部は内削ぎ状を呈し、16は口唇部に集合角状突起を有する。

18～27は半截竹管によるコンパス文を施すものである。18・19は平縁の口縁部片で、18は口唇部に（集合）角状突起及び上面に刻みを施した臼歯状突起を有する。それ以外は脣部片である。18・20・21・26・27は真正のコンパス文を施し、27は幅の広い半截竹管により浅く施しているためコンパス文内に地文が残る。19・22～25のコンパス文は施文がやや崩れ、部分的に波状ないし鋸齒状を呈する。いずれも多段のループ文や羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を地文とし、19は結果による羽状構成をとる。

28～40は単節斜繩文のみを施すもので、28～30は口縁部、31～39は脣部、40は底部片である。いずれも多段のループ文やLR・RL単節斜繩文を地文とする。28・31～38・40は閉端環付で、29～37・39・40は羽状構成をとる。また34は焼成後の穿孔を有する。



第8図 第12号住居址

ピット深度計測表

P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20
35.5	27.5	32.0	35.0	31.5	31.0	15.0	20.5	43.0	24.0	37.5	24.5	22.5	24.5	28.0	25.5	22.0	33.0	24.5	51.0
P21	P22	P23	P24																
50.5	31.0	46.5	47.0																

41~43は羽状構成をとる正反の合を地文とする胴部片である。41・42はLRとRLをRに撲ったものとLに撲ったものを地文とし、半截竹管によるコンパス文を巡らせる。43はLR・RRをRに撲ったものとRL・LLをLに撲ったものを施す。

55は口縁部～底部まで遺存する深鉢で、底部から緩やかに外反して開き、胴部中位が張り、頸部でいたん括れて外反して開く器形を呈する。口縁部は丸頭状を呈する。口縁部直下より、1~2条一対の平行沈線を横位に4条巡らせて4段に横位区画し、上位2段の区画内は平行沈線を垂下させて縦位区画する。さらに2段目の縦位区画内は同じく平行沈線により斜位に区画される。地文は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文である。

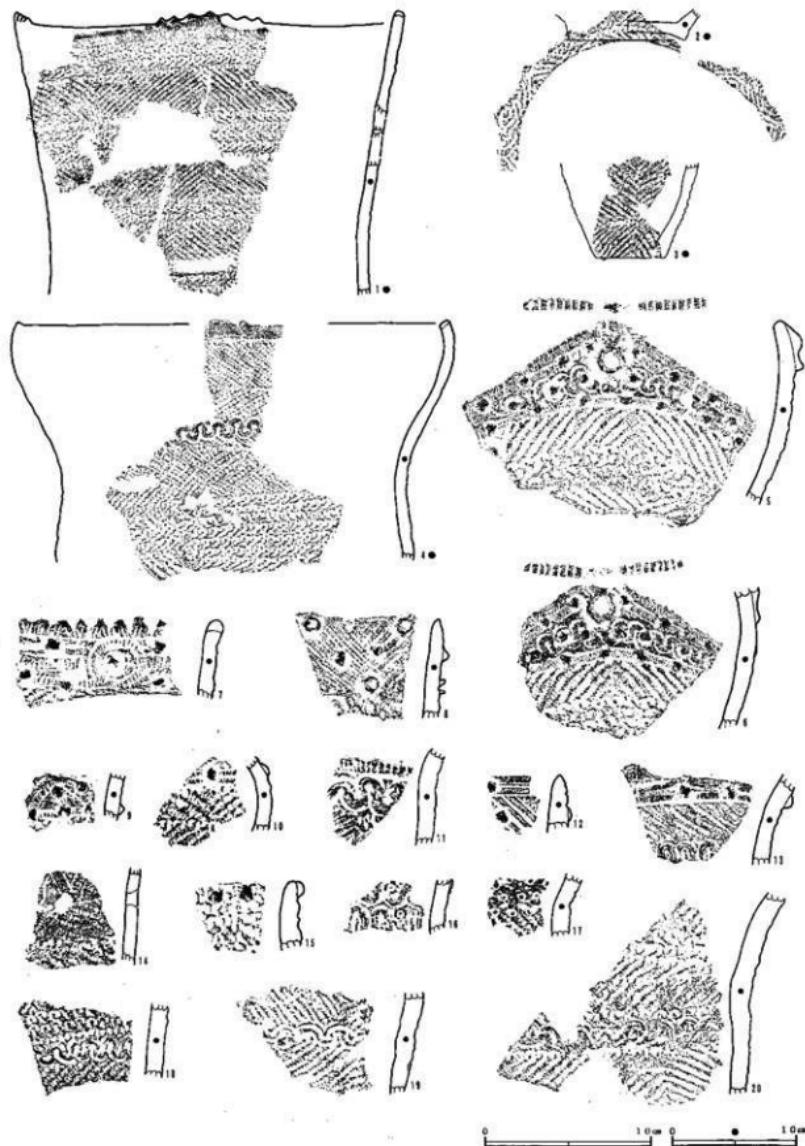
44~46は凹基無茎縫で、いずれもチャート製である。47~49は石底で、47・48は横型、49は縦型である。いずれも黒色頁岩製である。50・51は磨石、52~54は凹石である。いずれも粗粒安山岩製である。

第12号住居址（第8~10図）

位 置 調査区南東側、東側へ傾斜してゆく台地の端部である27~28-27グリッドに位置し、標高は285.0m程である。該期の住居址の中で最も北側にあり、第8号住居址からも40m程離れている。**重複関係** 繩文時代中期後半の住居址である第2・14号住居址に隣接し、第2号住居址とは一部重複していると考えられる。また中近世の溝である第2・3号溝に切られる。**遺存状態** 周辺遺構に切られているものの掘り込みがしっかりしているため、おおむね遺存状態は良好である。規模・形状 北西～南東方向に主軸をとり、主軸方位はN=19°Wである。長軸4.77m・短軸3.16mを測り、平面形は北壁のやや張った長方形を呈する。壁・壁周溝 壁高は東壁で7~32cm、西壁で24~50cm程で、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁周溝は検出されなかった。柱穴 主柱穴はP1~P6の6本柱を想定した。この他、炉の北側で主軸を挟んで対になるような柱穴が2基（P7・P8）、東壁及び西壁に沿って16基からなる柱穴列が検出された（P9~P24）。**炉址** 住居址中央部で検出された。掘り方は、長軸79cm、短軸60cm、床面からの深さ14.5cmを測り、平面形は北西部の張り出した不整梢円形を呈する。炉の北壁には石を1個配し、その南に円形の扁平な石を置く。配石の南側には梢円形を呈するとみられる掘り込みを持つ。また炉址を取り囲むように焼土ブロック及び炭化物ブロックが検出されている。**遺物出土状況** 住居址南側及び北西隅に集中して分布する。垂直分布と合わせてみてゆくと、住居址北西隅の遺物は床面からかなり離れた上層で検出され、住居址中央から南側にかけて検出された遺物は、住居址の中層～下層に集中して分布する傾向が窺える。**遺物** 土器36点・石器7点を図示し得た。器種は全て深鉢である。地文は単節斜繩文が主体で（1~3・5~11・13~15・17~35）、ほとんどが0段多条である。その他正反の合を地文とするもの（4~36）を若干含む。いずれの土器も胎土には纖維を含む。

1~4は復元個体で、1~3は地文のみを施す。1は口縁部～胴部中位である。胴部中位で緩やかに括れ、直線的に開く器形を呈する。口縁部は緩やかな波状を呈するとみられ、口唇部は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する。波頂部には8個ほどを1単位とする集合角状突起を有する。外面には多段のループ文と羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を交互に施す。2~3は底部片で、いずれも緩やかに立ち上がる上げ底状を呈する。外面には羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施す。4は口縁部～胴部中位で、膨らみを持った胴部から頸部で強く括れて外反し、口縁部直下で内湾して開く器形を呈するとみられる。口縁部は平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈し、3個以上を1単位とする集合角状突起を有する。口縁部直下には4~6本1単位の鉗齒状の刻み列を施す。頸部には半截竹管によるコンパス文を巡らせる。口縁部～頸部は羽状構成をとる正反の合（LR・RLをRに撲ったものとLに撲ったもの）、頸部は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文、胴部は多段のループ文をそれぞれ地文とし、頸部では正反の合と単節斜繩文が交差して斜格子状を呈する。

5~14は半截竹管を用いた平行沈線により文様を施すものである。5~8・12は口縁部片、9~11・13・14は



第9圖 第12号住居址出土遺物①

脣部片だが、9～11・13は口縁部文様帶の一部とみられる。口縁部は波状線（5・6）及び平線（7・8・12）がみられる。口縁部文様帶内には地文は施さないものが主体である。また平行沈線には有刻のもの（5～11）と無刻のもの（12～14）の二者がある。

5・6は同一個体で、口縁部付近で内湾して開く器形を呈するとみられる。波頂部からは指頭状工具による円形刺突やヘラ状工具による刻みを施した隆帯を垂下させ、波頂部を抉んで両脣の口唇部には有刻の白歯状突起を有する。口縁部直下には2～4本1単位の鋸齒状の刻み列を施し、同様の刻みを施した平行沈線により口縁部文様帶の上下を区画する。口縁部文様帶内には半截竹管によるコンパス文を巡らせ、円形貼付文を付す。以下は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文及び多段のループ文を施す。また5は口縁部文様帶直下に焼成後の穿孔を有する。7は口唇部8個以上を1単位とする集合角状突起を有する。口縁部直下には4～8本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。部分的に刻みを施した2条1単位の平行沈線により区画された口縁部文様帶内には、2条1単位の有刻の平行沈線により円形文を施し、円形貼付文を付す。平行沈線はいずれもその一端を重ねて施す。また無文部には集合化した縦の刻みを施す。以下は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を施す。8は直線的に開く器形を呈するとみられる。丸頭状を呈する口唇部を有し、口縁部直下には有刻の平行沈線を施す。全面に地文が施され、羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を施す。口縁部には円形貼付文が付され、刺突を施すものと施さないものの二者がみられる。9は有刻の平行沈線により文様帶の下端を区画しているとみられ、文様帶内にも同様に有刻の平行沈線による弧状のモチーフや円形貼付文が施される。以下はループ文を施す。10は口縁部が内湾して開く器形とみられる。2条1対の有刻の平行沈線により口縁部文様帶の下端を横位区画し、区画内には有刻の平行沈線を斜位に施す。また円形貼付文を付す。以下は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施す。11は口縁部が外反して開く器形を呈するとみられる。有刻の平行沈線を横位に巡らせ口縁部文様帶の下端を区画し、文様帶の直下には半截竹管によるコンパス文を施す。以下は閉端環付のLR単節斜繩文を施す。12は内削ぎ状を呈する口唇部を有する。平行沈線により口縁部文様帶の上端を区画し、数条の平行沈線を斜位に施す。また円形貼付文を付し、無文部には刻みを充填しているとみられる。13は外反して開く器形を呈するとみられる。口縁部文様帶の下端を2条1対の平行沈線により区画する。平行沈線上には貼付文を付す。以下はRL単節斜繩文を施し、半截竹管によるコンパス文を1条巡らせる。14は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を地文とし、平行沈線により鋸齒状文を浅く施す。

15～17は円形貼付文や円形刺突を施すものである。15は口縁部で口唇部は内削ぎ状を呈する。多段のループ文を地文とし、口縁部直下に円形貼付文を施す。16・17は脣部片で、16は半截竹管によるコンパス文を2条巡らせ、円形竹管による刺突を中央に施した円形貼付文を付す。17は外反して開く器形とみられる。文様施文部分は地文を磨り消し、円形竹管による刺突穴を施す。以下はRL単節斜繩文を施す。

18～20は多段のループ文や羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を地文とし、半截竹管によるコンパス文を施すもので、いずれも脣部片である。20は外反して開く器形を呈するとみられる。19・20のコンパス文はやや崩れ、部分的に波状を呈する。

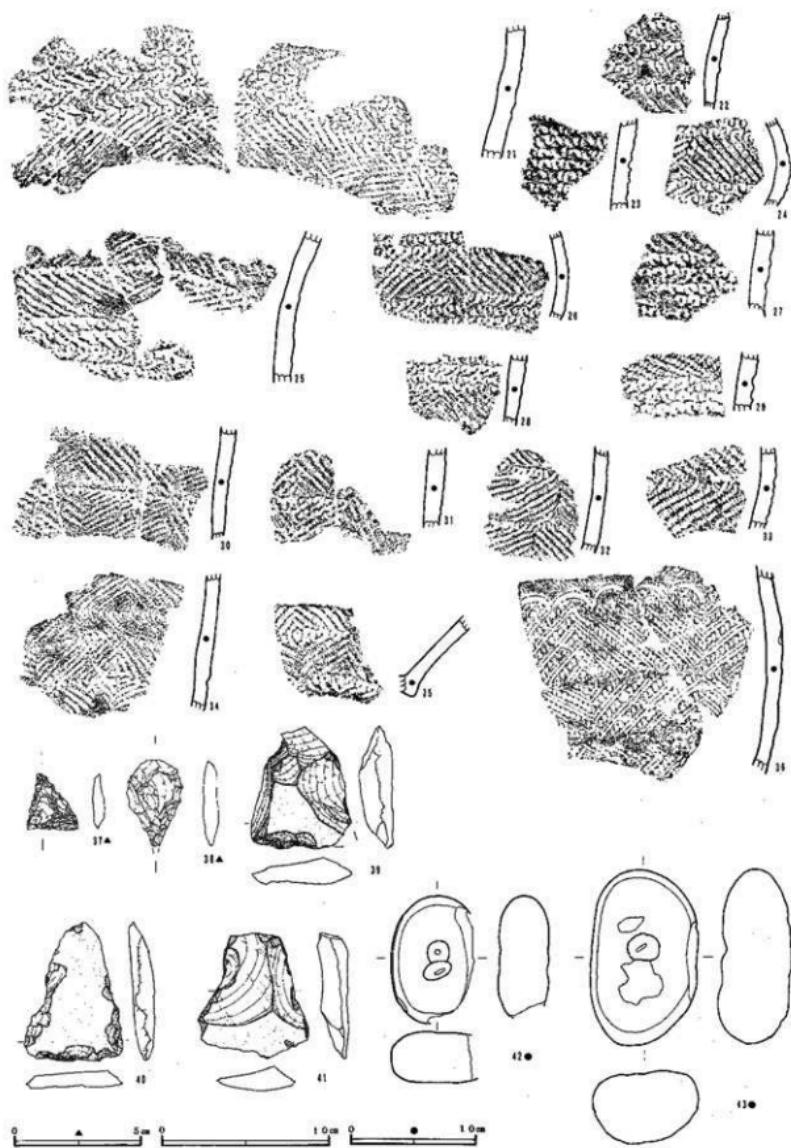
21～35は地文のみを施すもので、21～34は脣部片、35は底部片である。器形は直線的に立ち上がるものが主体で（21・27～34）、その他外反して立ち上がるもの（22・23・25）や内湾して立ち上がるもの（24・26）がみられる。また35は底部直上で直立し、直線的に立ち上がる器形を呈する。多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施す。

36は羽状構成をとる正反の合（LR・RLをRに撲ったものとLに撲ったもの）を地文とし、幅広の半截竹管によるコンパス文を浅く施す。

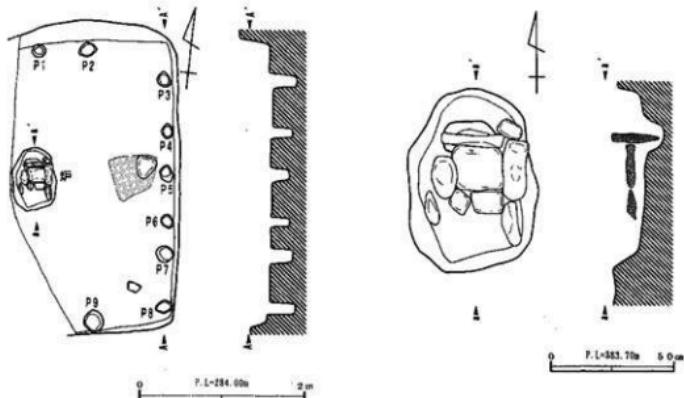
37はチャート製の石礫である。38は黒色頁岩製の石錐である。39～41は打製石斧である。39は珪質砂岩製、40は砂岩製、41は黒色頁岩製である。42・43は粗粒安山岩製の凹石である。

第20号住居址（第11図）

位 置 調査区南西側、南西方向に傾斜してゆく台地である23-30グリッドに位置し、標高は283.5m程度である。該期の住居址のうち最も西側に位置する。重複関係なし。遺存状態 住居址西半が切られているものの、東半部の遺存状態は良好である。規模・形状 ほぼ南北方向に主軸をとり、主軸方位はN-6°-Wである。長軸3.77m・短軸約2.2mを測り、平面形は北側のやや張った隅丸長方形を呈する。壁・壁周溝 壁高は北壁で40～49cm、南壁で12～19cmを測り、外傾して立ち上がる。また壁周溝は検出されなかった。柱 穴 西壁を除き壁際を巡る



第10圖 第12號住居址出土遺物②



ピット深度計測表

P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
43.0	35.0	32.5	25.5	28.0	24.0	29.5	34.0	67.0

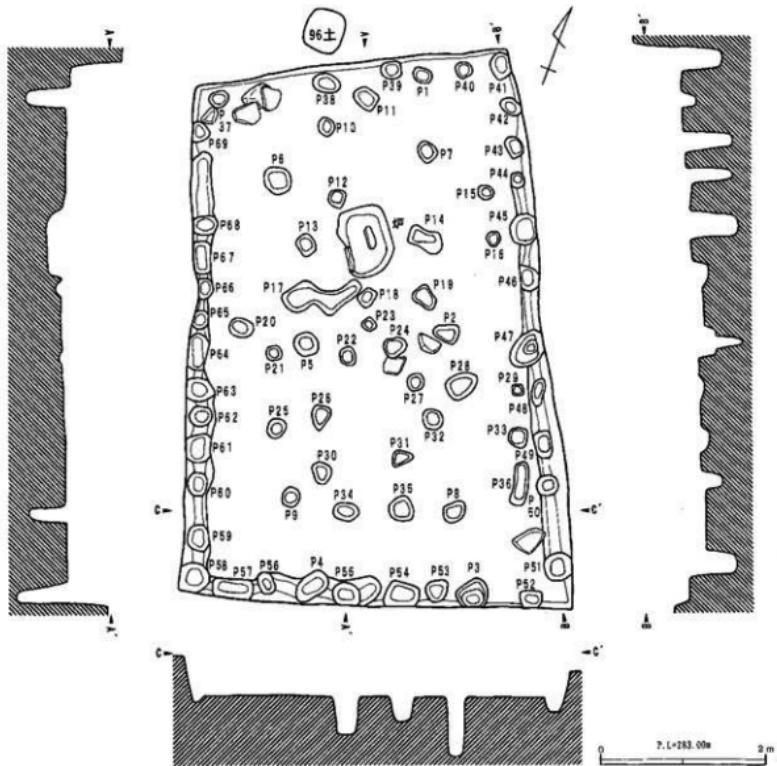
第11図 第20号住居址

柱穴列が検出された(P 1～P 9)。西壁の状況は不明ながら、第12号住居址と同様に壁際を全周していたと考えられ、住居址中央では柱穴は検出されなかった。これらのうちP 1・P 2・P 9は他の柱穴に比べ深さを有しており、主柱穴の一部と考えられる。炉 址 石闇炉である。住居址中央やや西寄りのところで検出された。掘り方は、長軸74cm・短軸52.5cm・床面からの深さ9cmを測り、平面形は不整梢円形を呈する。炉中央部には石組が配され、南側を開けて「コ」字状に畳み、中央に扁平な石を敷く。遺物出土状況 遺物量は少量で、図示可能な遺物は出土しなかった。

第30号住居址(第12～14図)

位 置 調査区南側、南東方向へ緩やかに傾斜してゆく台地の先端部にあたる30～31-35グリッドに位置し、標高は283.0m程である。該期の住居址の中で最も南に位置する。重複関係 なし。遺存状態 良好である。規模・形状 北西～南東方向に主軸をとり、主軸方位はN-20°-Wである。長軸6.54m・短軸4.64mを測る。北壁・西壁に較べて南壁・東壁のほうが長いため、平面形はやや台形に近い長方形を呈する。壁・壁周溝 壁高は東壁で18～63cm、西壁で47～60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。また壁周溝は北壁を除き壁柱穴をつなぐような形で検出された。柱 穴 柱穴は床面及び壁際にて多数検出された。北西隅の状況は不明だが、疊下の未検出の柱穴を想定してP 1～P 5 + 1本の6本柱の主柱穴配置と推定される。また市之関遺跡出土の住居址(尾崎1967)に類似した構造を想定してP 2・P 5～P 9の6本柱を想定することも可能であろう。この他壁際に沿って巡る柱穴列が検出されている。また東壁沿いの柱穴列の内側にも柱穴列(P 15・P 16・P 29・P 33・P 36)が検出されている。炉 坂 住居址中央やや北寄りのところで検出された。掘り方は長軸84cm・短軸58cm・床面からの深さ18cmを測り、平面形は不整梢円形を呈する。西辺南側及び中央部には棒状の石を配す。遺物出土状況 住居址全面にまばらに分布し、垂直分布も上層から床面までまばらに分布する。遺 物 土器13点・石器4点を図示し得た。器種は全て深鉢である。地文は単節斜縞文が主体で(1・3～5・7～10)、ほとんどが0段多条である。その他正反の合を地文とするもの(11・12)や組紐文を地文とするもの(13)もみられる。いずれの土器も胎土には纖維を含む。

1は復元個体で、緩やかに立ち上がる上げ底状を呈する底部片である。外面には羽状構成をとる閉端環付の



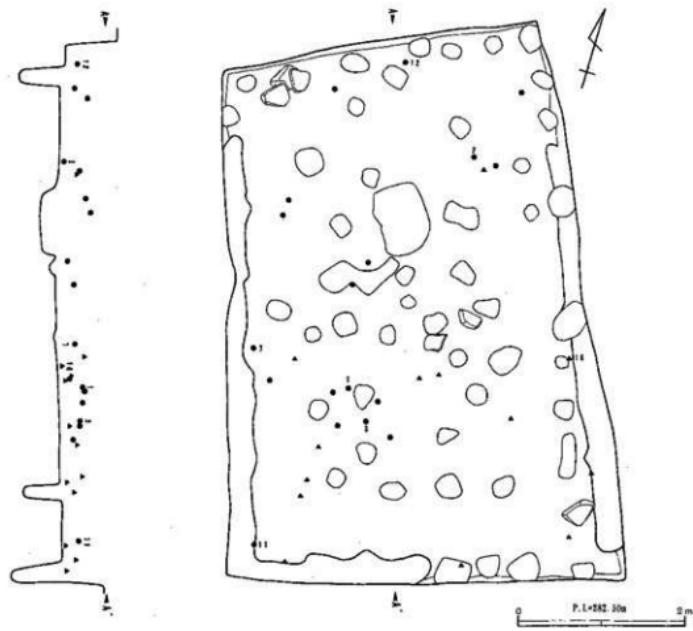
ピット深度計測表

P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19	P 20
54.0	68.0	49.0	60.0	54.0	41.0	14.0	72.0	41.0	43.0	54.0	70.0	52.0	47.0	5.0	23.0	13.0	8.0	5.0	60.0
P 21	P 22	P 23	P 24	P 25	P 26	P 27	P 28	P 29	P 30	P 31	P 32	P 33	P 34	P 35	P 36	P 37	P 38	P 39	P 40
19.0	25.0	16.0	53.0	49.0	46.0	8.0	15.0	12.0	16.0	7.0	65.0	17.0	46.0	29.0	11.0	57.0	53.0	49.0	37.0
P 41	P 42	P 43	P 44	P 45	P 46	P 47	P 48	P 49	P 50	P 51	P 52	P 53	P 54	P 55	P 56	P 57	P 58	P 59	P 60
44.0	18.0	61.0	52.0	62.0	26.0	65.0	18.0	24.0	40.0	59.0	46.0	52.0	40.0	59.0	37.0	27.0	56.0	53.0	49.0
P 61	P 62	P 63	P 64	P 65	P 66	P 67	P 68	P 69											
34.0	41.0	55.0	41.0	27.0	64.0	10.0	48.0	43.0											

第12図 第30号住居址①

LR・RL 単節斜縞文を施す。

2～6は半截竹管を用いた平行沈線により文様を施すものである。2は口縁部片、3～6は洞部片である。2は平縁で、口唇部は角頭状を呈する。有刻の平行沈線により口縁部文様帶の上端を区画する。文様帶内には同様の工具により鋸齒状文を施し、円形貼付文を付す。地文は施されない。3は洞部片で、多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL 単節斜縞文を地文とし、沈線の一端を重ねて施文した3条1単位の平行沈線によ



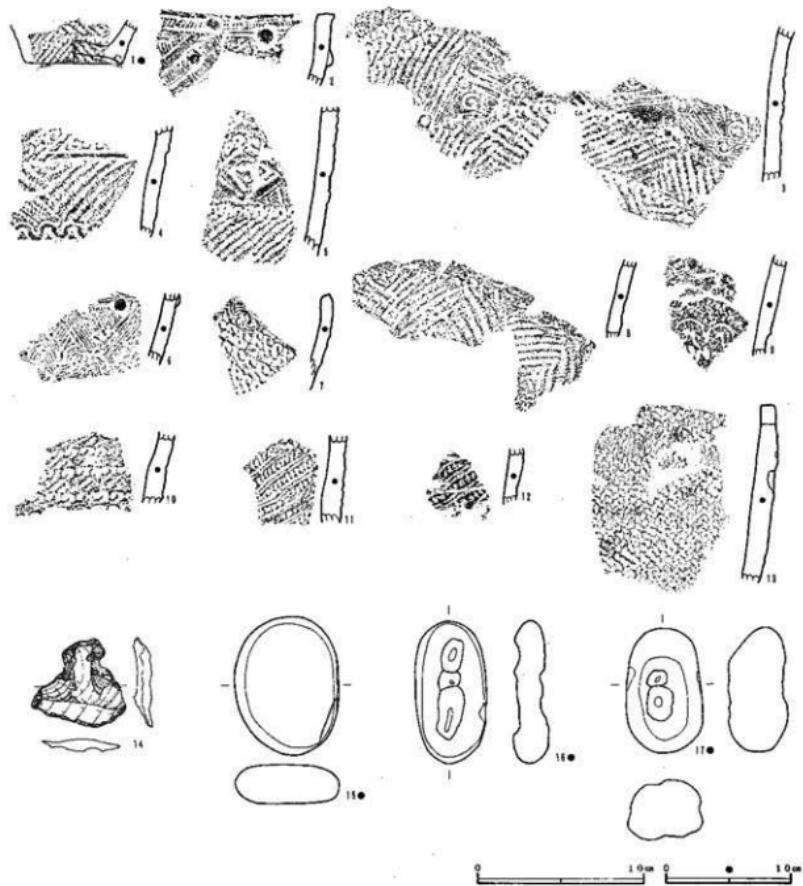
第13図 第30号住居址②

り櫛齒状文を施す。櫛齒状文の基点及びその反対側には半截竹管による円形文を施す。文様を施文する箇所は地文を磨り消している。4は平行沈線により三角文及びコンパス文を施し、文様施文部分の地文は磨り消されない。多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を地文とする。5は1～2条1単位の平行沈線により菱形文を施す。ループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を地文とするが、菱形文の周辺では文様に合わせ斜位にループ文を施す。6は口縁部文様帶直下の部位とみられ、円形貼付文を伴う平行沈線により口縁部文様帶の下端を区画していると考えられる。以下は7～8本1単位の櫛齒状工具により櫛齒状文及びコンパス文を施す。

7～9は半截竹管ないし櫛齒状工具によるコンパス文を施すものである。7は口縁部片、8・9は胴部片である。7は波状線で、口唇部は内削ぎ状を呈する。波頂部から口縁部に沿って3本1単位の櫛齒状工具により短いコンパス文を施す。多段のループ文を地文とし、口縁部に沿って斜位に施される。8は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を地文とし、半截竹管によるコンパス文を施す。9は不明瞭ながら閉端環付の単節斜繩文を地文としているとみられ、半截竹管によるコンパス文を施す。

10～13は地文のみを施すもので、10～12は胴部片、13は口縁部片である。10は多段のループ文を施し、ループ文の直下には所謂「自縫痕」が看取される。11・12は正反の合（LR・RLをLに擦ったもの）を施す。13は粗紐文を地文とし、口唇部には無刻の白歯状突起を持つ。

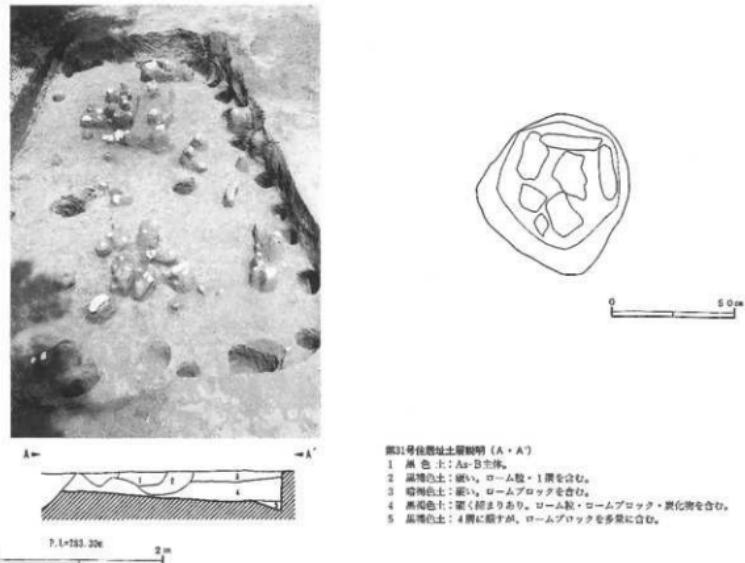
14は黒色頁岩製の横型の石匙である。15は磨石、16・17は凹石である。15～17は粗粒安山岩製で、15は被熱の痕跡が認められる。



第14図 第30号住居址出土遺物

第31号住居址（第15～17図）

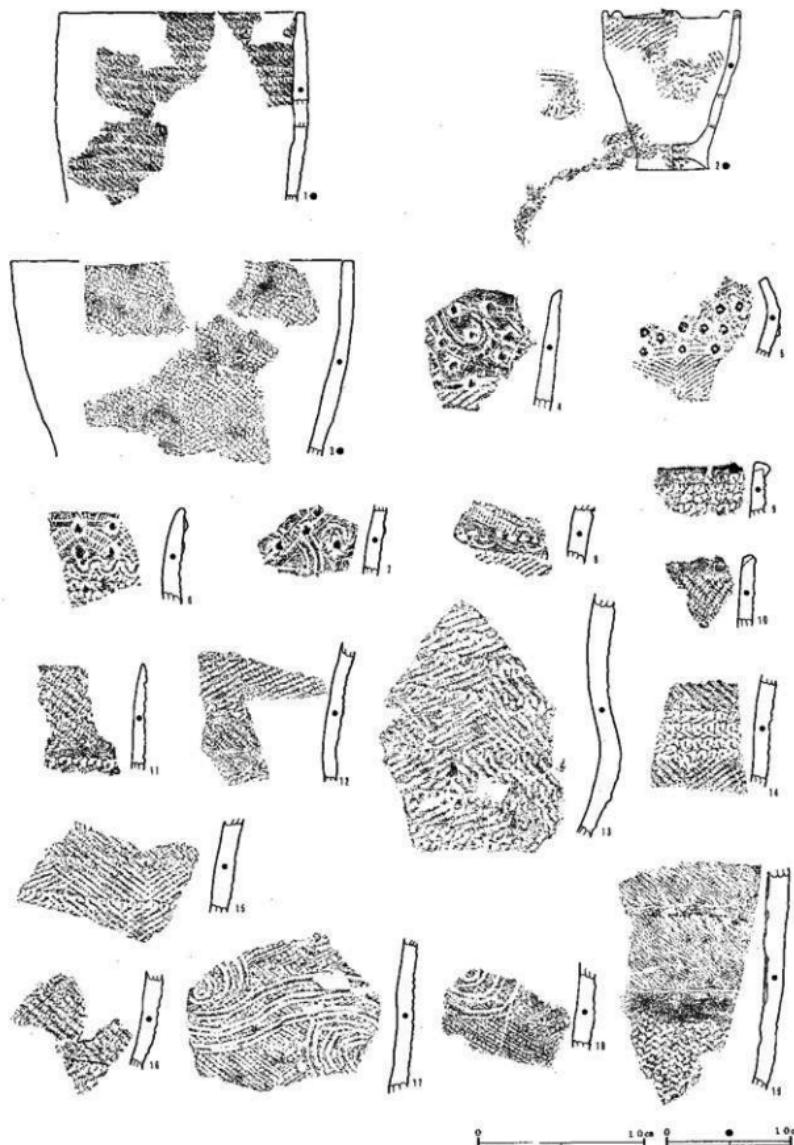
誠に遺憾ながら本址の平面図を紛失してしまったため、その位置や規模・形状等は判然としないが、位置は27～28-34グリッド周辺、長軸約5m程で平面形は隅丸長方形を呈するとみられ、土層断面図より壁面は直立して立ち上がっている。柱穴 床面及び壁際にて検出されている。炉址 掘り方は長軸65cm・短軸61cmを測り、平面形は不整円形を呈する。石組炉と見られるが詳細は不明である。遺物出土状況 住居址北側及び南側に集中して出土している。遺物 土器19点・石器4点を認示し得た。地文は単節斜繩文が主体で（1・2・4～6・8～16）、ほとんどが0段多条である。その他正反の合を地文とするもの（17-18）や組紐文を地文とするもの（3）、直前段反撗と組紐を地文とするもの（19）等がある。いずれの土器も胎土には纖維を含む。



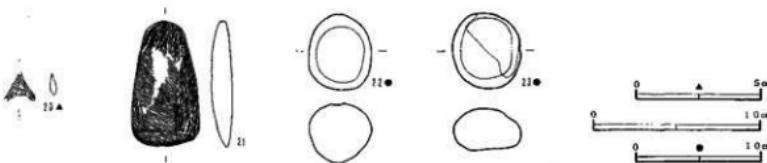
第15図 第31号住居址

1~3は復元個体で、1・2は単節斜繩文を、3は組紐文をそれぞれ地文とするものである。いずれも地文のみを施す。1は口縁部～胴部中位で、胴部中位が緩やかに張り、直立して開く器形を呈する。平縁で、口唇部は角頭状を呈する。外面には多段のループ文を施す。2は小型の深鉢で、図上で復元したものである。短く直立する脚部を有する上げ底状の底部から外反して立ち上がり、胴部中位で緩やかに屈曲して直立して開く器形を呈する。口縁部は平縁とみられ、8単位ほどの小突起を有するとみられる。口唇部は内削ぎ状を呈する。外面は羽状構成をとる閉端環付のLR+RL単節斜繩文及び多段のループ文を施す。3は口縁部～胴部中位で、緩やかに内湾して開く器形を呈する。口縁部は平縁で口唇部は角頭状を呈する。外面には全面に組紐文を施す。

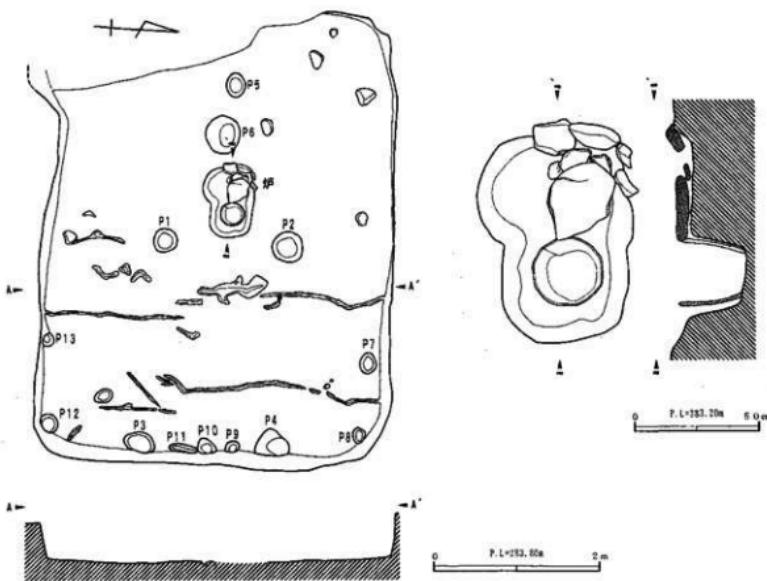
4~8は半截竹管を用いた平行沈線により文様を施すもので、4~6は口縁部片だが、いずれも口縁部文様帯の一部と考えられる。口縁部は波状線(4・5)と平縁(6)の両者がみられ、いずれも口唇部は内削ぎ状である。突起を有するものはみられない。8を除きいずれも円形貼付文を有する。また口縁部文様帯内には地文は施されない。4は平行沈線により口縁部文様帯を区画し、上端を区画する平行沈線には刻みを施す。2~3条1対の平行沈線により蕨手文や幾何学文等を施す。平行沈線には部分的に刻みを施す。以下はLR単節斜繩文を施す。5は小型の深鉢で、頭部で屈曲して外反し、口縁部直下で内湾して開く器形を呈する。口縁部文様帯は上端を1条の、下端を2条1対の、爪形の刻みを施した平行沈線により区画し、文様帯内には同様の刻みを施した3条1対の平行沈線により鋸齒状文等を施す。また円形文や中央に円形刺突を施した円形貼付文を有する。以下は羽状構成をとるLR+RL単節斜繩文を施す。6は平縁で、口縁部直下には4~5本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。口縁部文様帯は、上端を平行沈線により、下端を半截竹管によるコンパス文により区画する。文様帯内には2条1対の有刻の平行沈線により鋸齒状文を施す。以下は多段のループ文を施す。7は沈線の一端を重ねて施した2条1対の平行沈線により蕨手文・幾何学文等を施す。平行沈線には部分的に刻みを施す。8は半截竹管によるコンパス文により口縁部文様帯の下端を区画しているとみられる。文様帯内には有刻の平行沈線を斜位に施し、先端部の尖った工具による刺突列を沿わせる。以下は閉端環付のLR単節斜繩文を施す。



第16图 第31号住居址出土遗物①



第17図 第31号住居址出土遺物②

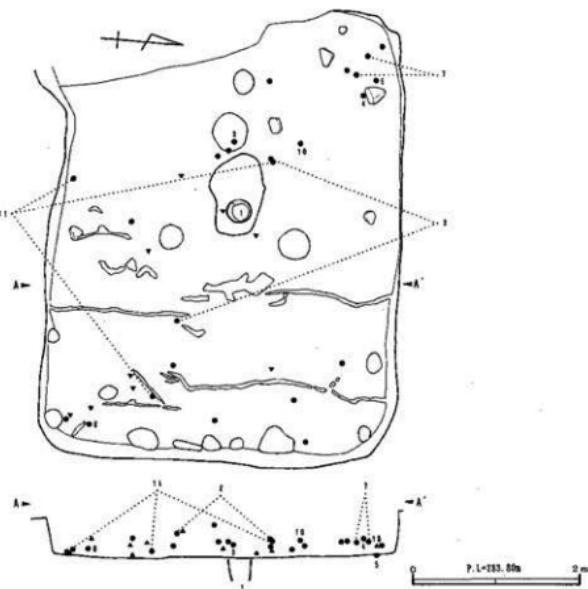


第18図 第32号住居址①

9は平縁の口縁部で、(集合)角状突起を有する。口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部直下には部分的に縦位の短沈線を施す。以下は多段のループ文を施す。

10～16は単節斜繩文のみを施すもので、10・11は口縁部、12～16は脣部である。10は平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈し、集合角状突起を有する。外面は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を施す。11も平縁で、口唇部は丸頭状を呈する。外面には羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施す。12～16は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施し、14は多段のループ文を伴う。13は脣部中位が張り、頬部で括れて外反して聞く器形を呈するとみられる。

17・18は同一個体の脣部片で、羽状構成をとる正反の合(LR・RLをRに撲ったものとLに撲ったもの)を地文とする。半截竹管を用いた3条1対の平行沈線により渦巻文等を施すが、沈線の一端は重ねない。



第19図 第32号住居址②

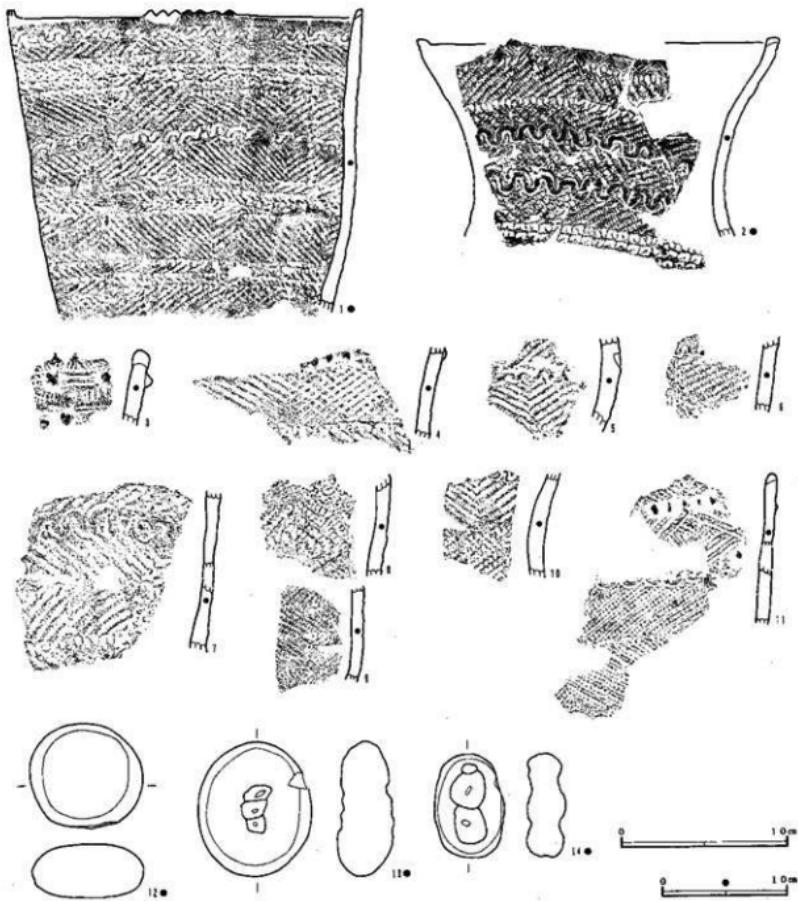
19は直前段反燃 RR 及び組紐を地文とする脚部片である。直前段反燃の施文単位ごとに所謂「自縛痕」がみられる。直前段反燃と組紐の間に幅狭の無文帯を挟む。

20はチャート製の凹基無茎縫である。先端部及び脚部の一部を欠損する。21は蛇紋岩製の磨製石斧である。22・23は粗粒安山岩製の磨石で、23は炭化物が付着する。

第32号住居址（第18～20図）

位置 調査区南西側、南西方向に緩やかに傾斜してゆく台地である27-33グリッドに位置し、標高は283.5m程度である。重複関係なし。遺存状態 西壁のほとんどを壊されるものの遺存状態は比較的良好である。規模・形状 ほぼ東西方向に主軸をとり、主軸方位はN-87°Eである。長軸5.5m・短軸4.28mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。また床面上には南北方向に延びる地割れ痕が数条検出されている。壁・壁周溝 壁高は北壁で約52cm、南壁で約42cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁周溝は検出されなかった。柱穴 床面上及び東壁沿いの柱穴列が検出された（P 1～P 13）。西壁の大部分を欠損し、柱穴の深さが不明のため主柱穴配置は不明瞭だが、P 1～P 4を主柱穴とし、未検出の2本を加えて、第12・30号住居址と同様に6本柱の主柱穴配置が想定される。

炉址 土器埋設石組炉である。住居址中央や西側で検出された。掘り方の平面形は南西側の張った不整梢円形を呈し、長軸89cm・短軸61cm・床面からの深さ約10cmを測る。炉西側に石組を、炉東側に埋設土器（第20図1）を配する。石組みは北辺及び西辺を「L」字状に張り、中央には扁平な石を敷く。石組みに接して脚部下半を欠損した土器を正位の状態で埋設する。土器埋設部は床面からの深さ30cmを測る。遺物出土状況 住居址全面に散漫に分布するが、住居址北西部及び南東部にやや集中する。また垂直分布を見てゆくと、中層から床面近くに集中する傾向が窺える。遺物 土器11点・石器3点を示した。器種は全て深鉢である。地文は単節斜繩文が主体で（1・2・4～9）、ほとんどが0段多条である。その他単節斜繩文と複節斜繩文を地文とするもの（10）



第20図 第32号住居址出土遺物

や正反の合を地文とするもの（11）を含む。いずれの土器も胎土に纖維を含む。

1・2は口縁部～胴部の復元個体である。1は炉の埋設土器で、胴部中位が若干張り、緩やかに外反して開く器形を呈する。平縁で7個ほどを1単位とする集合角状突起を4単位施す。口唇部は内削ぎ状を呈し、口縁部直下には3～4本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜縄文を地文とし、半截竹管によるコンバス文を口縁部直下及び胴部に巡らせる。2は膨らみを持った胴部から頸部で括れて外反し、口縁部直下で若干内湾して開く器形を呈する。平縁で（集合）角状突起を有し、口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部直下には3本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。口縁部～頸部は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜縄文を地文とし、頸部には半截竹管によるコンバス文を2条巡らせる。以下は多段のループ文

を施す。

3・4は半截竹管を用いた平行沈線により文様を施すものである。3は集合角状突起を有する平線の口縁部片で、口縁部直下には5~6本1単位の鋸歯状の刻み列を施す。口縁部文様帶は円形貼付文を伴う2条1対の平行沈線により区画し、文様帶内にも刻み列を施す。4は胴部片で、継やかに外反して開く器形と考えられる。円形貼付文を伴う有刺の平行沈線により口縁部文様帶の下端を区画しているとみられ、以下は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文を施すが、原体の異なる2条が交差している箇所があるため、部分的に斜格子状を呈する。

5~7は半截竹管によるコンバス文を施すもので、いずれも胴部片である。羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を地文とし、7は閉端環付である。8・9は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文のみを施すものである。8は結束による羽状構成をとり、9は閉端環付である。10は上位に羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文を、下位にLRL複節斜繩文を地文とし、半截竹管によるコンバス文を施す。

11は羽状構成をとる正反の合（LR・RLをRに撲ったものとしに撲ったもの）を地文とするもので、直線的に開く器形を呈するとみられる。口唇部には（集合）角状突起を有する。口縁部文様帶は、円形貼付文列により上端を、半截竹管を用いたコンバス文により下端を区画する。文様帶内には、半截竹管を用いて、一端を重ねて施文した2~3条1単位の平行沈線を鋸歯状に施し、地文は磨り消さずに残す。

12は磨石、13・14は凹石で、いずれも粗粒安山岩製である。

第1表 繩文時代前期住居址出土石器等観察表

遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
6住	17 石鑿	黒色頁岩	2.6	(1.6)	0.4	1.6	脚部欠損。
	18 スクレイバー	黒色頁岩	6.4	4.8	2.1	49.9	完形。
8住	44 石鑿	チャート	3.0	1.9	0.5	1.2	完形。
	45 石鑿	チャート	2.3	1.6	0.5	0.7	完形。
	46 石鑿	チャート	2.0	1.6	0.4	0.7	完形。
	47 石匙	黒色頁岩	3.4	5.1	0.7	9.7	横型。完形。
	48 石匙	黒色頁岩	(2.9)	(3.8)	0.5	5.7	横型。刃部欠損。
	49 石匙	黒色頁岩	(6.2)	3.7	0.5	11.9	縱型。先端部欠損。
	50 磨石	粗粒安山岩	11.7	8.9	4.5	590	完形。
	51 磨石	粗粒安山岩	11.5	7.7	5.3	691	完形。
	52 凹石	粗粒安山岩	14.6	8.0	4.1	711	両面に凹部あり。
	53 凹石	粗粒安山岩	11.1	9.0	4.7	648	片面に凹部あり。
	54 凹石	粗粒安山岩	12.7	8.8	4.9	546	両面に凹部あり。
12住	37 石鑿	チャート	2.3	2.0	0.5	1.9	完形。
	38 石鑿	黒色頁岩	(3.5)	2.2	0.6	4.5	端部欠損。
	39 打製石斧	珪質砂岩	(7.4)	(6.0)	2.0	85	端部欠損。
	40 打製石斧	砂岩	8.3	5.8	1.5	71	完形。
	41 打製石斧	黒色頁岩	7.5	6.6	1.9	73	完形。
	42 凹石	粗粒安山岩	(10.3)	(6.2)	4.2	417	両面に凹部あり。
	43 凹石	粗粒安山岩	(14.1)	8.7	6.1	881	両面に凹部あり。
30住	14 石匙	黒色頁岩	5.4	5.6	1.1	22.4	横型。完形。
	15 磨石	粗粒安山岩	11.1	8.3	3.2	487	被熱によるひび割れ。
	16 凹石	粗粒安山岩	11.5	5.7	2.9	221	両面に凹部あり。
	17 凹石	粗粒安山岩	10.0	6.2	4.8	381	両面に凹部あり。
31住	20 石鑿	チャート	(1.0)	(1.1)	0.3	0.2	先端部及び脚部欠損。
	21 打製石斧	蛇紋岩	7.5	4.1	1.3	57.2	完形。
	22 磨石	粗粒安山岩	6.1	5.1	4.8	189	完形。
	23 磨石	粗粒安山岩	6.1	5.4	3.4	154	完形。
32住	12 磨石	粗粒安山岩	8.5	9.0	4.4	534	完形。
	13 凹石	粗粒安山岩	10.9	9.1	4.6	560	両面に凹部あり。
	14 凹石	粗粒安山岩	8.4	5.6	3.2	170	両面・側面に凹部。

第2節 土 坑

本遺跡では、153基の土坑状の掘り込みが検出された。形状や規模等様々なものがあるが、調査時に土坑として認定したものすべてを土坑として報告を行う。これらはその形状や覆土、出土遺物等の観察から様々な時期に構築されていたことが窺える。ここでは、これらの土坑を縄文時代・古代・中近世と、その所属時代毎に分けて説明を行いたい。また、出土遺物がなく、形状や覆土からも時期判別が困難なものについては、時期不明の土坑として掲載し、その詳細については一覧表（第6～9表）を参照されたい。

なお第34・35・51・54・57・71～73・84・88～90・92・93・152・159・162～171・175・177・179・182～184号土坑は欠番である。

縄文時代の所産として捉えた土坑は45基である。これらはその形状や出土遺物等から、墓坑・貯蔵穴・陥穴・倒木痕等様々な機能が想定されるものの、用途が判然としないものが多いため、土坑として一括して取り扱う。まず分布状況を見てゆくと、分布域が南北に分かれていることが確認される。中期後半の住居址が集中する調査区北側の18～25・17～22グリッドと、前期前半及び中期後半の住居址が集中する調査区南側の24～33・26～38グリッドに分けられる。土坑の出土遺物は早期～後期と時期幅も広く、時期判別の難しいものも多い。また、縄文時代の所産と捉えられることの多かった陥穴は、近年の発掘調査の事例から、弥生時代以降の所産と認定される例も増えてきたが（注1）、本遺跡では、弥生時代以降の遺物を含むものや、良好な状態で火山灰が堆積しているものが検出されず、積極的に他時代のものと認定することが出来なかつたため、ここでは縄文時代の所産として取り扱うこととした。

古代の所産と認定できた土坑はわずか1基である。第185号土坑は調査区北端部に位置し、平安時代の住居址である第42号住居址に隣接するとみられる。また炭化した穀物が出土している点が注目される。調査時の所見より、該期の集落は西側の調査区外に展開しているものとみられる（注2）。

中世～近世の所産とみられる土坑は、第1・2・3・25・53・95・111・124号土坑の8基である。いずれも調査区南側、24～32・27～38グリッド内に占地する。周辺には中近世の掘立柱建物や溝跡、炭窯などが分布する。

第2・3・53・95号土坑の4基は、主室と縦坑を持つその形状から地下式土坑とみられる。位置不明の第53号土坑を除き、北西～南東方向にのびた台地南側を「コ」字状に区画する第1号溝址内側に2基、さらにその南側を「コ」字状に区画するとみられる第5号溝址内側に1基が構築されている。それぞれ単独で占地しており、第2～3号土坑間は30mほど、第2～95号土坑間は60m程離れている。その他の検出位置のわかる第25・111・124号土坑の3基は、第1号溝址の外周を巡る第2・3号溝址の内側、第1号溝址内側、第5号溝址内側にそれぞれ単独で占地している。

出土遺物としては、第1・25号土坑より、骨蔵器とみられる須恵器・軟質陶器や五輪塔、板碑等埋葬に関連した遺物が出土している。また第111・124号土坑からはそれぞれカワラケが1点ずつ出土している。また地下式土坑からはほとんど遺物が検出されず、わずかに第53号土坑から焰硝片や陶磁器片が出土したのみである。

注1) 石田 真 2004「群馬県北西部における陥穴の構築時期をめぐって—長野原町の事例を中心として—」
『研究紀要』22 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

注2) 須野高伯 1991「市之関前田遺跡1」宮城村教育委員会

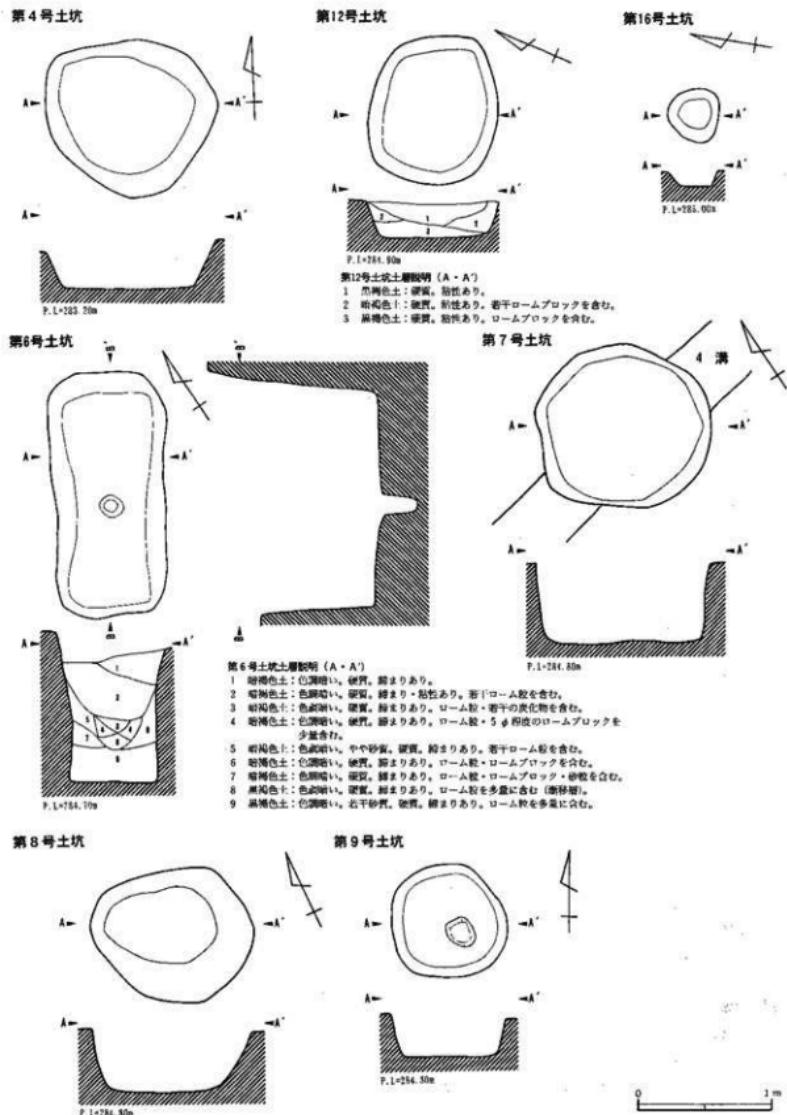
第1項 縄文時代の土坑

第4号土坑（第21図）

位 置 25-32グリッドに位置し、北側で第6号住居址や第36号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸138cm・短軸127cmを測り、平面形は南側のやや張った梢円形を呈する。深さは41cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 前期～中期の土器や石器類（自然疊合）が出土し、この内土器7点・石器1点を示した。その他陶磁器片や板碑片が出土している。

第6号土坑（第21図）

位 置 24-29グリッドに位置し、北側で第24号土坑に、東側で第22号土坑に、南側で第1号溝址にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸196cm・短軸88cmを測り、上面の平面形は隅丸長方形を、底面の平面形は中央が若干括れた隅丸長方形を呈する。深さは144cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面中央で径18cm・深さ



第21図 繩文時代の土坑①

28cmほどを測るピット1基が検出された。遺物 前期～中期後半の土器や石器類（自然疊合む）が出土し、中期初頭の土器の量がやや多い。この内土器12点を図示し得た。備考 本土坑はその形状から陥し穴と考えられる。

第7号土坑（第21図）

位置 28-30グリッドに位置し、北側で第9・10号土坑に、東側で第1号住居址に、南側で第8号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 中近世の溝である第4号溝址に切られる。規模・形状 長軸139cm・短軸127cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは67cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期の土器や石器類（自然疊合む）が出土し、この内土器10点・石器1点を図示し得た。

第8号土坑（第21図）

位置 28-30グリッドに位置し、北側で第7号土坑・第4号溝址に、東側で第1・19号住居址に、南側で第17・29・30号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸130cm・短軸107cmを測り、平面形は西側のやや張った梢円形を呈する。深さは50cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは中期初頭である。この内土器2点を図示し得た。

第9号土坑（第21図）

位置 28-29～30グリッドに位置し、北側で第14号土坑に、東側で第7・8・10号土坑に、南側で第4号溝址に、西側で第16号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸93cm・短軸91cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは54cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期の土器が出土し、この内土器1点を図示し得た。その他石器類（自然疊合む）が出土している。

第12号土坑（第21図）

位置 28-29グリッドに位置し、北側で第13号土坑に、南側で第11号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸119cm・短軸103cmを測り、南東隅の張った隅丸長方形を呈する。深さは33cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器や石器類が出土し、この内土器1点を図示し得た。その他陶磁器片が出土している。

第16号土坑（第21図）

位置 27-29～30グリッドに位置し、北側で第15号土坑に、東側で第9・14号土坑に、南側で第4号溝址にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸44cm・短軸42cmを測り、平面形は西側のやや張った円形を呈する小型の土坑である。深さは14cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器や石器類が出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器2点・石器1点を図示し得た。

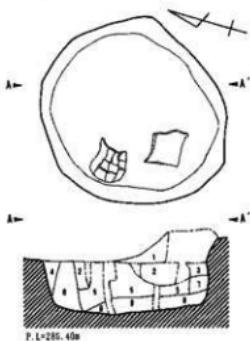
第18号土坑（第22図）

位置 27-28グリッドに位置し、周囲を第3・5・21号住居址に囲まれる。重複関係 出土遺物から、上面をこれらの住居址等に切られていると考えられる。規模・形状 長軸157cm・短軸141cmを測り、平面形は東壁の張った梢円形を呈する。深さは71cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期前半の復元個体（第31図18土1）が出土し、これを図示し得た。その他中期の土器や石器類（自然疊合む）も少量出土している。

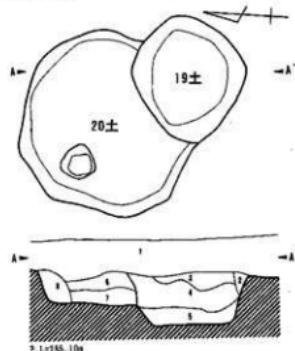
第19号土坑（第22図）

位置 24-28グリッドに位置し、東側で第21号土坑に、西側で第23号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 北側で第20号土坑と重複し、これを切る。規模・形状 長軸102cm・短軸89cmを測り、平面形は梢円形を呈する。深さは44cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器が出土し、この内土器1点を図示し得た。

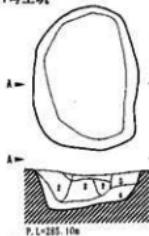
第18号土坑



第19・20号土坑



第21号土坑



第21号土坑断面図 (A-A')

- 褐色土: 紺色。
- 褐色土: 紺色、ロームブロック・炭化物を含む。
- 褐色土: 色調明るい。紺まりあり。
- 褐色土: 色調明るい。紺まり・粘性あり。
- 褐色土: 色調明るい。紺まり・粘性あり。



第22図 繩文時代の土坑②

第20号土坑 (第22図)

位 置 24-28グリッドに位置し、東側で第21号土坑に、西側で第23号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係** 南側で第19号土坑と重複し、これに切られる。**規 模・形 状** 長軸152cm・短軸約140cmを測り、平面形は梢円形を呈する。深さは30cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺 物** 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは前期前半である。この内土器2点を図示し得た。その他石器類(自然疊合む)が出土している。

第21号土坑 (第22図)

位 置 24～25-28グリッドに位置し、北側で第2・3号溝址に、東側で第9・22号住居址に、西側で第19・20号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係** なし。**規 模・形 状** 長軸115cm・短軸85cmを測り、平面形は梢円形を呈する。深さは33cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺 物** 前期前半の土器や石器類(自然疊合む)が出土し、この内土器4点を図示し得た。

第22号土坑（第23図）

位 置 24-29グリッドに位置し、東側で第18号住居址に、南側で第1号溝址に、西側で第6号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸145cm・短軸109cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは70cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 前期～中期の土器や石器類（自然疊合む）が多量に出土したが、主体となるのは前期前半である。この内土器12点・石器2点を図示し得た。

第23号土坑（第23図）

位 置 24-28グリッドに位置し、北側で第26号土坑に、東側で第19・20号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸100cm・短軸95cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは29cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 前期前半の土器を中心として出土し、この内土器2点を図示し得た。

第27号土坑（第23図）

位 置 23-28～29グリッドに位置し、北側で第2・3号溝址に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸234cm・短軸144cmを測り、上面の平面形は北西隅の張った楕円形を、底面の平面形は不整隅丸長方形を呈する。深さは120cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面より、径13～22cm・深さ30～38cmほどを測るピットが、長軸方向に並んで3基検出された。遺 物 前期～中期の土器や石器類（自然疊合む）が多量に出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器12点・石器2点を図示し得た。備 考 本土坑はその形状から陥穴と考えられる。

第28号土坑（第23図）

位 置 29-30グリッドに位置し、北側で第31・32号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸129cm・短軸約120cmを測り、平面形は北西隅の張った不整円形を呈するとみられる。深さは27cmを測り、断面形は皿状を呈する。また底面には凹凸がみられる。遺 物 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器2点を図示し得た。その他剝片が少量出土している。

第33号土坑（第23図）

位 置 27～28-28グリッドに位置し、東側で第39号土坑・第1号配石遺構に、南側で第2号溝址に、西側で第4・13・21号住居址にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸174cm・短軸163cmを測り、平面形は隅丸台形を呈する。深さは51cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 前期～中期の土器や石器類（自然疊合む）が出土し、この内土器7点を図示し得た。その他瓦器片が少量出土している。

第36号土坑（第24図）

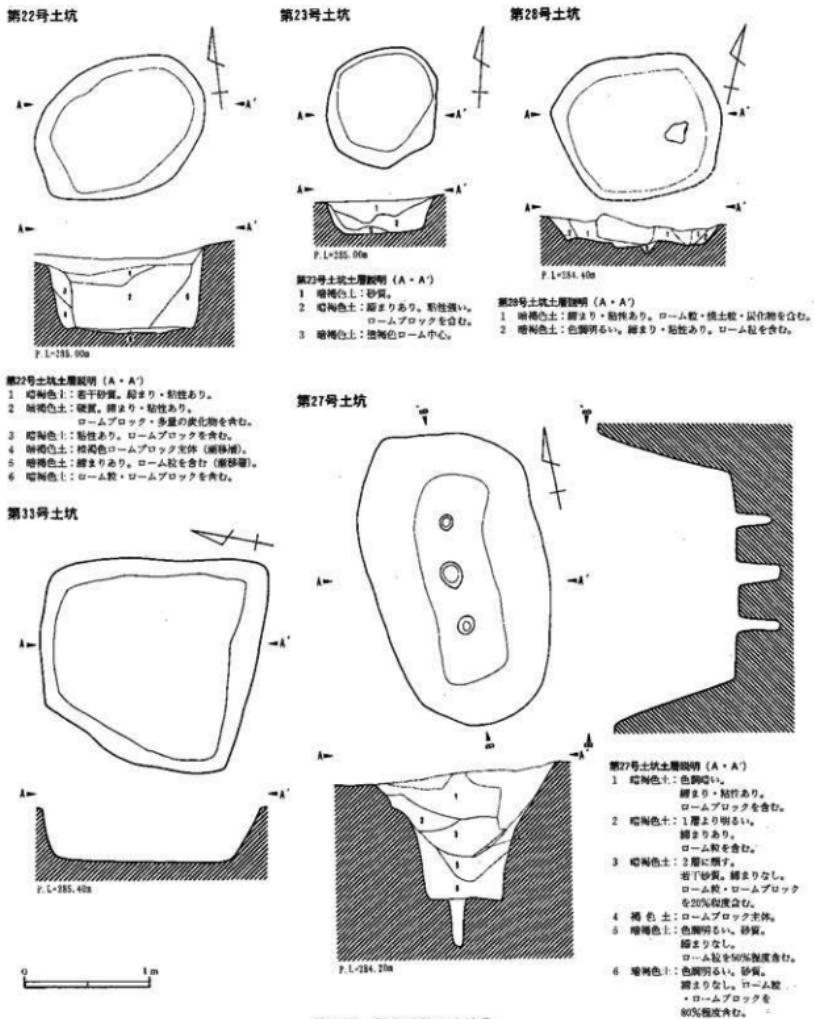
位 置 24-32グリッドに位置し、北側で第3号土坑に、東側で第6号住居址に、南側で第4号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸249cm・短軸221cmを測り、平面形は不整形を呈する。深さは45cmを測り、断面形は皿状を呈する。底面には南壁を除く各壁面沿いにピットが8基検出された。遺 物 前期～中期の土器や石器類が出土し、土器・石器各1点を図示し得た。

第37号土坑（第24図）

位 置 25-29グリッドに位置し、東側で第38号土坑に隣接する。重複関係 南側で中近世の溝である第1号溝址と重複し、これに切られる。規模・形状 長軸119cm・短軸約100cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは31cmを測り、断面形は箱状を呈する。また北壁でピット1基が検出された。遺 物 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは前期前半である。この内土器3点を図示し得た。

第42号土坑（第24図）

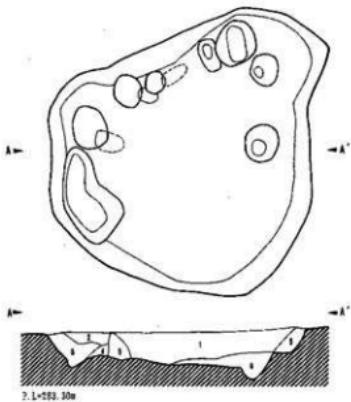
位 置 27-28グリッドに位置し、周囲を第3・4・5・21号住居址及び第18・46号土坑に囲まれる。重複関係 第4・21号住居址等と重複するが、切り合い関係は不明である。規模・形状 長軸196cm・短軸130cmを測り、平面形は東壁の張った隅丸長方形を呈する。中央部で円形の掘り込みが見られ、最深部で深さ82cmを測り、断面形



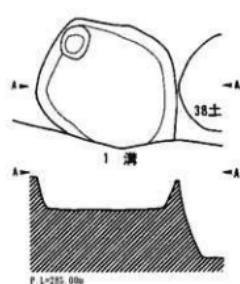
第23図 繩文時代の土坑③

段状を呈する。遺物 中期後半の土器が出土し、この内土器3点を図示し得た。備考 本土坑は周辺の住居址との関係が捉えられなかつたため、単独の土坑として扱つたが、遺構の分布状況や出土遺物から周辺の住居址に伴う施設の可能性も考えられよう。

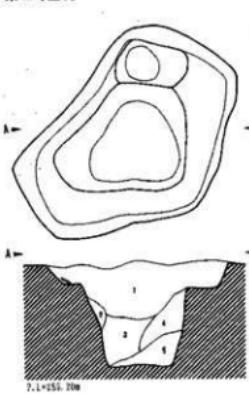
第36号土坑



第37号土坑



第42号土坑



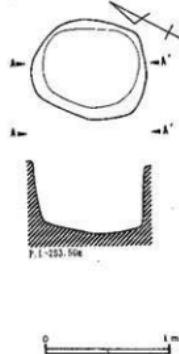
第44号土坑



第45号土坑



第49号土坑



第44号土坑土層剖面(A-A')

1. 売褐色土：緑色あり。ローム粒・ロームブロックを多量に含む。
2. 墓土：砂質。
3. 灰色土：緑色あり。粘性あり。若干ローム粒を含む。
4. 黄色土：3層に分類。3層より色濃明るい。
5. 売褐色土：1層より色濃明るい。若干砂質。ロームブロックを含む。
6. 黄褐色土：色濃明るい。ローム粒を30%程度含む。

第24図 繩文時代の土坑④

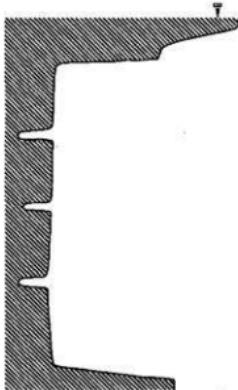
第44号土坑（第24図）

位 置 24-28グリッドに位置し、東側で第45号土坑に、南側で第2・3号溝址にそれぞれ隣接する。**重複関係**なし。**規 模・形 状** 長軸57cm・短軸52cmを測る小型の土坑で、平面形は円形を呈する。深さは58cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺 物** 前期～中期の土器や石器類が出土し、この内土器2点・石器1点を図示し得た。

第45号土坑（第24図）

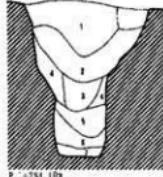
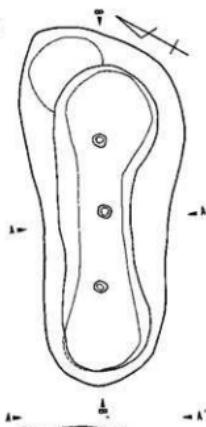
位 置 24-27～28グリッドに位置し、南側で第2・3号溝址に、西側で第44号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係**なし。**規 模・形 状** 長軸62cm・短軸57cmを測る小型の土坑で、平面形は円形を呈する。深さは35cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺 物** 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは前期前半である。この内土器

第50号土坑



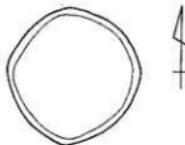
- 第50号土坑土層説明 (A・A')
- 1 黒褐色土：硬質。ロームブロックを含む。
 - 2 黒褐色土：硬質。1層よりロームブロックを多量に含む。
 - 3 黑褐色土：硬質。心材砂質。2層より更にロームブロックを多量に含む。(30%程度)。
 - 4 灰褐色土：やや弱まりなし。ローム軟。
 - 5 灰褐色土：4層に削り、4層より弱まり。粘性あり。
 - 6 棕色土：ロームブロック主体。
 - 7 砂褐色土：弱まり・粘性あり。ローム軟を含む。

0 1m

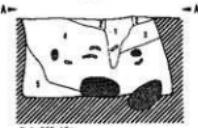
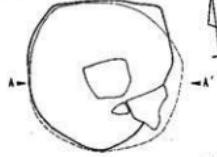


P.L.-331.10m

第52号土坑



第55号土坑



P.L.-282.10m

- 第55号土坑土層説明 (A・A')
- 1 黒褐色土：硬質。ローム軟・炭化物を殆ど含まない。
 - 2 黑褐色土：3層に削り、やや軟質。
 - 3 黑褐色土：4層に削り、4層よりローム軟を多く含み。若干ロームブロックを含む。
 - 4 黑褐色土：硬質。弱まりあり。ローム軟・炭化物を含む。
 - 5 黑褐色土：硬質。ローム軟を殆ど含まない。若干炭化物を含む。

第25図 繩文時代の土坑⑤

2点を図示し得た。その他石器類(自然礫含む)が出土している。

第49号土坑(第24図)

位置 29-34グリッドに位置し、西側で第104・105号土坑に隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸92cm・短軸80cmを測り、平面形は椭円形を呈する。深さは60cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器が少量出土し、この内土器1点を図示し得た。その他剝片も少量出土している。

第50号土坑(第25図)

位置 29-30-30グリッドに位置し、東側で第1号溝址に、西側で第28・31・32号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸283cm・短軸99cmを測り、平面形は中央部が括れた分円形を呈する。また北東隅に張り出し部を持つ。深さは155cmを測り、断面形は段状を呈する。底面には、径10cm・深さ23-31cmほどのビットが長軸方向に並んで3基検出された。遺物 早期～中期の土器が多量に出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器8点を図示し得た。その他板片や瓦器片等中世～近世の遺物も少量出土している。備考 本土坑はその形状から陥穴と考えられる。

第52号土坑(第25図)

位置 27-28-31グリッドに位置し、北側で第2号土坑に隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸104cm・

短軸102cmを測り、平面形は円形を呈する。深さや断面形状は不明である。**遺物** 前期前半の土器や剝片が出土し、復元個体1点を図示し得た。その他須恵器の壺や壺類も出土している。**備考** 調査所見より本土坑を縄文時代の所産としたが、出土遺物から古代の遺構の可能性も考えられる。

第55号土坑（第25図）

位置 不明。**重複関係** 不明。**規模・形状** 長軸120cm・短軸113cmを測り、平面形は不整円形を呈する。深さは69cmを測り、東壁から南壁にかけて壁面がオーバーハングしているため、断面形は一部袋状を呈する。**遺物** 復元個体を含む前期前半の土器や石器類（自然疊合む）が多量に出土し、この内土器6点・石器3点を図示し得た。

第56号土坑（第26図）

位置 29-36グリッドに位置し、北側で第60号土坑に、東側で第122・123号土坑に、西側で第58号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸220cm・短軸118cmを測り、上面の平面形は梢円形を、底面の平面形は不整隅丸長方形を呈する。深さは111cmを測り、断面形は段状を呈する。また底面では、径15~27cm・深さ45cmほどのピットが長軸方向に並んで3基検出された。**遺物** 中期の土器が出土し、この内土器2点を図示し得た。**備考** 本土坑はその形状から陥し穴と考えられる。

第60号土坑（第26図）

位置 29-36グリッドに位置し、南側で第56・122号土坑に、西側で第58号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸129cm・短軸119cmを測り、平面形は北東隅の張った円形を呈する。深さは27cmを測り、北壁～東壁の一部は壁面がオーバーハングしているため、断面形は部分的に袋状を呈する。**遺物** 前期前半の土器や剝片が出土し、この内土器2点を図示し得た。

第65号土坑（第26図）

位置 29-37グリッドに位置し、北側で第63・64・129号土坑に、東側で第119・120号土坑に、南側で第66号土坑にそれぞれ隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸192cm・短軸80cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。深さは110cmを測り、断面形は箱状を呈する。底面からは、径13cm・深さ40cmほどのピットが長軸方向に並んで3基検出された。**遺物** 剥片が少量出土したものの、図示には至らなかった。**備考** 本土坑はその形状から陥し穴と考えられる。

第66号土坑（第26図）

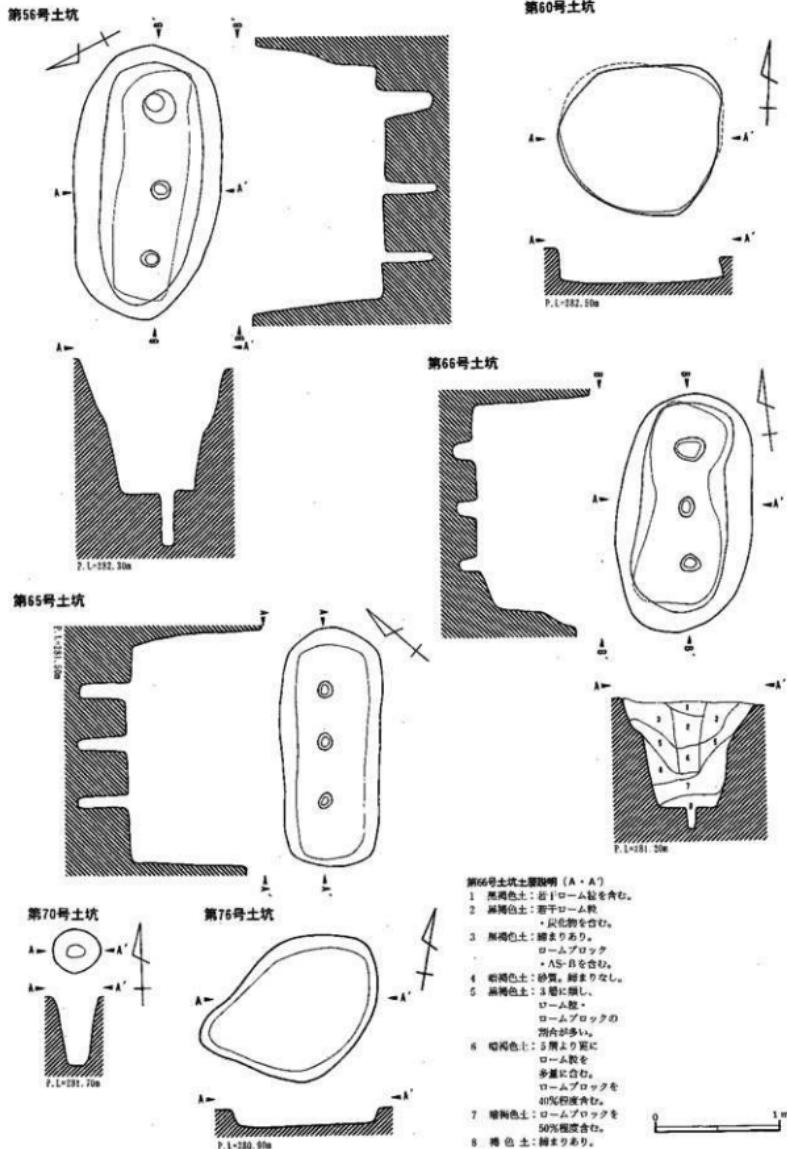
位置 29-37~38グリッドに位置し、北側で第64・65・119・120号土坑に隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸193cm・短軸107cmを測り、上面の平面形は梢円形を、底面の平面形は分岐形を呈する。深さは97cmを測り、断面形は段状を呈する。底面からは、径14~24cm・深さ17~19cmほどのピットが長軸方向に並んで3基検出された。**遺物** なし。**備考** 本土坑はその形状から陥し穴と考えられる。

第70号土坑（第26図）

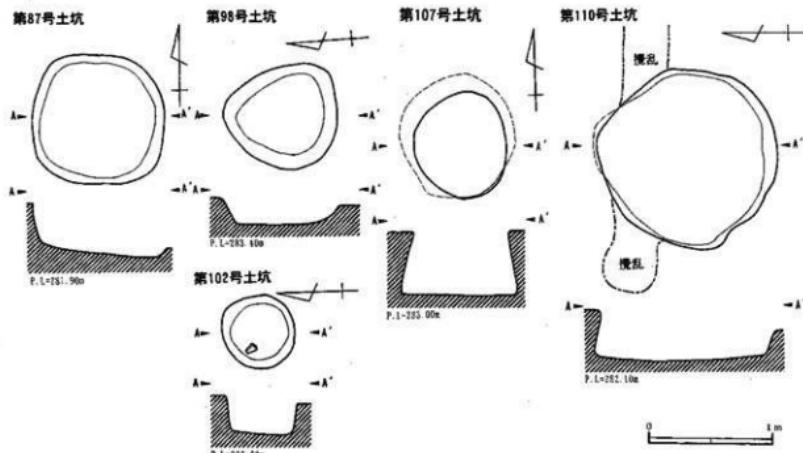
位置 30-37グリッドに位置し、西側で第68・69号土坑に隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸38cm・短軸34cmを測り、平面形は円形を呈する小型の土坑である。深さは54cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺物** 石器類（自然疊合む）が出土し、この内石器1点を図示し得た。

第76号土坑（第26図）

位置 30~31-38グリッドに位置し、北側で第75号土坑に隣接する。**重複関係** なし。**規模・形状** 長軸133cm・短軸102cmを測り、平面形は南北隅の大きく張り出した不整梢円形を呈する。深さは22cmを測り、断面形は箱状を呈する。**遺物** 前期～中期の土器や石器類が出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器2点・石器1点を図示し得た。



第26図 繩文時代の土坑⑥



第27図 繩文時代の土坑⑦

第87号土坑（第27図）

位 置 31-34グリッドに位置し、北～東側で第5号溝址に、西側で第86号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係なし。規模・形状 径105cmほどを測り、平面形は円形を呈する。深さは44cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 前期前半の土器が少量出土し、この内土器2点を図示し得た。その他培塿片も少量出土している。

第98号土坑（第27図）

位 置 28-34グリッドに位置し、東側で第100・102号土坑に、南側で第99・103号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸91cm・短軸83cmを測り、平面形は北側の張った不整円形を呈する。深さは23cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺 物 前期前半の土器や石器類が出土し、この内石器1点を図示し得た。

第102号土坑（第27図）

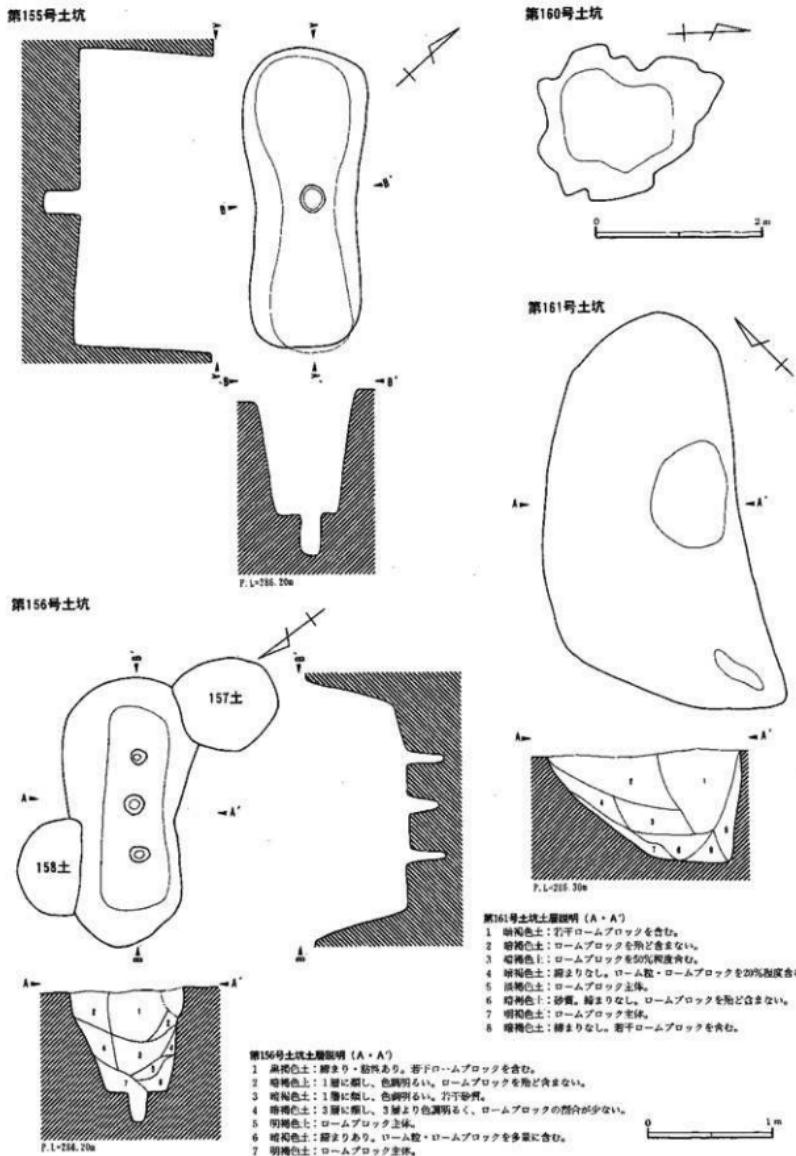
位 置 29-34グリッドに位置し、西側で第100・103号土坑に隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸61cm・短軸59cmを測り、平面形は円形を呈する小型の土坑である。深さは31cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 石器1点が出土し、これを図示し得た。

第107号土坑（第27図）

位 置 28-34グリッドに位置し、北側で第99号土坑に、東側で第106号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸86cm・短軸74cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは57cmを測り、南壁を除き壁面がオーバーハングしているため、断面形は袋状を呈する。遺 物 前期前半の土器や石器類（自然疊合む）が出土し、この内土器1点を図示し得た。

第110号土坑（第27図）

位 置 不明。重複関係不明。規模・形状 長軸144cm・短軸137cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは42cmを測り、北壁の壁面がオーバーハングするものの、概ね断面形は箱状を呈する。遺 物 前期～中期の土器や石器類（自然疊合む）が出土したが、主体となるのは前期前半である。この内土器6点・石器1点を図示し得た。



第28図 繩文時代の土坑⑧

第155号土坑（第28図）

位置 23-20グリッドに位置し、南側で第160号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸240cm・短軸81cmを測り、平面形は、中央部に括れを持った分銅形を呈する。深さは111cmを測り、断面形は箱状を呈する。また底面中央部より径22cm・深さ31cmを測るピット1基が検出された。遺物 なし。備考 本土坑はその形状より陥穴と考えられる。

第156号土坑（第28図）

位置 24-20グリッドに位置し、南側で第161号土坑に隣接する。重複関係 南西隅で第157号土坑と、北辺で第158号土坑と重複するが、切り合い関係は不明である。規模・形状 長軸217cm・短軸86cmを測り、上面の平面形は南辺の括れいびつな楕円形を、底面の平面形は隅丸長方形を呈する。深さは86cmを測り、断面形は箱状を呈する。また底面より、径15cm・深さ26~39cmほどのピットが長軸方向に3基並んで検出された。遺物 前期～中期の土器が出土し、この内土器1点を図示し得た。備考 本土坑はその形状より陥穴と考えられる。

第160号土坑（第28図）

位置 23-20~21グリッドに位置し、北側で第155号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸237cm・短軸187cmを測り、平面形は不整形を呈する。深さ・断面形状は不明である。遺物 中期後半の土器が出土し、この内土器1点を図示し得た。備考 本土坑は調査所見より倒木痕と考えられる。

第161号土坑（第28図）

位置 24-21グリッドに位置し、北側で第156~158号土坑に、西側で第2号配石遺構にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸314cm・短軸162cmを測り、平面形は不整形を呈する。深さは98cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 中期後半の土器が出土したもの図示には至らなかった。備考 本土坑は調査所見より倒木痕と考えられる。

第172号土坑（第29図）

位置 22-18グリッドに位置し、北側で第173号土坑に、東側で第176号土坑に、南側で第36号住居址にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸86cm・短軸75cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは41cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 中期後半の土器が出土し、土器3点を図示し得た。

第174号土坑（第29図）

位置 21-17グリッドに位置し、南側で第38号住居址に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸195cm・短軸113cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは122cmを測り、断面形は箱状を呈する。また底面中央及びその西側で径17cm・深さ23~27cmほどのピット2基が検出された。遺物 刺片1点が出土したものの、図示には至らなかった。備考 本土坑はその形状から陥穴と考えられる。

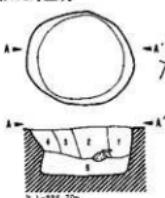
第178号土坑（第29図）

位置 20-21グリッドに位置し、東側で第33号住居址に、南側で第40号住居址にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸204cm・短軸111cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは89cmを測り、断面形は箱状を呈する。また底面中央より1基、東壁及び西壁前より2基ずつの計5基のピットが検出された。径14~21cm・深さ12~24cmほどである。なお、中央部及び西壁にて南北方向に走向する地割れ痕が検出された。遺物 前期～中期の土器が出土し、土器2点を図示し得た。備考 本土坑はその形状より陥穴と考えられる。

第180号土坑（第29図）

位置 20-19グリッドに位置する。重複関係 なし。規模・形状 長軸202cm・短軸186cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは176cmを測り、断面形は箱状を呈する。なお調査時に底面の状態が不明瞭であったため、若干掘りすぎている可能性がある。遺物 前期～中期の土器が出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器1点を図示し得た。

第172号土坑

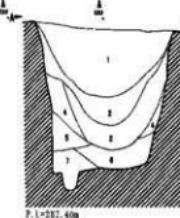
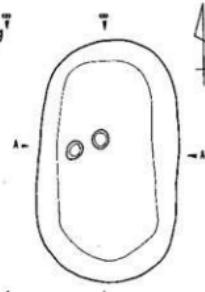
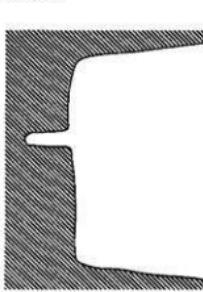


P.L. +288.70m

第172号土坑土層説明（A・A'）

- 1 黒褐色土：ロームブロックを40%程度含む。
- 2 黑褐色土：8cm角程度のロームブロックを多量に含む（70%程度）。
- 3 黒褐色土：若干ローム粒・ロームブロックを含む。
- 4 黑褐色土：ロームブロックを30%程度含む。
- 5 明褐色土：やや砂質。ロームブロックを所存者ない。

第174号土坑

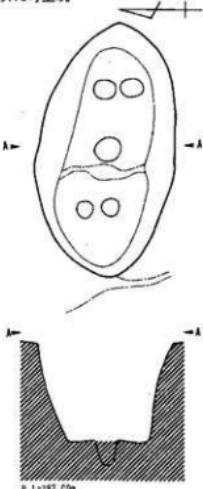


P.L.+282.40m

第174号土坑土層説明（A・A'）

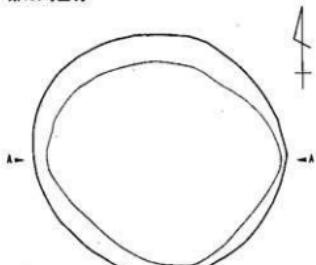
- 1 黒褐色土：やや砂質。縫まり・粘性あり。
若干ローム粒を含む。
- 2 暗褐色土：色暗い。粘性あり。上層に粗し、
1層より若干細いものが多い。
- 3 暗褐色土：粘性あり。ローム粒・部分的に
ロームブロックを含む。
- 4 黑褐色土：縫まり・粘性あり。
- 5 黑褐色土：若干砂質を含む。
- 6 暗褐色土：硬く縫まり、粗粒であり。
ロームブロックを20%程度含む。
- 7 黑褐色土：やや縫まりなし。粘性あり。
若干ローム粒を含む。
- 8 明褐色土：やや砂質。ローム粒。
若干のロームブロックを含む。

第178号土坑

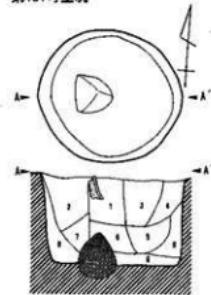


P.L.+287.00m

第180号土坑



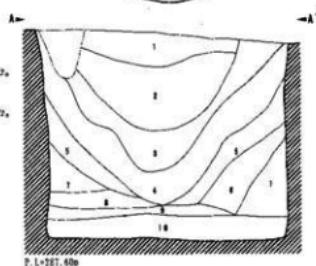
第181号土坑



P.L.+285.30m

第180号土坑土層説明（A・A'）

- 1 暗褐色土：ローム粒・灰化物・鵠卵土ブロック
を多量に含む。
- 2 黑褐色土：若干のローム粒・褐色土ブロックを含む。
- 3 黑褐色土：1層に粗し、1層よりローム粒・
褐色土ブロックの割合が多い。
- 4 黑褐色土：ローム粒・褐色土ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土：ロームブロック主。
- 6 黑褐色土：褐色物らしい。2層に粗し。
ロームブロックを含む。
- 7 明褐色土：ハーフローム層形態。凹凸を含む。
- 8 明褐色土：縫まり・粘性あり（基本土層か？）。
- 9 明褐色土：縫まり・粘性あり（基本土層か？）。
- 10 暗褐色土：縫まり・粘性あり（基本土層か？）。



- 1 黒褐色土：ローム粒・灰化物
・褐色土ブロックを含む。
- 2 黑褐色土：軟質。縫まりなし。ローム粒・
灰化物を含む。
- 3 黑褐色土：若干ローム粒・灰化物を含む。
- 4 黑褐色土：3層に粗がる。1層よりローム粒の割合が
少なく、大粒である。
- 5 黑褐色土：縫まりなし。2層に粗し。
3層よりローム粒を多く含む。
- 6 暗褐色土：縫まりなし。
- 7 暗褐色土：6層に粗がる。
ロームブロックの割合が少ない。
- 8 暗褐色土：色調明るい。ロームブロックを
多量に含む。
- 9 暗褐色土：色調明るい。縫まり・粘性あり。

0 1 m

第29図 織文時代の土坑⑨

第181号土坑（第29図）

位置 21-19グリッドに位置し、東側で第35号住居址に隣接する。重複関係なし。規模・形状 長軸111cm・短軸108cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは76cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 前期～中期の土器や石器類（自然埋含む）が出土したが、主体となるのは中期後半である。この内土器3点を図示した。

第4号土坑出土遺物（第30・37図）

1・2は羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す胴部片で、1は円形竹管による刺突を施した円形貼付文を付し、下段には多段ループ文を施す。2は閉端環付である。3は組紐文を施す胴部片である。1～3は胎土に纖維を含む。4は頸部で「く」の字状に屈曲し内湾気味に開く口縁部片で、口唇部は刻みを施し、内面には稜を持つ。口縁部は無文で、頸部には上部に円形刺突列の伴う沈線を数条巡らせる。5は無文の胴部片で、胎土には雲母を多量に含む。6は縫帶による横位・弧状の区画文を持つ胴部片で、区画内にはRL単節斜繩文を施す。7は胴部片で、沈線を垂下させて縦位区画する。8は粗粒安山岩製の磨石である。

第6号土坑出土遺物（第30図）

1・2は有刻の平行沈線により斜位・弧状の文様を施す口縁部片で、1は口唇部に（集合）角状突起を付し、半截竹管による円形文やコンパス文を施す。また2は地文に繩文を施す。3・4は平縁の口縁部片で、同一個体である。口縁部は内削ぎ状を呈し、口縁部直下には4～5本1单位の鋸齒状の刻み列を施す。以下はRLループ文（0段多条）を多段施文する。1～4は胎土に纖維を含む。5・6は突起部片である。いずれも環状を呈するが、5は口縁部に対して垂直に、6は口縁部に平行して貼付される。5・6の外縁及び6の突起部上面には半截竹管による集合沈線を施し、集合沈線と直交する方向にヘラ状工具による平行沈線を施すため、一部斜格子状を呈する。7は平縁の口縁部片である。口唇部は丸頭状を呈し、外縁には刻みを施す。口縁部直下には2条1対の平行沈線を巡らせて口縁部文様帯の上端を区画し、半截竹管と箆状工具による斜位の集合沈線をそれぞれ直交させて施し、斜格子文を構成する。8は口縁部片で、口唇部は肥厚し、内面には稜を持つ。無節L繩文を地文とし、三角刺突を伴う平行沈線を横位に巡らせる。9は沈線により斜位・弧状の文様を施し、刺突による三角文を伴う。10は結節を伴うRL単節斜繩文を縦位に施す胴部片。11・12は沈線による区画内に繩文を施す胴部片で、11は横位に、12は縦位に区画する。

第7号土坑出土遺物（第30・37図）

1は上げ底状を呈する底部片で、外縁及び底面には結束による羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。2～4は半截竹管により弧状・鋸齒状等の文様を施す口縁部片である。2は双頭の波状縁で、口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部直下には3～4本1対の鋸齒状の刻み列を施す。多段のループ文（0段多条）を地文とし、半截竹管を用いた平行沈線による幾何学文や円形貼付文を施す。3も波状縁で口唇部は内削ぎ状を呈する。半截竹管を用いた2条1対の平行沈線により口縁部文様帯の上端を区画し、文様帯内には同様の平行沈線による弧状・斜位等の幾何学文や円形貼付文を施す。4は半截竹管を用いた2条1対の平行沈線により口縁部文様帯の下端を区画しているとみられ、文様帯内には数条1対の平行沈線による鋸齒状文や円形貼付文を施す。5～7はコンパス文を施す胴部片で、多段のループ文や羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。6・7のコンパス文は崩れて波状を呈する。また6の内面にはススが付着する。8～10は地文のみを施す胴部片で、閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を地文とし、9・10は羽状構成をとる。1～10は胎土に纖維を含む。11は黒色頁岩製のスクレイバーで、畿型である。

第8号土坑出土遺物（第30図）

1・2は同一個体である。膨らみを持った胴部から、頸部で括れ、内湾気味に開く器形を呈する。口唇部は肥厚し、内面には稜を持つ。口縁部直下には縦位の短沈線を施し、口縁部には「ハ」字状の短沈線を施す。頸部には上面に縦位の短沈線を施した長方形の貼付文を付す。三角刺突を伴う平行沈線により区画された胴部は無節斜繩文を地文とし、2条1対の平行沈線により弧状文を施す。いずれも胎土には雲母を含む。



第30圖 土坑出土遺物①

第9号土坑出土遺物（第30図）

1は影らみを持つ胸部片で、閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）及び鋸歯状に施した多段のループ文を地文とし、半截竹管による三角形及び逆三角形の文様を鋸歯状のループ文に沿って横位に配置する。胎土には纖維を含む。

第12号土坑出土遺物（第31図）

1は直線的に開く器形を呈し、口唇部は丸頭状を呈する。口唇部には4単位ないし8単位の半円形の突起を付す。口縁部から胸部にはLR単節斜繩文を横位施文する。胎土には纖維を含む。

第16号土坑出土遺物（第31図）

1・2は胸部片で、1は胸部中位に括れを持ち、キャリバー形の器形を呈するとみられる。いずれも「U」「匁」字状の区画文を施し、区画内にRL単節斜繩文を施す。3は硬質岩製の石鐵で、凹基無茎鐵である。先端部及び脚部の一部を欠損する。

第18号土坑出土遺物（第31図）

1は復元個体で、口縁部～胸部下半まで残存する。ほぼ直線的に開き、口縁部は若干外反する器形を呈する。口縁部は平縁で、口唇部は角頭状を呈する。口唇部には8個ほどを1単位とする集合角状突起を4単位付す。口縁部文様帶は横位の平行沈線により上下を区画し、平行沈線上には7～8個1単位の貼付文を4単位施すが、下端を区画する平行沈線上には口唇部の集合角状突起に対応させ貼付し、上端の平行沈線上には集合角状突起と45°ずらして貼付する。口縁部文様帶内には2条1対の平行沈線により鋸歯状文を施し、鋸歯状文間を弧状文により連結する。胸上部・胸中部・胸下部にはそれぞれコンパス文を巡らせる。羽状構成をとる正反の合（LR・RLをRに燃ったものとLに燃ったもの）を地文とし、口縁部文様帶内も地文は磨り消さない。胎土には纖維を含む。

第19号土坑出土遺物（第31図）

1は地文のみを施す胸部片で、多段のループ文や羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。胎土には纖維を含む。

第20号土坑出土遺物（第31図）

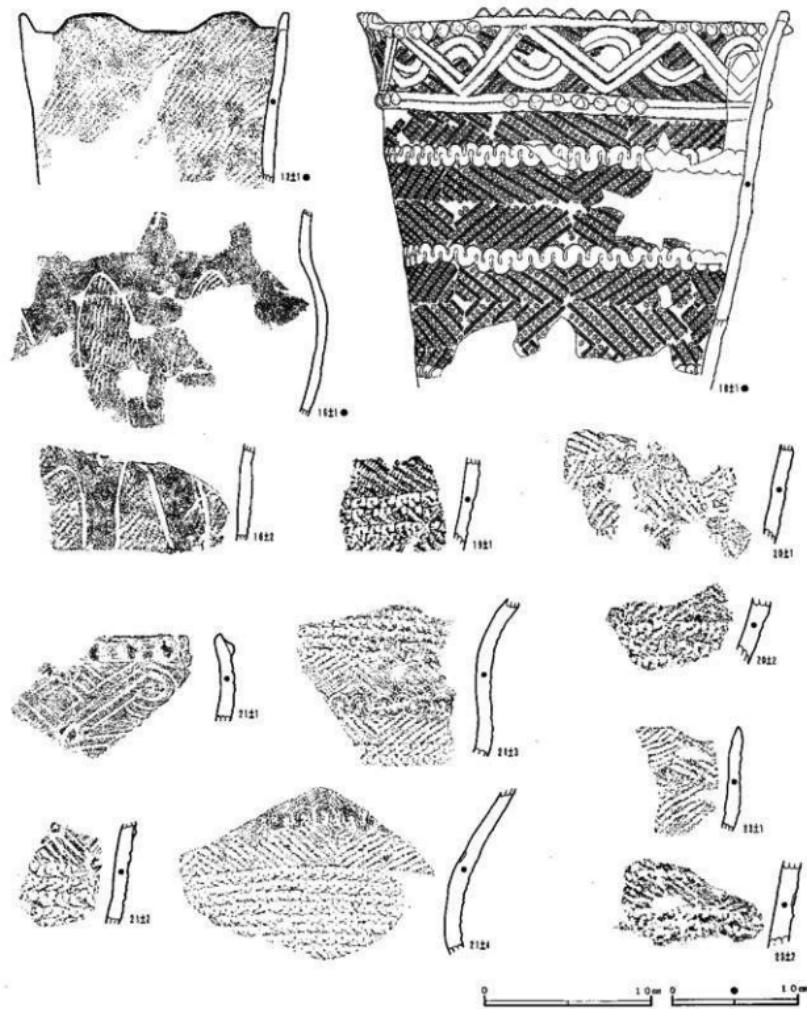
1・2は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）のみを施した胸部片で、2は多段のループ文を伴う。

第21号土坑出土遺物（第31図）

1は内湾として開く器形を呈する口縁部片で、口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部文様帶は2条1対の平行沈線を巡らせて区画し、上端を区画する平行沈線には円形貼付文を付す。文様帶内には半截竹管を用いた3条1対の平行沈線により端部が撇手状を呈する鋸歯状文等を施す。また文様帶内にも円形貼付文を付す。2は集合沈線により鋸歯状文を施す胸部片で、頂部に刺突を施した円形貼付文を付す。以下は多段のループ文を施す。3・4はコンパス文を施した胸部片で、胸部が括れる器形を呈する。いずれも羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文（0段多条）を地文とし、多段のループ文を伴う。いずれも胎土には纖維を含む。

第22号土坑出土遺物（第32・37図）

1は復元個体で、口縁部～胸部下半が残存する。底部から外反して開いて胸部下半が張り出し、胸部中位で括れ、口縁部が内湾気味に大きく開く器形を呈する。口縁部は双頭の波状縁である。口唇部は丸頭状を呈する。口縁部文様帶はコンパス文により下端を区画し、有刺の平行沈線により鋸歯状文等を施す。また文様帶内には半截竹管による円形文やコンパス文、円形貼付文等を施す。胸部中位には補修孔がみられ、胸部下半にはコンパス文を巡らす。口縁部文様帶の直下には羽状構成をとる附加条繩文（LRにLとRを付加したものとRLにLを2本附加したもの）を施し、以下は多段のループ文や羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。2・3は同一個体とみられる。波状縁で、口唇部は内削ぎ状を呈する。波頂部脇には集合角状突起を付すとみら



第31図 土坑出土遺物②

れる。半截竹管を用いた2～3条1対の有刻の平行沈線を巡らせて口縁部文様帯の上端を区画し、沈線には部分的に爪形の刺突文を施す。文様帯内には同様な沈線による斜位・弧状等の幾何学文や円形貼付文を施す。4は口縁部文様帯の一部とみられ、部分的に爪形の刺突文を施した半截竹管による平行沈線を横位に巡らせ、貼付文を付す。以下は閉端環付のRL単節斜繩文(0段多条)を横位施文する。5は小型深鉢の口縁部片で、内湾して立ち

上がる器形を呈する。波状線で、口唇部は内削ぎ状を呈し、波頂部脇には集合角状突起を付すとみられる。波頂部より円形押圧を施した短隆帯を垂下させる。口縁部文様帶は半截竹管を用いた平行沈線により区画し、区画内には半截竹管を用いた集合沈線による鋸齒状文や円形貼付文を施す。胸部は羽状構成をとる LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とし、集合沈線による鋸齒状文を施す。6は平縁の口縁部片で、胸部上半で内屈する器形を呈する。半截竹管を用いた平行沈線により口縁部文様帶を区画し、文様帶内には2条1対の平行沈線による鋸齒状文や円形貼付文を施す。羽状構成をとる LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とし、口縁部文様帶内も地文は磨り消されない。7は波状線とみられる口縁部片で、頭部で外反して開く器形を呈する。口唇部は内削ぎ状を呈する。羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とし、円形貼付文を付す。8～10は同一個体とみられる平縁の口縁部片で、頭部で緩く屈曲する器形を呈するとみられる。口唇部は内削ぎ状を呈し、集合角状突起を付す。多段のループ文や羽状構成をとる LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施す。11は上段に正反の合（LRとRLをLに塗ったものとRに塗ったもの）、下段に LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施した胸部片で、上下とも羽状構成をとる。12は附加条第2種（LRにLを2本附加したもの）のみを施す胸部片である。1～12は胎土に纖維を含む。13・14はスクレイバーで、いずれも横型である。13・14とも黒色頁岩製である。

第23号土坑出土遺物（第31図）

1は平縁の口縁部片で、羽状構成をとる LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とし、口縁部直下の一部が指頭等により地文が磨り消されている。2も地文のみを施した胸部片で、羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とする。

第27号土坑出土遺物（第32・37図）

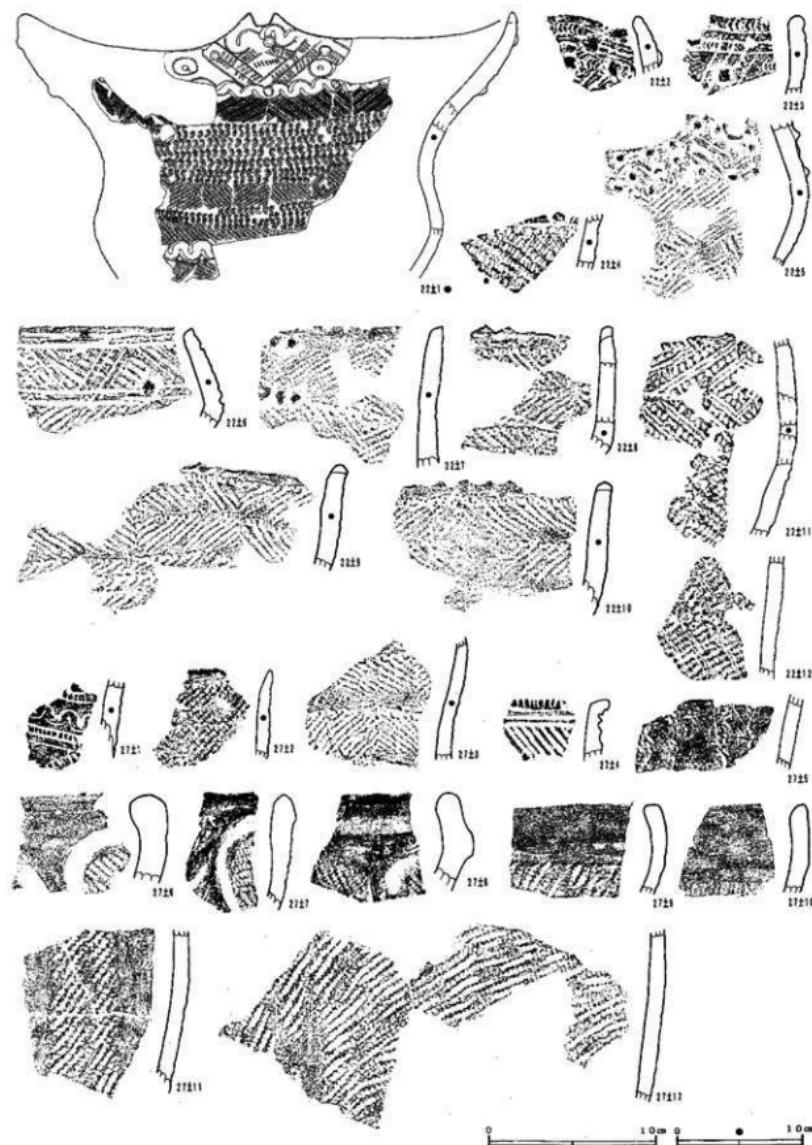
1は有刻の半截竹管により斜位・弧状の文様を施す胸部片である。口縁部文様帶の一部とみられ、文様間には半截竹管によるコンパス文を施す。2・3は羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文（0段多条）のみを施すものである。2は平縁の口縁部片で、口縁部は若干外反する。口縁部直下に幅狭の無文帶を持つ。3は括れを持つ胸部片である。1～3は胎土に纖維を含む。4は平縁の口縁部片で、口唇部には縦位の刻みを施し、内面には稜を持つ。口縁部直下に2条1対の半截竹管による平行沈線を巡らせ、以下は同様の工具による斜位の集合沈線を施す。5は結節を伴う LR 単節斜繩文を縦位に施す胸部片。6～8は口縁部に指円等の区画文を持つ口縁部片で、いずれも区画文内に RL 単節斜繩文を充填する。9・10は横位の沈線により下端区画された無文帶を口縁部直下に持つ口縁部片で、9は単節斜繩文、10は櫛齒状工具による縦位の条線文を、それぞれ胸部に施す。11は沈線による縦位区画内に RL 単節斜繩文を縦位施する胸部片である。12は RL 単節斜繩文を全面に縦位施する胸部片である。13はダイサイト製の打製石斧で、基部を欠損する。14は粗粒安山岩製の凹石である。

第28号土坑出土遺物（第33図）

1はキャリバー形の器形を呈するとみられ、口縁部は平縁である。口縁部直下に沈線を巡らせて幅狭の無文帶を持ち、胸部の括れを境に胸上部には「U」字状に、胸下部には「匁」字状に区画する。区画文内には LR 単節斜繩文を施す。2は平底の底部片で底面直上で若干直立し、大きく外反する器形を呈する。外面には RL 単節斜繩文を施す。

第33号土坑出土遺物（第33図）

1は外反する器形を呈する胸部片で、2条1対の半截竹管による平行沈線を巡らせ、以下は同様の工具により弧状・鋸齒状の文様を施す。2は羽状構成をとる LR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施す胸部片で多段のループ文を伴う。1・2は胎土に纖維を含む。3は波状を呈する口縁部片で、口唇部は肥厚し、内外面には稜を持つ。口縁部直下には縦位の集合短沈線を施す。口縁部文様帶は斜位の刻みを施した隆線を巡らせて下端を区画し、「ハ」字状の短沈線を充填する。以下は2条1対の棒状工具による平行沈線を横位に巡らせ、縦位・斜位沈線及び円形・三角形の刻突を施す。4は内湾する口縁部片で、口縁部直下に1条の沈線を巡らせ、以下は櫛齒状工具による縦位の条線文を施す。5は RL 単節斜繩文を地文とし太沈線による扇手状垂直文を垂下させる胸部片。6・7は隆線ないし沈線を縦位に施して縦位区画する胸部片で、7は縦位区画内に RL 単節斜繩文を縦位施す。



第32圖 土坑出土遺物③

第36号土坑出土遺物（第33・37図）

1は多段のループ文を施す胴部片で、胎土には繊維を含む。2は黒色頁岩製の横型のスクリイバーである。

第37号土坑出土遺物（第33図）

1は口縁部～胴部まで残存する復元個体で、胴部で強く屈曲し、内湾して開く器形を呈し、口縁部には片口部を持つ。片口部両脇には半截竹管による円形文を施した半円形突起を有し、その前後に集合角状突起を付す。部分的に爪形の刺突を施した半截竹管による平行沈線を横位に巡らせて口縁部文様帶を区画し、同様の沈線により文様帶内に鋸齒状文を施す。以下は多段のループ文や羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）及び半截竹管によるコンパス文を施す。2は上げ底状を呈する底部片で、外面及び底面にはRL単節斜繩文（0段多条）を施す。3は平縁の口縁部片で、口唇部は内削ぎ状を呈し、集合角状突起を付す。口縁部直下には4～5本1単位の鋸齒状の刻み列を施す。多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。いずれも胎土には繊維を含む。

第42号土坑出土遺物（第33図）

1は波状を呈する口縁部片で、口縁部には沈線により弧状の区画文を施し、RL単節斜繩文を横位施文する。2も波状口縁部片で、口縁部直下に隆線を巡らせて幅狭の無文帯を区画し、以下はLR単節斜繩文を縦位施文する。3は太沈線により縦位区画し、RL単節斜繩文を縦位施文する。

第44号土坑出土遺物（第33・37図）

1は多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す胴部片である。胎土には繊維を含む。2は直立気味に立ち上がる平底の底部片である。3は結晶片岩製の棒状石製品である。

第45号土坑出土遺物（第33図）

1は口縁部～胴部下半の復元個体で、胴部中位が張り、緩やかに内湾して立ち上がる器形を呈する。口唇部は角頭状を呈し、有刻の白畫状突起を付す。口縁部直下には5本ほどを1単位とする鋸齒状の刻み列を施す。半截竹管による平行沈線を巡らせて上端を区画した口縁部文様帶には、部分的に刻みを施した3条1対の平行沈線により鋸齒状文を施し、基点には円形文を施す。その他刻みや円形貼付文を施す。胴部には多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。2は羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施す。いずれも胎土には繊維を含む。

第49号土坑出土遺物（第33図）

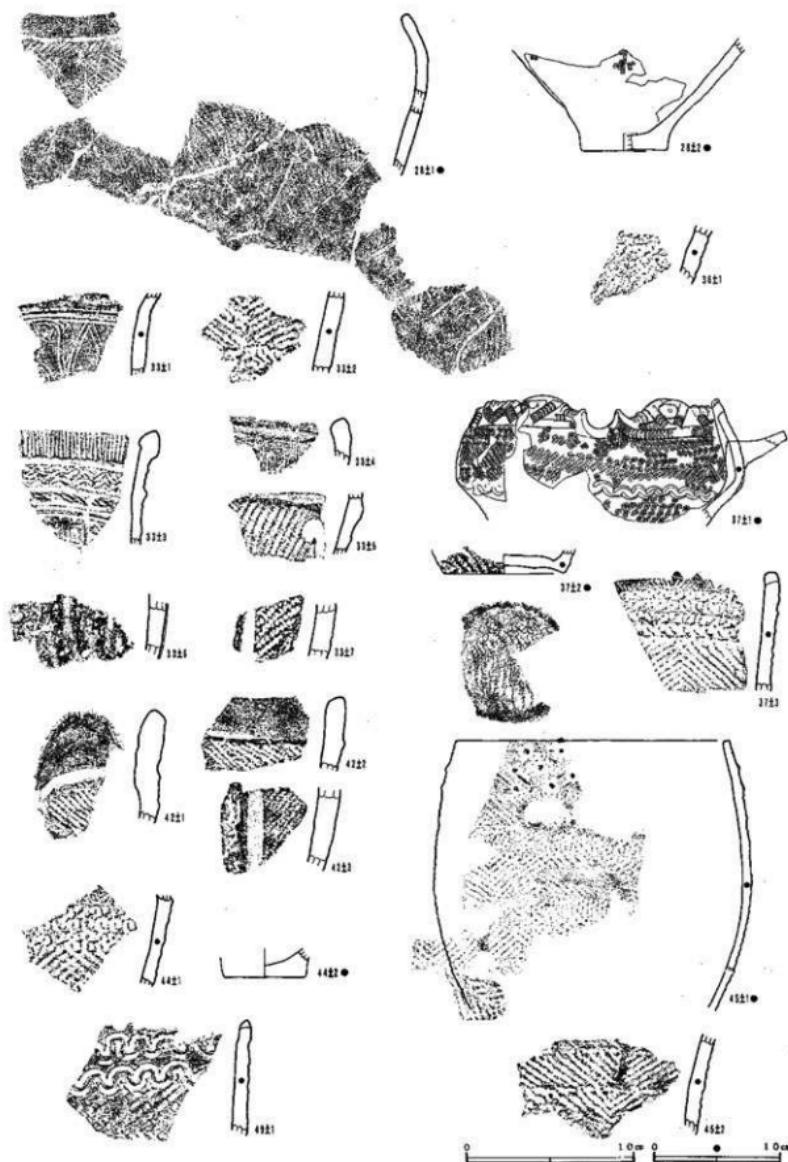
1は平縁の口縁部片で、口唇部には集合角状突起を付す。羽状構成をとるLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施し、口縁部直下には半截竹管によるコンパス文を2条巡らせる。胎土には繊維を含む。

第50号土坑出土遺物（第34図）

1は山形の押型文を縦位施文した胴部片で、胎土には片岩を含む。2・3は多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜繩文（0段多条）を施した胴部片で、2は半截竹管による崩れたコンパス文を伴う。2・3は胎土に繊維を含む。4は波状を呈する口縁部片で、内湾して立ち上がる器形を呈し、内面口縁部直下には稜を持つ。口縁部直下には斜位の短沈線を施し、波頂部直下には三角刺突文を施す。口縁部文様帶には貼付文及び横位・斜位の沈線文を施す。5は結節を伴うLR単節斜繩文を縦位施文する胴部片。6は平縁の口縁部片で、隆帯や沈線による弧状の区画文を施し、区画文内にLR単節斜繩文を横位施文する。7は波状を呈する口縁部片で、口縁部直下に隆帯を巡らせて無文帯を区画する。8は上げ底状を呈する底部片である。

第52号土坑出土遺物（第34図）

1は口縁部～胴部下半の復元個体である。底部から外反して開いて胴部中位が張り、頸部で括れ、若干内湾気味に開く器形を呈する。口縁部は波状を呈し、波頂部は山形を呈する。波頂部脇には集合角状突起を付す。半截竹管によるコンパス文を口縁部直下に巡らせ、波頂部直下には縦位の刻み列や、円形刺突及び縦位の刻みを施した



第33図 土坑出土遺物④

円形貼付文を施す。以下は多段のループ文及び羽状構成をとる閉端環付のLR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施し、頸部には半截竹管によるコンパス文を巡らせる。胎土には繊維を含む。

第55号土坑出土遺物（第35・37図）

1は片口を持つ深鉢の復元個体である。外反して立ち上がり、頸部で屈曲して内湾して開く器形を呈する。平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈する。片口部は欠損するものの、片口部脇には平行沈線による鋸歯状文を施した半円形突起を付す。多段のループ文及び羽状構成をとるLR・RL 単節斜繩文（0段多条）を地文とし、口縁部直下に1条、胴部に数条の櫛歯状工具によるコンパス文を巡らせる。2は鉢形土器の復元個体で、直線的に外傾して立ち上がり、頸部で屈曲して直立して開く器形を呈する。外面には羽状構成をとる正反の合（LR・RLをLに揃つたものとRに揃つたもの）を施し、胴部中位及び底部付近に半截竹管によるコンパス文を巡らせる。3は上げ底状を呈する底部の復元個体で、直線的に外反して立ち上がり、組紐文を地文とする。4は平縁の口縁部片で、半截竹管による平行沈線を巡らせて口縁部文様帯の上下を区画し、文様帯内には2～3条を1単位とする半截竹管を用いた平行沈線により鋸歯状・弧状等の幾何学文を施す。地文には組紐文を施し、口縁部文様帯内も地文は磨り消さない。5・6は組紐文を地文とする胴部片で、5は櫛歯状工具による鋸歯状文を、6は半截竹管によるコンパス文を施す。1～6は胎土に繊維を含む。7はひん岩製の磨石、8・9は粗粒安山岩製の凹石である。

第56号土坑出土遺物（第34図）

1は2条1対の平行沈線を横位に施す胴部片で、上端には円形刺突文を沿わせる。2は地文に繩文を施し、沈線により「L」字状の文様を施す胴部片である。

第60号土坑出土遺物（第34図）

1は波状を呈する口縁部片で、口唇部は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する。口縁部直下には3～4本1単位の鋸歯状の刻み列を施す。口縁部文様帯は半截竹管を用いた平行沈線により区画し、同様の工具により端部が簾手状を呈する鋸歯状文を施す。地文にはLR 単節斜繩文（0段多条）を施し、口縁部文様帯内にも一部地文がみられる。2は平縁の口縁部片で、内湾して開く器形を呈するとみられ、口唇部は内削ぎ状を呈する。組紐文を地文とする。いずれも胎土には繊維を含む。

第70号土坑出土遺物（第37図）

1は粗粒安山岩製の磨石である。

第76号土坑出土遺物（第34・37図）

1は底部の復元個体で、外反して立ち上がる器形を呈する。2は胴部片で、隆線により弧状等に区画し、区画内に無節L繩文を縱位施文する。3は黒色頁岩製のヘラ型石器である。

第87号土坑出土遺物（第34図）

1・2は組紐文を施す胴部片で、いずれも胎土には繊維を含む。

第98号土坑出土遺物（第37図）

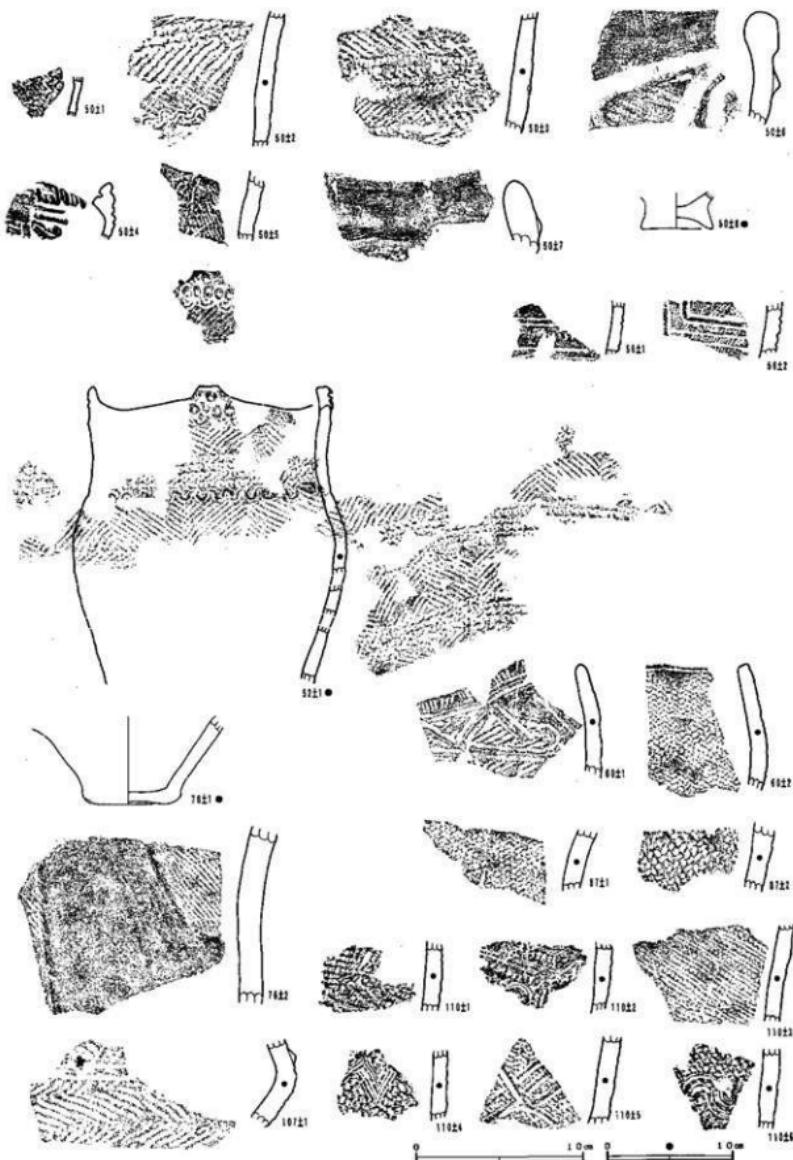
1は粗粒安山岩製の凹石である。

第102号土坑出土遺物（第37図）

1は頁岩製の打製石斧である。

第107号土坑出土遺物（第34図）

1は胴部片で、頸部で屈曲し内湾して開く器形を呈するとみられる。半截竹管を用いた平行沈線を巡らせて口縁部文様帯を区画し、文様帯内には2条1対の同様の沈線による斜位の文様や円形貼付文を施す。地文には羽状構成をとる閉端環付のLR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施し、文様帯内も地文は磨り消さない。胎土には繊維を



第34圖 土坑出土遺物⑤

含む。

第110号土坑出土遺物（第34・37図）

1は単節斜繩文を地文とする胴部片で、羽状構成をとる閉端環付のLR・RL 単節斜繩文（0段多条）を施す。2・3は正反の合を地文とする胴部片で、2はLRとRLをRに撫ったものを地文とし、半截竹管によるコンパス文を施す。3はLRとRLをRに撫ったものを施す。4～6は組紐文を地文とする胴部片で、4は櫛齒状工具による櫛齒状文を、5は半截竹管を用いた平行沈線による斜位・弧状等の幾何学文を、6は半截竹管によるコンパス文を、それぞれ施す。いずれも胎土には纖維を含む。7は粗粒安山岩製の磨石である。

第156号土坑出土遺物（第35図）

1は沈線により縦位区画し、区画内にLR 単節斜繩文を縦位施文した胴部片である。

第160号土坑出土遺物（第35図）

1は波状を呈する口縁部片で、キャリバー形の器形を呈するとみられる。波頂部には渦巻状の突起が貼付され、口縁部直下には隆帯で区画された無文帯を持つ。胴部には2条1対の隆帯により「匚」字状の区画文を施し、区画内にはLR 単節斜繩文を縦位施文する。

第172号土坑出土遺物（第36図）

1は底部の復元個体で、外反して立ち上がる器形を呈する。2は波状を呈する小型深鉢の口縁部片で、波頂部には上面に円形刺突を施した突起を付す。口縁部直下には隆線により下端を区画した幅狭の無文帯を持ち、以下は無節L繩文を施文する。3は胴部片で、隆線により縦～斜位区画し、区画内にはRL 単節斜繩文を縦位施文する。

第178号土坑出土遺物（第35図）

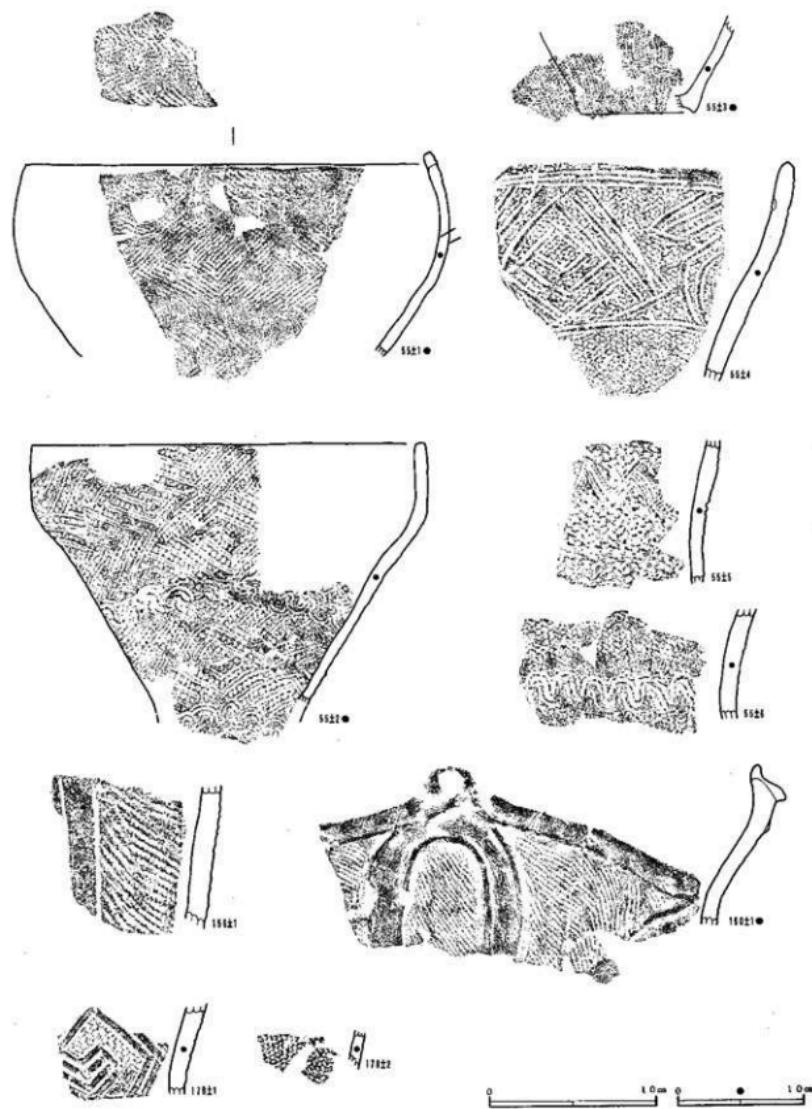
1・2はともに組紐文を地文とする胴部片で、1は半截竹管を用いた4条ほどを1単位とする平行沈線により幾何学文を施す。いずれも胎土には纖維を含む。

第180号土坑出土遺物（第36図）

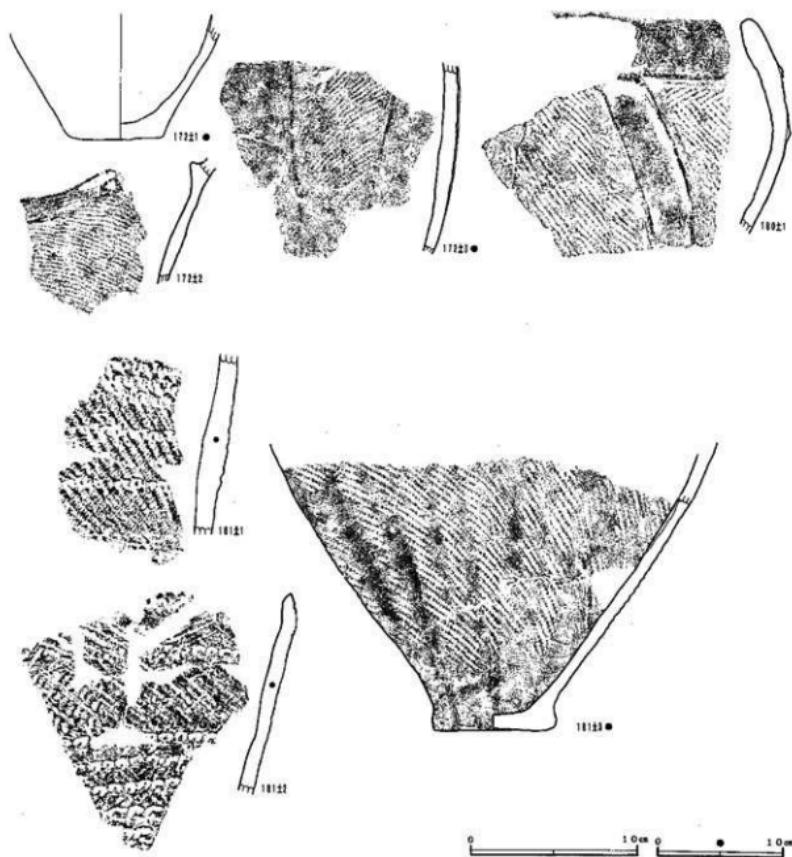
1は波状口縁部片で、口縁部直下には隆線により下端を区画した幅広の無文帯を持つ。胴部には2条1対の隆線により「匚」字状の区画文を施し、区画内には無節L繩文を横位・縦位施文する。

第181号土坑出土遺物（第36図）

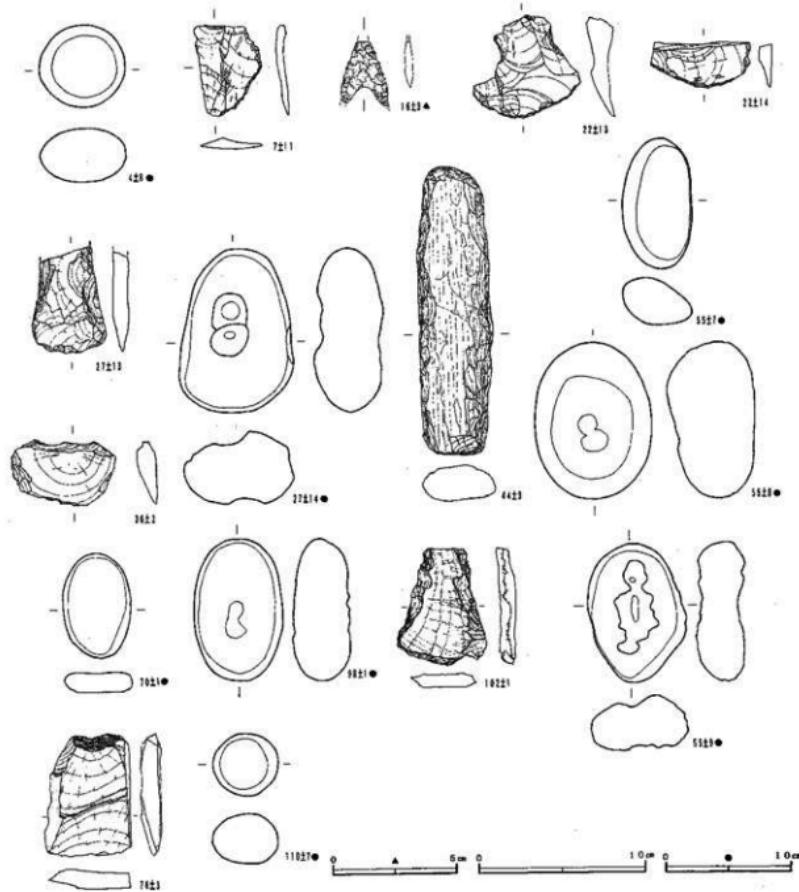
1は多段のループ文及び閉端環付のRL 単節斜繩文（0段多条）を施す胴部片である。2は波状を呈する口縁部片で、波頂部は台形を呈する。口唇部は内削ぎ状を呈し、波頂部脇には集合角状突起を施す。口縁部文様帶には半截竹管を用いた平行沈線により櫛齒状文を施し、以下は多段のループ文及び羽状構成をとる附加条繩文を施す。1・2は胎土に纖維を含む。3は胴部下半～底部の復元個体で、底部直上で直立し、大きく外反して立ち上がる器形を呈する。胴部には全面にLR 単節斜繩文を縦位施文するが、底部付近は無文である。



第35圖 土坑出土遺物⑥



第36図 土坑出土遺物⑦



第37図 土坑出土遺物⑧

第2表 土坑出土石器等観察表

遺物番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
4土 8	磨石	粗粒安山岩	6.9	6.8	4.4	196	完形。
7土 11	スクレイパー	黒色頁岩	5.4	4.1	0.8	15.3	縦型。完形。
16土 3	石鏃	硬質頁岩	(2.6)	1.9	0.3	1.2	先端部欠損。
22土 13	スクレイパー	黒色頁岩	6.2	6.4	1.7	42.4	横型。完形。
	14	スクレイパー	黒色頁岩	2.8	6.0	0.9	16.0 横型。端部欠損か。
27土 13	打製石斧	ディサイト	(6.4)	4.3	1.0	34.8	短筒形。基部欠損。
	14	凹石	粗粒安山岩	13.2	9.2	5.8	807 両面・側面に凹部。
36土 2	スクレイパー	黒色頁岩	4.0	6.2	1.2	32.9	横型。完形。
44土 44	棒状石製品	結晶片岩	17.3	4.5	2.1	270	端部欠損か。
55土 7	磨石	ひん岩	10.5	5.6	3.8	325	完形。
	8	凹石	粗粒安山岩	12.6	9.5	7.1	1037 片面に凹部あり。
	9	凹石	粗粒安山岩	11.2	8.0	4.4	452 両面に凹部あり。
70土 1	磨石	粗粒安山岩	8.3	5.4	1.6	78	完形。
76土 3	ヘラ型石器	黒色頁岩	7.4	5.1	1.3	65	完形。
98土 1	凹石	粗粒安山岩	11.4	7.1	4.7	527 両面に凹部あり。	
102土 1	打製石斧	頁岩	7.0	5.4	1.2	49.1	完形。
110土 7	磨石	粗粒安山岩	5.2	5.1	4.0	111	完形。

第2項 古代の土坑

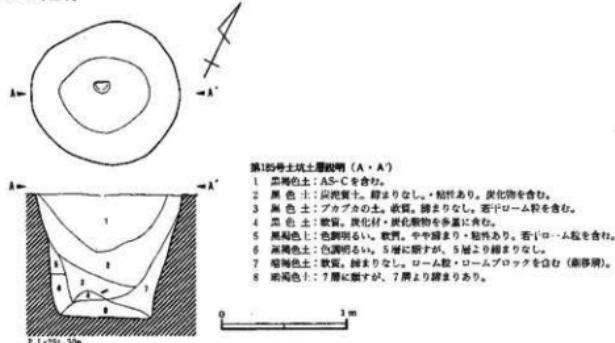
第185号土坑（第38・39図）

位 置 第42号住居址付近とみられるものの、詳細な位置は不明。規模・形状 長軸118cm・短軸114cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは101cmを測り、断面形は箱状を呈する。覆土下層より炭化した穀物が検出され、特筆されるべき事例である。遺 物 土師器壺及び須恵器碗が出土し、これを図示し得た。

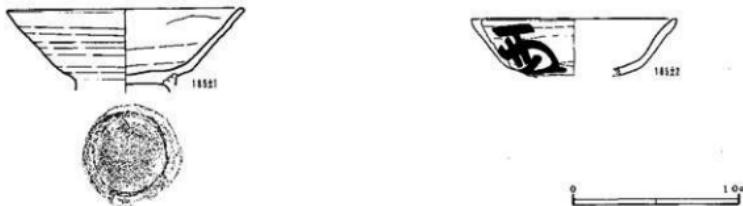
第3表 土坑出土土器観察表①

遺物番号	種類 器種	残存状態	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調	成・整形技法の特徴
185土	1 須恵器 高台付碗	口縁部～底部 90% 高台欠損	口 14.2 底 一 高 (4.7)	①白色粒・黒色粒・砂粒 ②窯元焰 良③灰白色	ロクロ成形。底部回転糸切り離し後付け高台。
	2 土師器 壺	口縁部～底部 25%	口 12.2 底 (5.5) 高 (3.4)	①白色粒・砂粒②腰化焰 良 ③暗赤褐色	口縁部及び内面は横施で。体部～底部はヘラ削り。外面に「西」？の墨書きあり。

第185号土坑



第38図 古代の土坑



第39図 土坑出土遺物

第3項 中世～近世の土坑

第1号土坑（第40図）

位 置 調査区南側とみられるが、詳細な位置については不明。規模・形状 土器や石製品を含んだ集石の下層で掘り込みが確認された。長軸104cm・短軸88cmを測り、平面形は不整横円形を呈する。深さは13cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺 物 上層～中層にかけては集石をはじめ、空風輪や板碎等の石製品、軟質陶器等が検出された。これらの内、須恵器・軟質陶器各1点・石製品4点を図示し得た。

第2号土坑（第40図）

位 置 27-30～31グリッドに位置し、南東側で第52号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 南北方向に長軸を持ち、円形を呈する縦坑を階段状に掘り込み、縦坑の下部を北方向に掘り込んで長方形を呈する主室へと至る。主室は長軸311cm・短軸239cm・深さ186cm、縦坑は長軸137cm・短軸127cmをそれぞれ測る。遺 物 なし。備 考 本土坑はその形状から地下式土坑と考えられる。

第3号土坑（第40図）

位 置 24-31グリッドに位置し、東側で第1号掘建柱建物址に、南側で第36号土坑に隣接する。重複関係 主室部中央をピットに切られる。規模・形状 東西方向に長軸を持ち、隅丸方形の縦坑を掘り込み、縦坑下部を西方向に掘り込んでややゆがんだ隅丸長方形を呈する主室へと至る。縦坑西側底面から掘り込んでいるため、縦坑と主室の間には段差を有する。主室は長軸270cm・短軸173cm・深さ154cmを、縦坑は長軸110cm・短軸100cmをそれぞれ測る。遺 物 繩文土器片1点が出土している。備 考 本土坑はその形状から地下式土坑と考えられる。

第25号土坑（第41図）

位 置 24-29グリッドに位置し、東側で第24号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 集石の下層で掘り込みが検出された。長軸63cm・短軸51cmを測り、平面形は稍円形を呈する小型の土坑である。深さは37cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺 物 上層から中層にかけて集石が検出され、集石に混じり板碎等の石製品が検出された。これらの内板碎1点を図示し得た。その他繩文土器片が数点出土している。

第53号土坑（第41図）

位 置 不明。規模・形状 誠に遺憾ながら平面図を紛失してしまったため不明だが、断面図より判断すると、主室・縦坑を含めた全長は3mほどと考えられる。また断面観察より、天井部は崩落もみられるものの部分的に残存していた。遺 物 土器・陶磁器片や板碎片などが出土し、この内培格片2点を図示し得た。その他繩文土器片1点が出土している。備 考 本土坑はその形状から地下式土坑と考えられる。

第95号土坑（第41図）

位 置 31-36グリッドに位置し、北側で第30号住居址に、東側で第5号溝址に、西側で第97号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 北西～南東方向に主軸を持ち、円形を呈するとみられる縦坑を掘り込み、縦坑下部を北方向に掘り込んで、北壁及び東壁が弧状を呈するややゆがんだ隅丸方形を呈する主室へと至る。縦坑と主室の間には段差を有する。主室部は長・短軸とも2mほど、縦坑は径1.3mほどを測る。遺 物 なし。備 考 本土坑はその形状から地下式土坑と考えられる。

第111号土坑（第41図）

位 置 30-36グリッドに位置し、東側で第94号土坑に隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸34cm・短軸28cmを測り、平面形は円形を呈する小型の土坑である。深さ・断面形状は不明である。遺 物 カワラケ1点が出土し、これを図示し得た。

第124号土坑（第41図）

位 置 31-37グリッドに位置し、北側で第79・82号土坑に、南側で第125号土坑に、西側で第126号土坑にそれぞれ隣接する。重複関係 なし。規模・形状 長軸50cm・短軸45cmを測り、平面形は円形を呈する小型の土坑であ

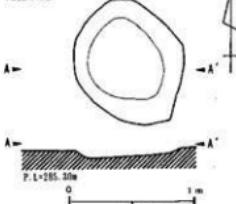
第1号土坑
遺物出土状況(上層)



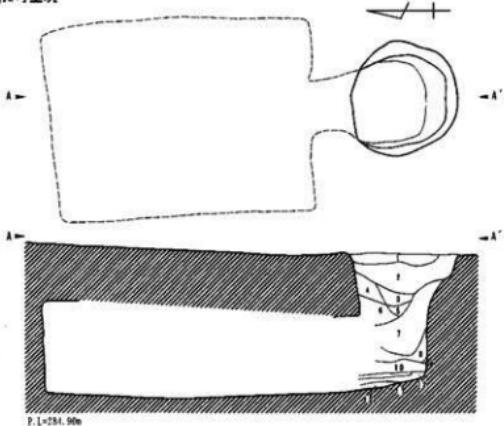
遺物出土状況(下層)



完掘状況



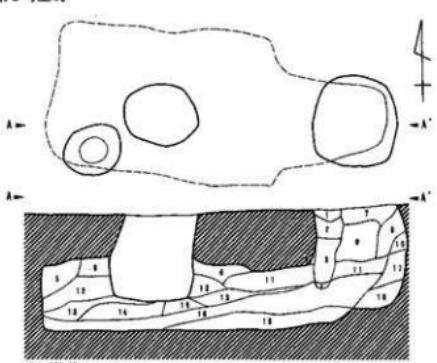
第2号土坑



第2号土坑土層剖面図 (A-A')

- 1 塗膜褐色土：色調暗い。鉢があり。
- 2 塗膜褐色土：ロームブロック・同化物・白色スクリップを含む。
- 3 塗膜褐色土：上面に黒いローム粉を含む。ロームブロックを含まない。
- 4 塗膜褐色土：若干ローム・鉢を含む。
- 5 塗膜褐色土：3層に分かれたもの有。鉢もありなし。
- 6 塗膜褐色土：1層に分かれたもの有。鉢ありなし。
- 7 塗膜褐色土：1層に分かれて、鉢ありある。
- 8 塗膜褐色土：鉢無。ローム粉を含まない。
- 9 塗膜褐色土：色調暗い。鉢無。鉢ありなし。
- 10 塗膜褐色土：色調暗い。鉢無。ローム粉。
- 11 塗膜褐色土：褐色ロームを點打けている。
- 12 塗膜褐色土：鉢無。鉢ありなし。
- 13 塗膜褐色土：ローム粉を多量に含む。

第3号土坑



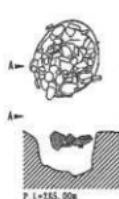
第3号土坑土層剖面図 (A-A')

- 1 暗褐色土：鉢無。鉢ありあり。ロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土：鉢ありあり。ローム粉を含まない。
- 3 暗褐色土：鉢ありあり。ローム粉を含まない。
- 4 暗褐色土：鉢ありあり。
- 5 暗褐色土：鉢ありあり。ローム粉を含む。
- 6 暗褐色土：鉢ありなし。ローム粉を含まない。
- 7 暗褐色土：鉢ありあり。岩「T」・ムームブロックを含む。
- 8 暗褐色土：鉢ありあり。ロームブロックを含む。
- 9 暗褐色土：鉢ありあり。
- 10 暗褐色土：ローム粉を多量に含む。
- 11 暗褐色土：ローム粉を多量に含む。
- 12 暗褐色土：鉢ありあり。岩「T」・ムームブロック・黑色スクリップを含む。
- 13 暗褐色土：鉢ありあり。ローム粉を含む。
- 14 暗褐色土：ロームブロックを50%程度以上含む。
- 15 黄褐色土：天井部の崩落層。
- 16 黄褐色土：井干塗ありあり。ローム粉を含む(天井部の崩落)。
- 17 暗褐色土：鉢ありなし。ローム粉。ロームブロックを含む。
- 18 暗褐色土：鉢ありあり。ローム粉。ロームブロックを含む。
- 19 暗褐色土：やや鉢。鉢ありあり。ローム粉。ロームブロックを含む。



第40図 中世～近世の土坑①

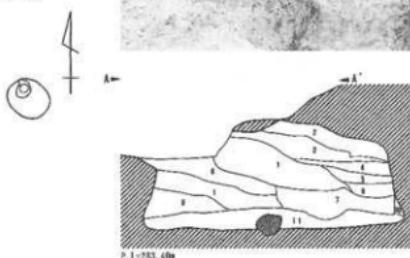
第25号土坑



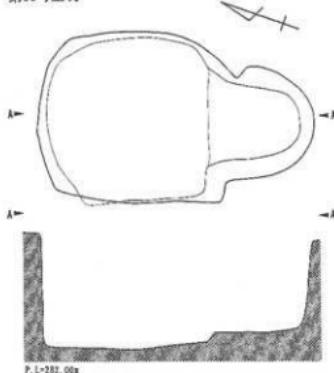
第53号土坑



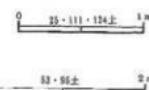
第111号土坑



第95号土坑

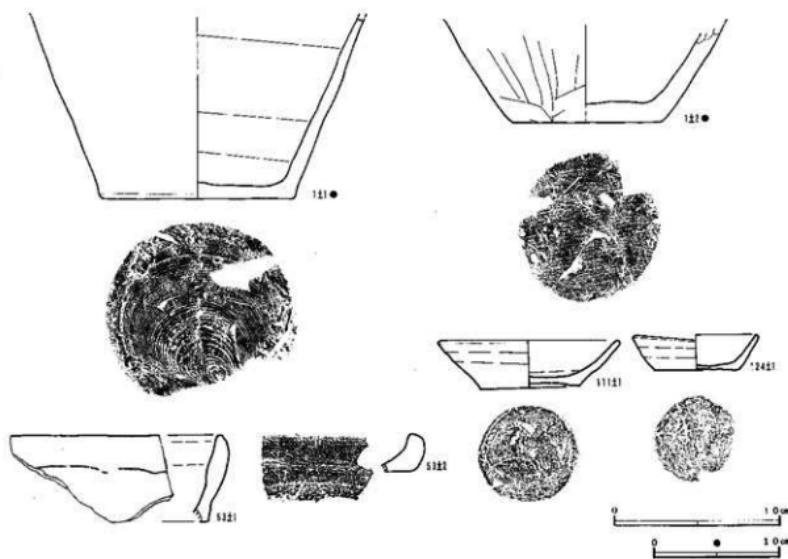


第124号土坑



第41図 中世～近世の土坑②

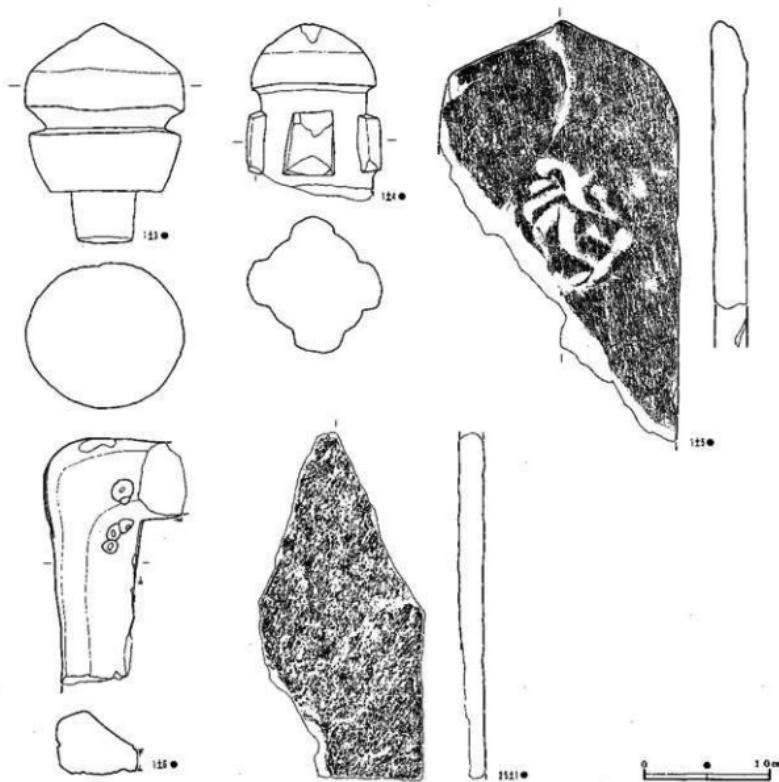
る。深さは48cmを測り、断面形は箱状を呈する。遺物 カワラケ1点が出土し、これを図示し得た。



第42図 土坑出土遺物①

第4表 土坑出土土器観察表②

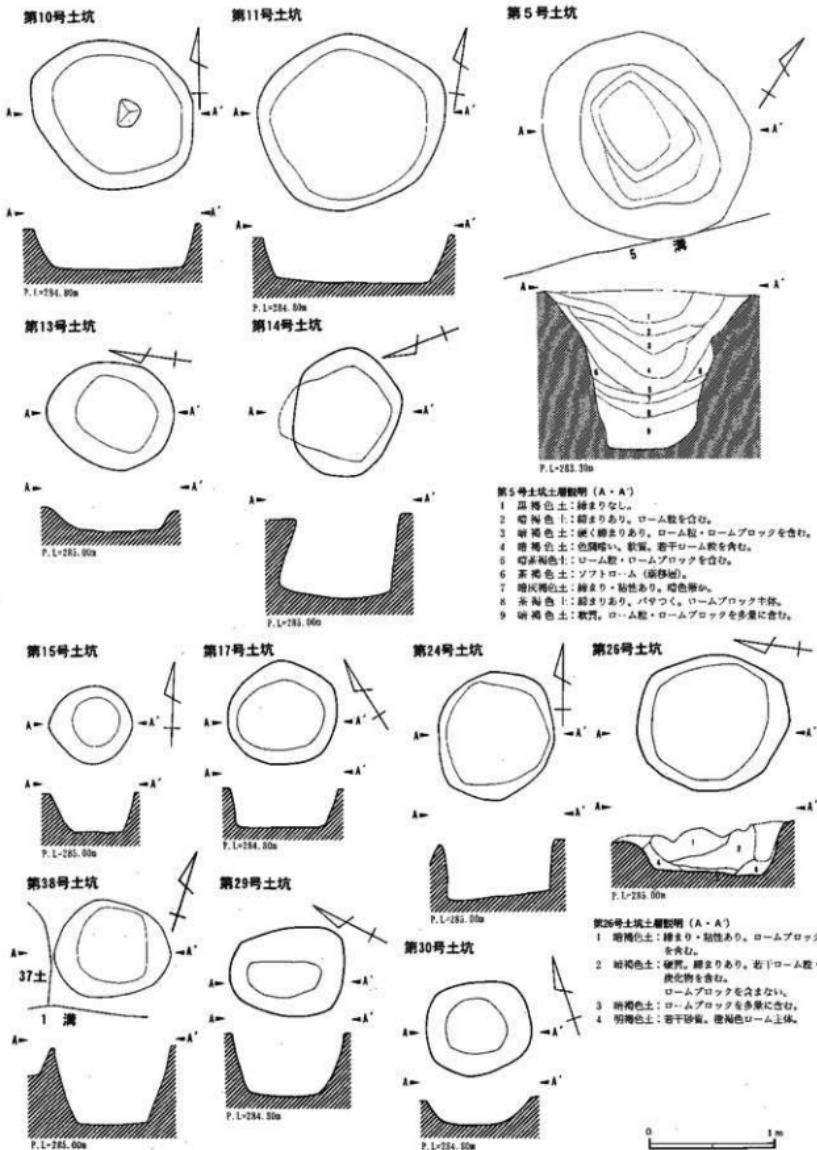
遺物番号	種類 器種	残存状態	法量 (cm)	釉薬または ①胎土②焼成③色調	成・整形技法の特徴
1土	須恵器? 甕?	底部完存。肩部25%残存	口一 底 15.1 高(14.5)	①黒色粒・砂粒②還元焰③灰色	ロクロ成形後外面ナデ調整。底部糸切り無調整。
	軟質陶器 甕	底部80%残存	口一 底 11.8 高(7.8)	①黒色粒・砂粒②還元焰③灰色	ロクロ成形。外面ヘラ削り。内面ナデ調整。底部には板状の圧痕。
53	土筋質土器 焰	口縁部破片	口一 底一 高一	①砂粒②酸化焰③にぶい黄褐色	外面体部上半ナデ調整。体部中位に輪模痕。体部下半は無調整。
	土鄭質土器 焰	口縁部破片	口一 底一 高一	①砂粒②酸化焰③明褐色	内外面とも体部はナデ調整。外面にはスス付着。
111土	土師質土器 皿	口縁部～底部 90%残存	口 10.9 底 6.0 高 3.0	①白色粒・黒色粒・砂粒 ②酸化焰③橙色	ロクロ成形。底部回転糸切り無調整。内面アバク状剥離。
124土	土鄭質土器 皿	口縁部～底部 75%残存	口 7.6 底 5.1 高 2.1	①砂粒②酸化焰③橙色	ロクロ成形。底部糸切り無調整。口縁部内外面にスス付着。



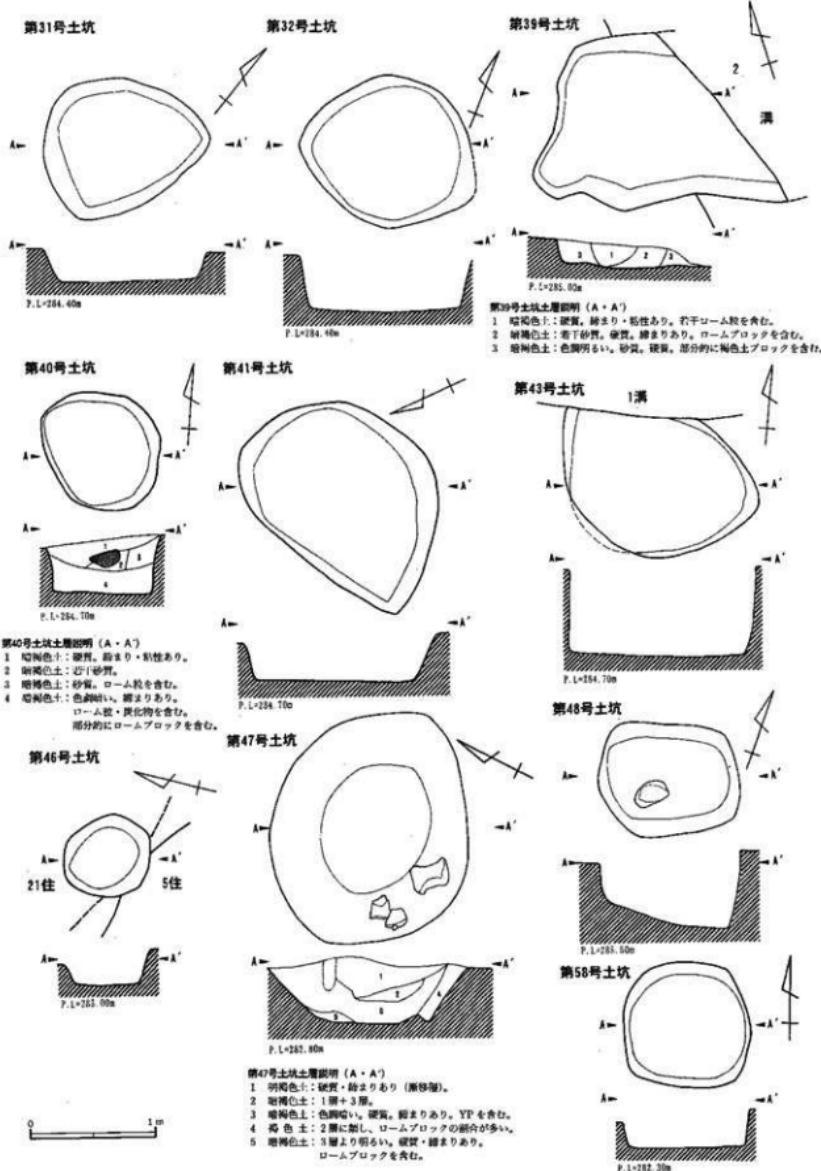
第43図 土坑出土遺物②

第5表 土坑出土石製品観察表

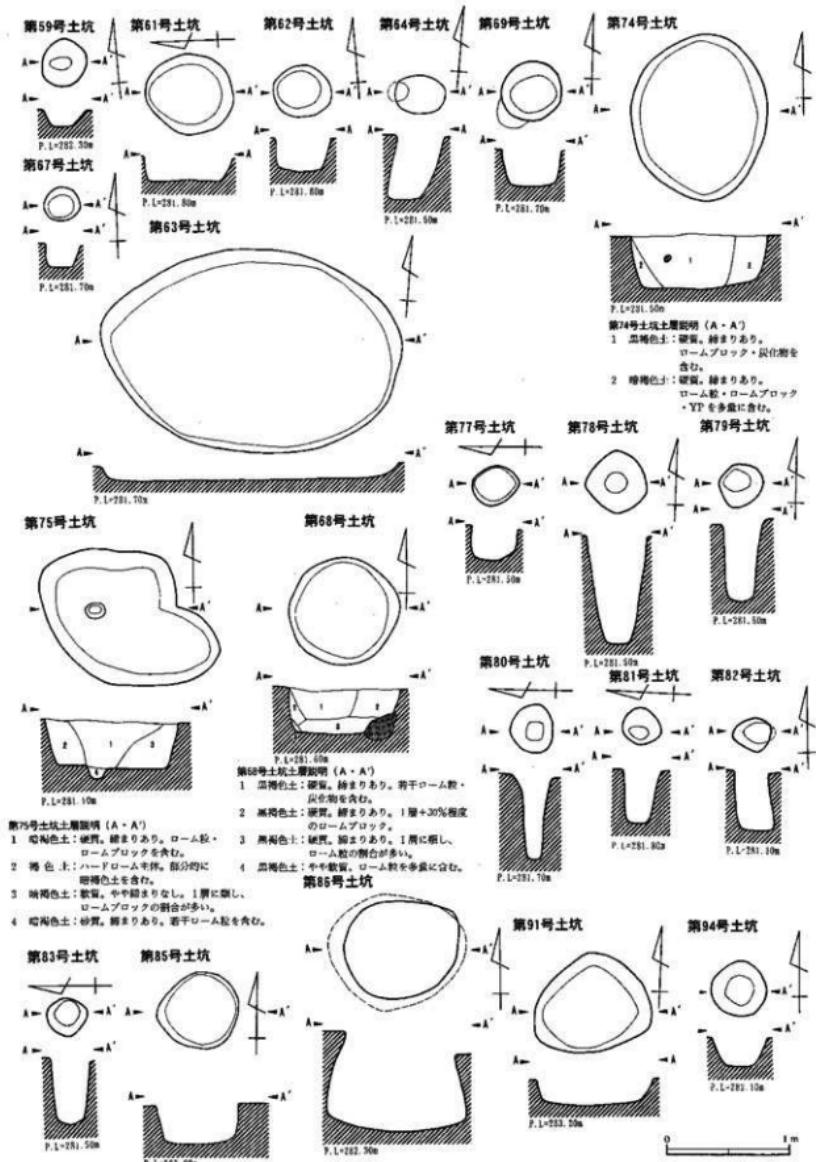
遺構番号	種類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
1土	3 空風輪	安山岩	17.8	12.7	12.7	1942	完形。
	4 宝塔相輪	安山岩	(14.3)	10.8	11.0	1348	宝珠及び水煙のみ。諸花は省略。
	5 板碑	緑泥片岩	(34.0)	19.4	2.8	2469	上半部のみ。種子キリーク。蓮座。
	6 不明石製品	緑泥片岩	(19.8)	(10.1)	5.1	1267	石皿(裏面は多孔石)の転用。
25土	1 板碑	緑泥片岩	(28.1)	(13.4)	2.2	995	破片。



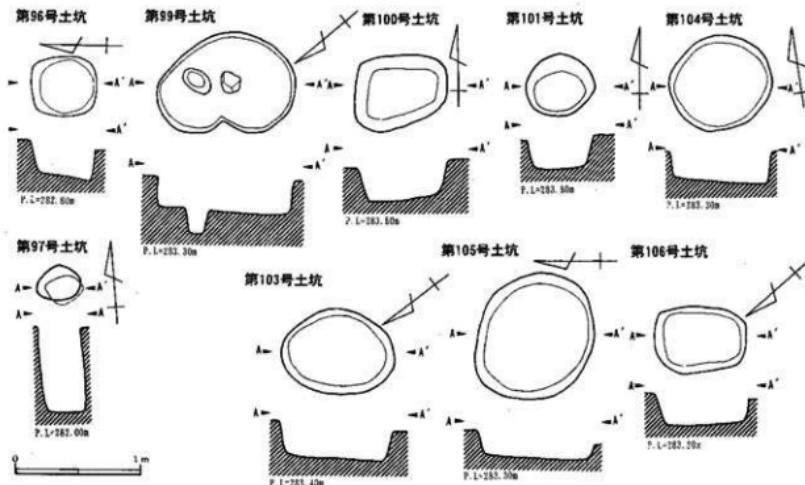
第44図 時期不明の土坑①



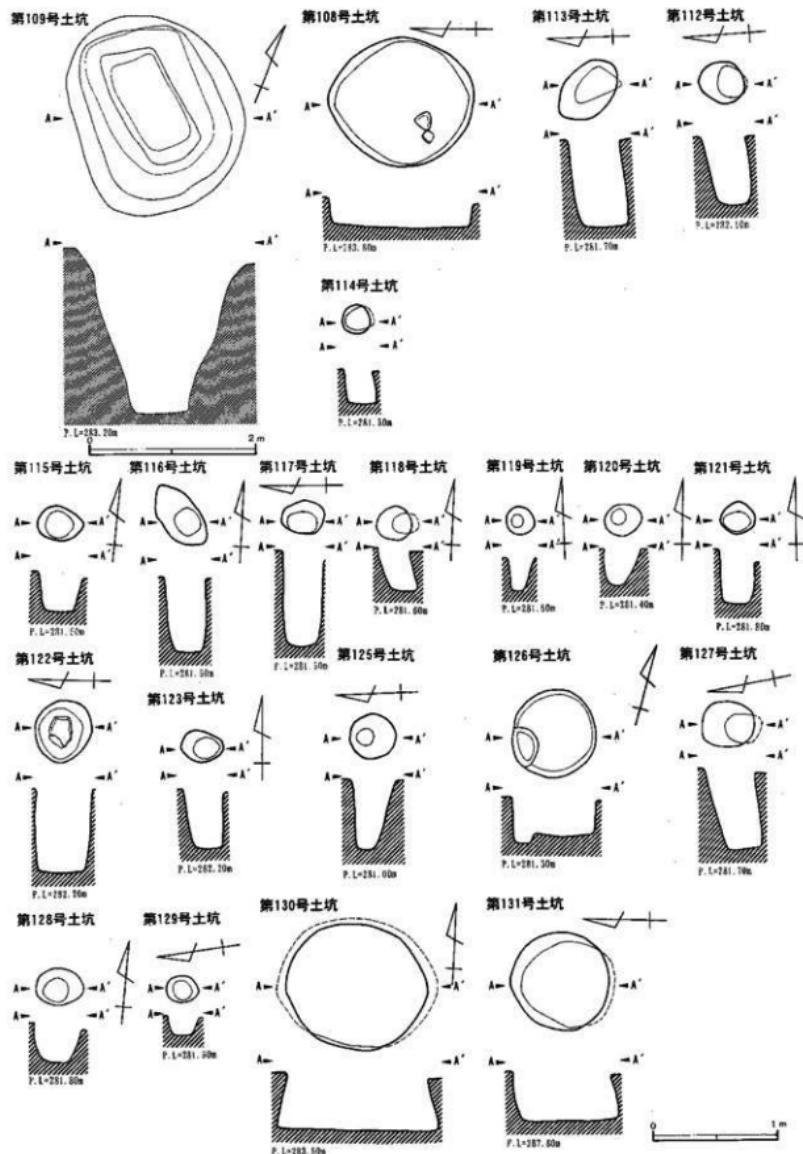
第45図 時期不明の土坑②



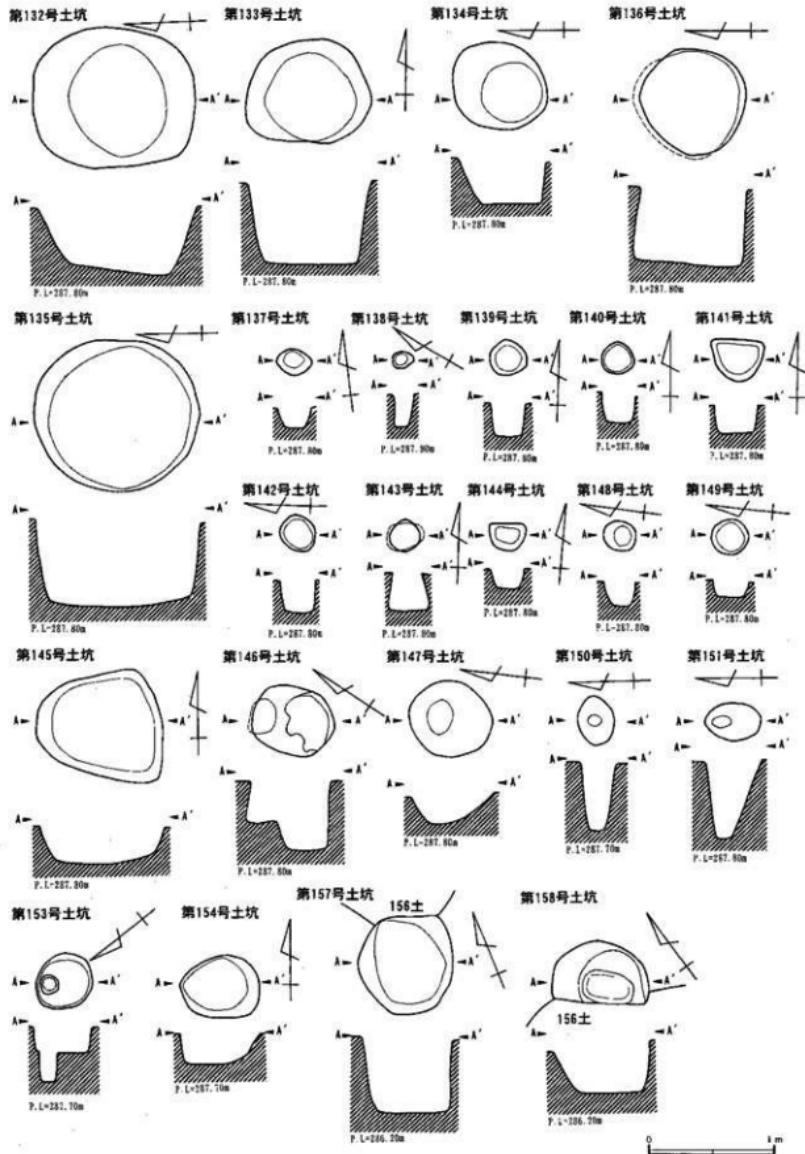
第46図 時期不明の土坑③



第47図 時期不明の土坑④

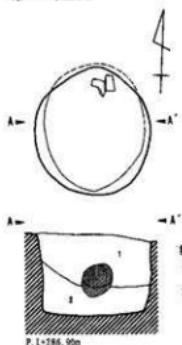


第48図 時期不明の土坑(⑤)



第49図 時期不明の土坑⑥

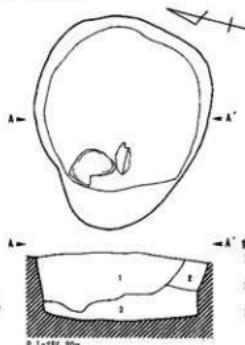
第173号土坑



第173号土坑土層説明 (A・A')

- 黒褐色土：硬く固まりあり。
ローム粒・鐵土粒を含む。
- 緑褐色土：やや軟質。ローム粒・若干のロームブロックを含む。

第176号土坑



第176号土坑土層説明 (A・A')

- 黒褐色土：堅く固まりあり。
ローム粒を多量に含む。
- 馬蹄色土：1層に統し。
1層より組まりなし。
- 緑褐色土：やや軟質。
ロームブロックを多量に含む。

0 1m

第50図 時期不明の土坑⑦

第6表 土坑一覧表(1)

造構番号	図版番号	写真図版	位 置	平 面 形	長軸×短軸×深さ(cm)	備 考
01	40図	PL-10	不 明	椭 圆 形	104× 88 × 13	
02	40図	PL-10	27-30~31	長 方 形	488× 239 × 186	地下式土坑。入口部は円形を呈する。
03	40図	PL-10	24-31	隅丸長方形	413× 173 × 154	地下式土坑。入口部は隅丸方形を呈する。
04	21図	—	25-32	椭 圆 形	138× 127 × 41	
05	44図	—	30-34	椭 圆 形	263× 226 × 197	底面は隅丸長方形を呈する。
06	21図	PL-6	24-29	隅丸長方形	196× 88 × 144	陥し穴。
07	21図	PL-6	28-30	円 形	139× 127 × 67	
08	21図	—	28-30	椭 圆 形	130× 107 × 50	
09	21図	—	28-29~30	隅 丸 方 形	93× 91 × 54	
10	44図	—	28-29~30	椭 圆 形	138× 120 × 41	
11	44図	—	28-29	椭 圆 形	153× 136 × 42	
12	21図	—	28-29	隅丸長方形	119× 103 × 33	
13	44図	—	28-29	椭 圆 形	98× 86 × 20	
14	44図	—	28-29	椭 圆 形	103× 85 × 68	縄文土器片(中期) 3点出土。
15	44図	—	27~28-29	円 形	66× 63 × 38	
16	21図	—	27-29~30	円 形	44× 42 × 14	
17	44図	—	28-30	椭 圆 形	87× 84 × 34	
18	22図	PL-6	27-28	椭 圆 形	157× 141 × 71	
19	22図	PL-6	24-28	椭 圆 形	102× 89 × 44	
20	22図	PL-6	24-28	椭 圆 形	152×(140) × 28	
21	22図	PL-7	24~25-28	椭 圆 形	115× 85 × 33	
22	23図	PL-7	24-29	椭 圆 形	145× 109 × 70	
23	23図	PL-7	24-28	円 形	100× 95 × 29	
24	44図	—	24-29	円 形	107× 94 × 47	縄文土器片(中期) 1点出土。
25	41図	PL-11	24-29	円 形	63× 51 × 37	
26	44図	PL-11	24-28	円 形	126× 109 × 45	
27	23図	PL-7	23-28~29	椭 圆 形	234× 144 × 120	陥し穴。底面は不整隅丸長方形を呈する。
28	23図	PL-7	29-30	隅 丸 方 形	129×(123) × 27	
29	44図	—	28-30	椭 圆 形	92× 72 × 52	縄文土器片(中期) 1点出土。
30	44図	—	28-30	円 形	84× 74 × 26	

第7表 土坑一覧表(2)

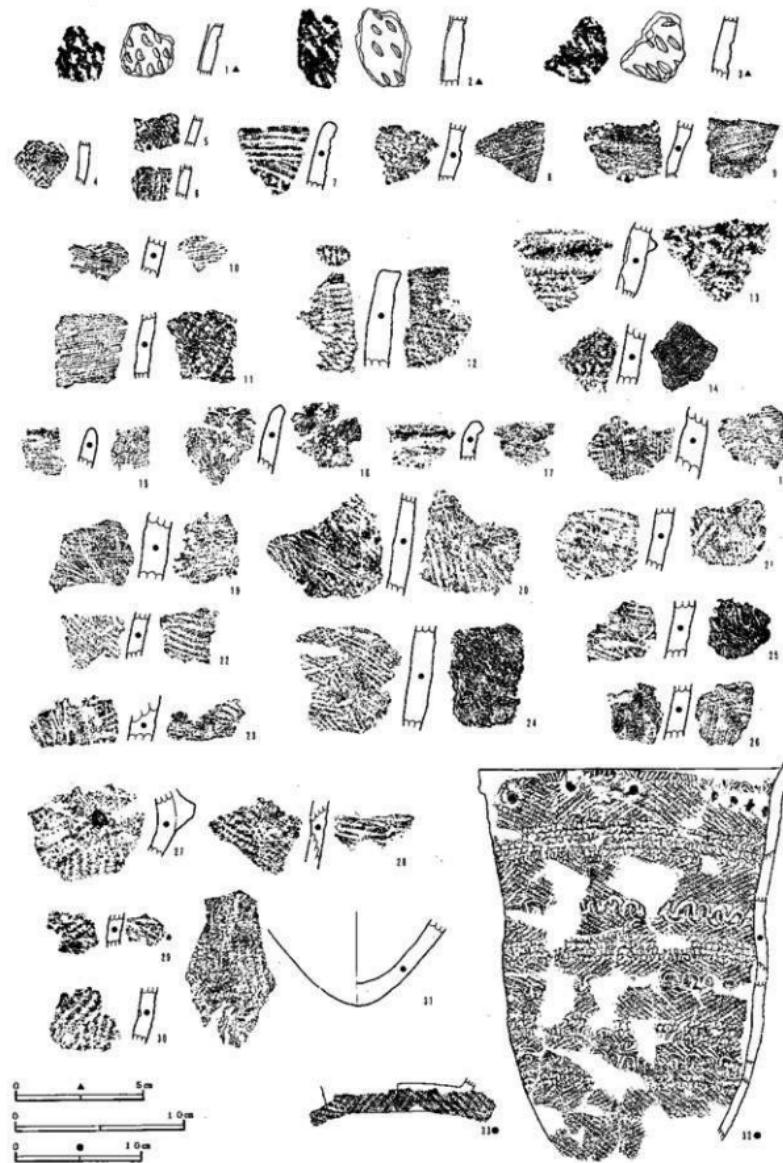
遺構番号	図版番号	写真図版	位 置	平 面 形	長軸×短軸×深さ(cm)	備 考
31	45図	—	29-30	不整円形	133×108×32	縄文土器片(中期)2点出土。
32	45図	—	29-30	楕 円 形	146×119×46	
33	23図	—	27~28 28	鰐丸台形	174×163×51	
34	欠	番				
35	欠	番				
36	24図	PL-8	24-32	不 整 形	249×221×45	
37	24図	PL-8	25-29	楕 円 形	119×(100)×31	
38	44図	PL-11	25-26-29	楕 円 形	94×78×66	
39	45図	—	28-28	不 明	141×—×27	
40	45図	PL-11	25-30	楕 円 形	105×92×47	
41	45図	—	24~25-30	楕 円 形	174×130×43	
42	24図	—	27-28	鰐丸長方形	196×130×82	
43	45図	—	24-29~30	楕 円 形	158×(120)×73	
44	24図	—	24-28	円 形	57×52×58	
45	24図	—	24-27~28	円 形	62×57×35	
46	45図	—	27-28	円 形	70×65×29	
47	45図	—	29~30-35	楕 円 形	200×161×49	
48	45図	—	26-27	鰐丸長方形	113×91×57	
49	24図	—	29-34	楕 円 形	92×80×60	
50	25図	PL-8	29~30-30	楕 円 形	283×99×155	陥し穴。底面は分銅形を呈する。
51	欠	番				
52	25図	—	27~28-31	円 形	104×102×—	
53	41図	PL-11	不 明	不 明	—×—×—	地下式土坑。
54	欠	番				
55	25図	PL-8	不 明	不整円形	120×113×69	断面形は袋状を呈する。
56	26図	PL-8	29-36	楕 円 形	220×118×111	陥し穴。
57	欠	番				
58	45図	—	28~29-36	鰐丸方 形	102×100×33	縄文土器片(前期)2点出土。
59	45図	—	29-35	円 形	37×35×14	
60	26図	—	29-36	円 形	129×119×27	
61	46図	—	29-37	円 形	70×65×21	
62	46図	—	29-37	円 形	46×42×30	
63	46図	—	29-37	楕 円 形	230×164×22	倒木痕。
64	46図	—	29-37	楕 円 形	40×30×52	
65	26図	—	29-37	鰐丸長方形	192×80×110	陥し穴。
66	26図	PL-8	29-37~38	楕 円 形	193×107×97	陥し穴。底面は分銅形を呈する。
67	46図	—	29-37	円 形	28×27×19	
68	46図	PL-11	30-37	円 形	90×86×42	
69	46図	—	30-37	円 形	48×47×30	
70	26図	—	30-37	円 形	38×34×54	
71	欠	番				
72	欠	番				
73	欠	番				
74	46図	PL-12	30-37	楕 円 形	133×109×46	
75	46図	PL-12	30~31-38	不 整 形	153×110×44	
76	26図	—	30~31~38	不整椭円形	133×102×22	
77	46図	—	31-37	楕 円 形	35×28×29	
78	46図	—	31-37	円 形	50×48×89	
79	46図	—	31-37	円 形	35×31×67	
80	46図	—	30-37	楕 円 形	38×34×70	
81	46図	—	30-37	円 形	30×29×45	
82	46図	—	31-37	楕 円 形	30×26×47	
83	46図	—	31-37	不整円形	29×28×56	
84	欠	番				
85	46図	—	30-35	円 形	62×59×34	
86	46図	—	31-34	楕 円 形	96×83×80	断面形は袋状を呈する。
87	27図	—	31-34	円 形	105×105×44	
88	欠	番				
89	欠	番				
90	欠	番				

第8表 土坑一覧表(3)

遺構番号	図版番号	写真図版	位 置	平 面 形	長軸×短軸×深さ(cm)	備 考
91	46図	—	28-34	椭円形	92×72×35	
92	欠番					
93	欠番					
94	46図	—	30-36	円形	43×42×24	
95	41図	—	31-36	扁丸方形	330×206×153	入口部は不整円形を呈する。
96	47図	—	30-35	扁丸方形	50×47×32	
97	47図	—	31-36	椭円形	35×28×70	
98	27図	—	28-34	不整円形	91×83×23	
99	47図	—	28-34	不整形	110×80×32	土坑2基の重複か。
100	47図	—	29-34	扁丸長方形	73×58×35	
101	47図	—	29-34	円形	55×48×28	
102	27図	PL-9	29-34	円形	61×59×31	
103	47図	—	28~29-34	椭円形	90×68×32	
104	47図	—	29-34	円形	81×76×26	
105	47図	—	29-34	椭円形	109×94×23	
106	47図	—	29-34	扁丸長方形	73×54×28	
107	27図	PL-9	28-34	円形	86×74×57	断面形は袋状を呈する。
108	48図	—	28-33	円形	117×104×25	
109	48図	PL-12	30-33	椭円形	243×196×200	底面は扁丸長方形を呈する。
110	27図	—	不明	円形	143×137×42	
111	41図	PL-11	30-36	椭円形	34×28×—	
112	48図	—	31-36	円形	36×33×56	
113	48図	—	31-37	椭円形	58×38×70	
114	48図	—	30-37	円形	23×22×28	
115	48図	—	31-37	椭円形	37×27×32	
116	48図	—	30-37	椭円形	58×30×60	
117	48図	—	30-37	椭円形	34×26×78	
118	48図	—	29-37	円形	28×27×33	
119	48図	—	29-37	円形	23×22×26	
120	48図	—	29-37	椭円形	30×26×30	
121	48図	—	31-36	椭円形	28×27×42	
122	48図	—	29-36	椭円形	49×44×68	
123	48図	—	29-36	椭円形	33×24×59	
124	41図	—	31-37	円形	50×45×48	
125	48図	—	31-38	円形	36×36×56	
126	48図	—	30~31-37	円形	69×68×31	
127	48図	—	29~30-37	円形	43×37×64	
128	48図	—	29-37	椭円形	36×29×33	
129	48図	—	29-37	円形	25×21×15	
130	48図	PL-12	30-33~34	椭円形	114×101×48	断面形は袋状。織文土器片3点出土。
131	48図	—	19-20	円形	78×78×41	
132	49図	—	19-20	円形	129×113×56	
133	49図	—	18~19-20	椭円形	101×89×69	
134	49図	—	18~19-20	円形	80×70×39	
135	49図	—	18-20	円形	129×126×72	
136	49図	—	18-20	円形	84×82×65	
137	49図	—	18-20	椭円形	27×22×17	
138	49図	—	18-20	椭円形	17×14×26	
139	49図	—	18-20	円形	29×29×27	
140	49図	—	18-20	円形	26×25×23	
141	49図	—	18-20	不整椭円形	43×36×24	
142	49図	—	18-20	円形	30×27×26	
143	49図	—	18-20	円形	24×23×30	断面形は袋状を呈する。
144	49図	—	18-20	不整椭円形	27×22×16	
145	49図	—	17-20	不整椭円形	99×89×32	
146	49図	—	17-20	椭円形	65×54×56	
147	49図	—	17-20	円形	67×60×24	
148	49図	—	17-20	円形	27×24×19	
149	49図	—	17-20	円形	30×28×14	
150	49図	—	17-20	椭円形	39×31×55	

第9表 土坑一覧表(4)

遺構番号	図版番号	写真図版	位 置	平 面 形	長軸×短軸×深さ(cm)	備 考
151	49図	—	17-20	楕 円 形	46×30×103	
152	欠	番				
153	49図	—	18-21	円 形	45×44×21	
154	49図	—	18-21	楕 円 形	64×50×26	
155	28図	PL-9	23-20	分 銅 楕	240×81×111	陥し穴。
156	28図	PL-9	24-20	楕 円 形	217×86×86	陥し穴。底面は扁丸長方形を示す。
157	49図	—	24-21	楕 円 形	84×75×61	
158	49図	—	24-20	円 形 ?	77×—×40	
159	欠	番				
160	28図	—	23-20~21	不 整 形	237×187×—	倒木痕。
161	28図	PL-9	24-21	不整楕円形	313×162×98	倒木痕。
162	欠	番				
163	欠	番				
164	欠	番				
165	欠	番				
166	欠	番				
167	欠	番				
168	欠	番				
169	欠	番				
170	欠	番				
171	欠	番				
172	29図	PL-9	22-18	円 形	86×75×41	
173	49図	PL-12	22-17~18	円 形	102×93×65	
174	29図	PL-9	21-17	楕 円 形	195×113×122	陥し穴。
175	欠	番				
176	49図	—	22~23-18	不 整 円 形	171×141×49	
177	欠	番				
178	29図	—	20-21	楕 円 形	204×111×89	陥し穴。底面及び西壁に地割れ痕。
179	欠	番				
180	29図	PL-10	20-19	円 形	202×186×176	
181	29図	PL-10	21-19	円 形	111×108×76	
182	欠	番				
183	欠	番				
184	欠	番				
185	38図	PL-10	不 明	円 形	118×114×101	貯藏穴。炭化穀物出土。



第51図 道路外出土遺物①

第3節 遺構外出土遺物

本節では、遺構に伴わずに出土した縄文時代以降の遺物を取り上げる。遺物量としては縄文時代の遺物が最も多く、中でも中期後半の遺物が多量に出土している。次いで縄文時代前期の遺物や中世～近世の遺物が多く出土している。また遺構としては検出されなかった時期の遺物も出土している。以下時期を追って報告を行いたい(第51～56図)。

1～112は縄文時代の土器で、断続的ながら草創期～後期初頭の土器が出土している。

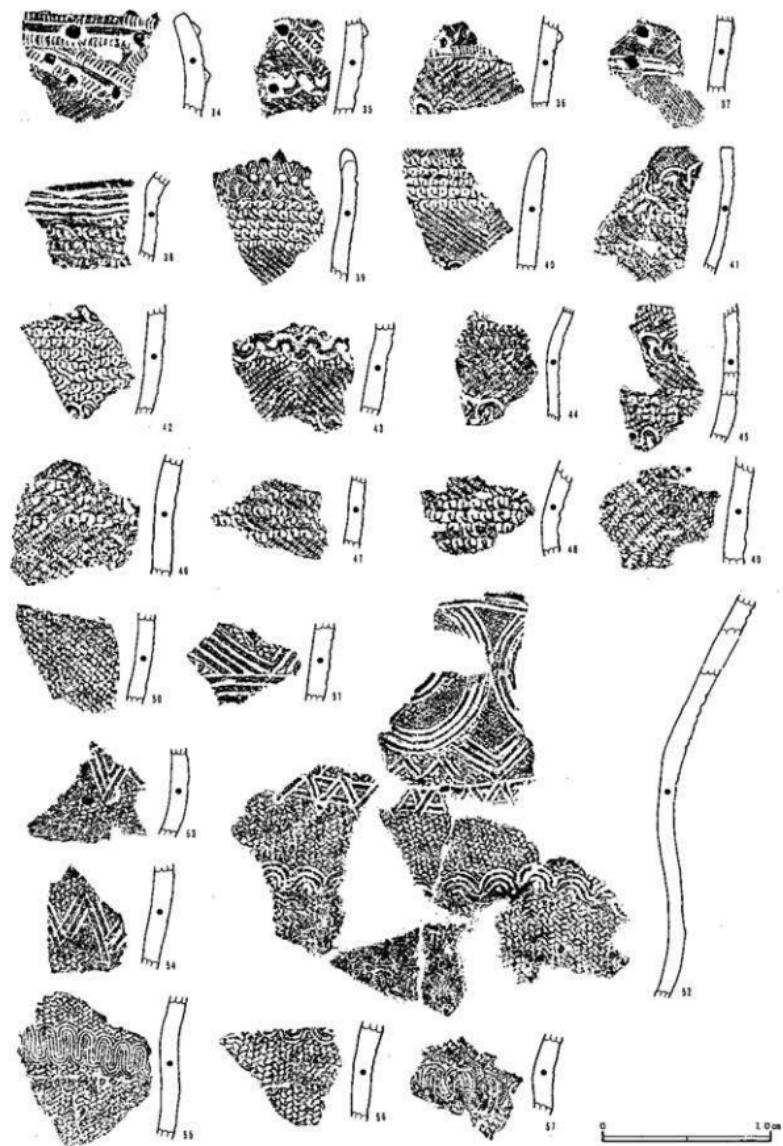
1～3は草創期の土器で、いずれも口唇部である。斜位の爪形文を横位多段に施す。内面には剥落がみられる。

4～6は早期押型文土器の脇部片で、器壁は薄い。4は横位、5・6は縦位の山形文を施す。7は早期中葉の沈線文土器の口縁部片で、平縁で、口唇部は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する。口縁部直下に4条ほどの沈線を横位に巡らせ、以下は斜位の沈線を施す。斜位沈線間に部分的に円形刺突を充填する。

8～26は早期後葉の条痕文土器で、内面や外面に条痕ないし擦痕による器面調整を施すものが多い。いずれも胎土には纖維を含む。8・9は角頭状の工具により刺突を施すもので、いずれも脇部片である。8は3条1対の連続刺突を斜位に施す。9は上位に斜位の、下位に横位の連続刺突文をそれぞれ施す。10・11は貝殻腹縁文ないし貝殻腹縁に類する工具により斜位の刺突を施した脇部片で、10は外面に、11は内面に施す。12～14は絶条体圧痕文を施すものである。12は口縁部片で、内外面に条痕を施し、口唇部及び外面に太めの絶条体圧痕文を施す。13は断面カマボコ形の隆帯を横位に巡らせた脇部片で、隆帯上には斜位の、隆帯の下位には横位の絶条体圧痕文を施す。内面は剥落して不明だが、外面には条痕を施す。12・13は胎土に片岩を含む。14は縦位に施した絶条体圧痕文を横位多段に施すほか、絶条体圧痕文を横位に施す。他の条痕文土器と異なり、内面には丁寧なナデ調整を施しており、他時期の所産の可能性がある。15～26は条痕ないし擦痕のみを施すもので、15～17は口縁部片、18～26は脇部片である。15～17は平縁で、口唇部は丸頭状を呈する。また17は口縁部直下で外反する。いずれも内外面に条痕を施す。18～26は器形上の屈曲はみられない。18～23は内外面に、24・25は外面のみに、26は内面のみに条痕を施す。20は胎土に片岩を含む。また24・25は同一個体である。

27～31は早期終末～前期初頭の土器で、27は口縁部片、28～30は脇部片、31は底部片である。27は波状縁で、口唇部は丸頭状を呈する。波頂部直下には円形の突起を付す。地文にはRL単節斜縄文(0段多条)を施し、施文は突起上にも及ぶ。28・29は同一個体で、外面に単節斜縄文を、内面に条痕を施すものである。30はRL単節斜縄文(0段多条)を縦位・斜位の施文することにより羽状構成をとる。31は丸底に近い尖底で、羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文(0段多条)を施す。

32～60は前期の土器で、前期前半～中葉が主体となり、前期後半の資料も僅かに出土しているもの図示し得なかった。いずれも胎土には纖維を含む。32～36・38～49は単節斜縄文を地文とする。原体はいずれも0段多条である。32は口縁部～脇部下半の復元個体である。緩やかに外反して立ち上がり、脇部中位に膨らみを持ち、脇部上半で括れて、緩やかに外反して開く器形を呈する。平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈し、集合角状突起を付す。口縁部直下には8本ほどを1単位とした鋸歯状文の刻み列を施し、その直下には円形貼付文を付す。地文には羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文や多段のループ文を施し、脇部上半・中位・下半には半截竹管によるコンパス文を施す。33は底部片で、上げ底状の底部から直線的に立ち上がる器形を呈する。外面には羽状構成をとるLR・RL単節斜縄文を施す。34～37は有刻の平行沈線により文様を施すもので、いずれも口縁部ないしその付近の破片と見られる。34は内削ぎ状の口唇部を有し、集合角状突起を付す。有刻及び無刻の平行沈線により口縁部文様帶の上端を区画し、文様帶内には同様の沈線を斜位に施し、円形貼付文を付す。以下はLR単節斜縄文を施す。35は口縁部文様帶の下端を横位1条のコンパス文で区画しているとみられ、文様帶内には有刻の沈線による鋸歯状文やコンパス文・円形貼付文を施す。以下はRL単節斜縄文を施す。36は1条の有刻の平行沈線を横位に巡らせて口縁部文様帶を区画しているとみられ、口縁部文様帶内には半截竹管によるコンパス文や円形貼付文を施す。脇部には羽状構成をとる閉端環付のLR・RL単節斜縄文を施し、脇部にもコンパス文を施す。37は2条1対の無刻の平行沈線により口縁部文様帶を区画しているとみられ、文様帶内には斜位に施した有刻の平行沈線や鋸歯状工具による沈線、円形貼付文を施す。以下は櫛齒状工具による鋸歯状文を施しているとみられる。38は無刻の平行沈線を施した口縁部付近の破片で、数条1対の平行沈線を横位に巡らせ、以下は多段のループ文を施す。39は波状を呈する口縁部片で、口唇部は内削ぎ状を呈する。また波頂部には三角形の突起を付し、その両脇には有刻の臼齒状突起を付す。口縁部直下には3本ほどを1対とする鋸歯状の刻み列を施し、波頂下には円形刺突列を配す。



第52図 遺構外出土遺物②

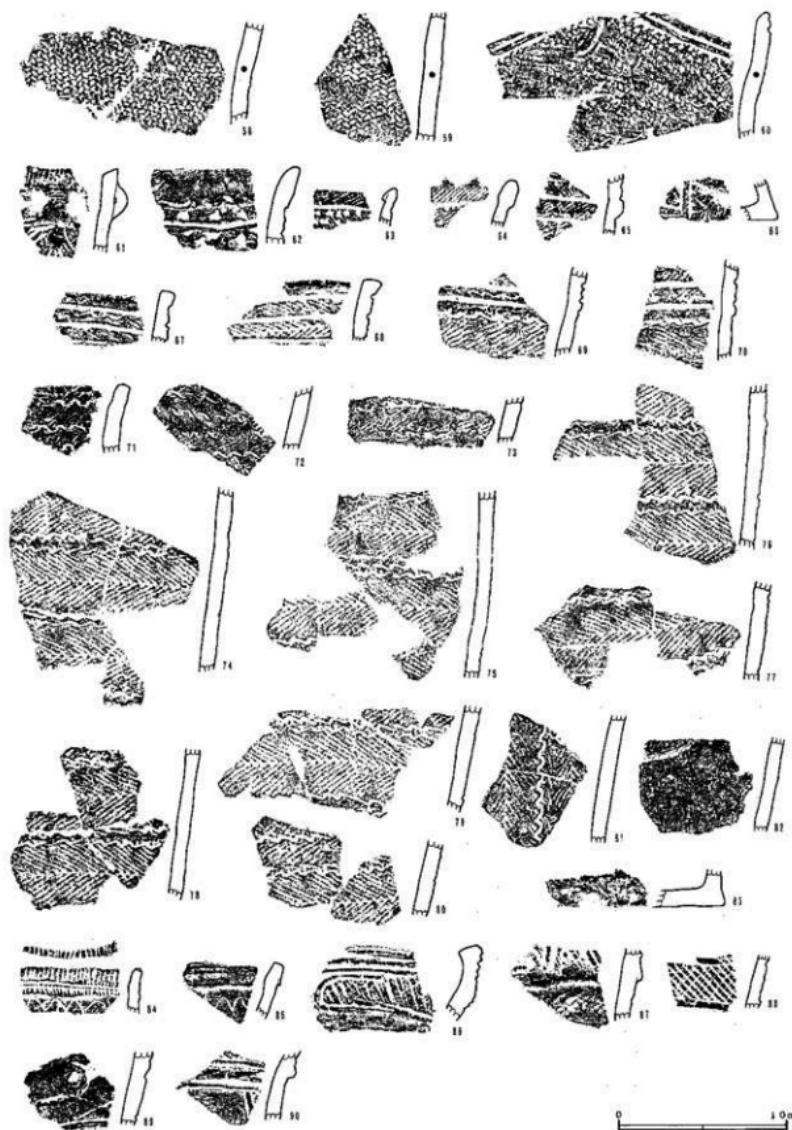
その直下には有刻のコンパス文を施す。以下は多段のループ文や閉端環付の RL 単節斜繩文を施す。40~45はコンパス文を施したもので、40・41は口縁部片、42~45は脣部片である。40は平縁で、口唇部は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する。地文には羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文や多段のループ文を施し、脣部にはコンパス文を施す。41は平縁とみられ、口唇部は角頭状を呈する。地文には羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文を施し、口縁部直下にはコンパス文を1条巡らせる。42~45は羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文や多段のループ文を地文とし、コンパス文を1条ないし数条巡らせる。46~49は羽状構成をとる閉端環付の LR・RL 単節斜繩文や多段のループ文を地文とする脣部片である。50は異節斜繩文（LとRをRに撲ったもの2本をしに撲るもの）を施した脣部片である。51~59は組紐文を地文とするもので、いずれも脣部片である。51は4条ほどを1対とする無刻の平行沈線を櫛齒状・横位に施したものである。52は脣部上半～下半の大型破片で、脣部下半が膨らみ、脣部中位で括れて、外反して開く器形を呈するとみられる。数条1対の無刻の平行沈線によって区画された文様帶内には、同様な沈線により円形文や鉢齒状文等を施し、その下位には櫛齒状工具によるコンパス文を施す。53・54は2条1対の無刻の平行沈線により櫛齒状文を施すものである。55~57は半截竹管や櫛齒状工具によりコンパス文を施すもので、施文は乱れる。58・59は地文のみを施したものである。60は波状を呈する口縁部片で、口唇部は丸頭状を呈する。口縁部直下には口縁部に沿って2条1対の半截竹管による平行沈線を巡らせ、直下には半截竹管による刺突列を沿わせる。地文には緩く撲った RL 単節斜繩文を施す。

61~83は前期末～中期初頭の土器で、61~64・67・68・71は口縁部片、65・69・70・72~82は脣部片、66・83は底部片である。61は平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈する。口縁部直下に小型の柄状把手を付し、把手上面やその周囲に縦位・斜位・横位の短沈線を施す。62・63は口縁部直下に縄文帶を有し、その下位に刺突列を施すもので、62は輪積痕により、63は沈線により縄文帶の下端を区画する。62は横位の沈線により刺突列を上下に区画している。いずれも平縁で、口唇部は丸みを帯びた内削ぎ状を呈する。64も平縁で、口唇部は肥厚して丸頭状を呈する。口唇部には三角形の小型の突起を付す。無節L繩文を地文とし、口縁部直下に三角刺突を伴う横位の沈線を1条施す。65は羽状構成をとるL・R無節斜繩文を地文とし、三角刺突を伴う横位の沈線や横位の隆帶を施す。66は底面直上で一旦括れて立ち上がる器形を呈するとみられる。単節斜繩文を地文とし、三角刺突を伴う沈線により「L」字状の文様を施す。67~70・74~80は同一個体で、直線的に立ち上がる器形を呈するとみられる。平縁で、口唇部は角頭状を呈する。結節を伴った、結束により横位の羽状構成をとるLR・RL 単節斜繩文を地文とし、口縁部直下には横位の沈線を数条巡らせる。71~73は結節を伴う単節斜繩文を横位に施すもので、71は平縁で、口唇部は丸頭状を呈する。81は結節を伴った、結束により羽状構成をとるLR・RL 単節斜繩文を縦位施すものである。82・83は無文である。

84~88は中期初頭の土器で、いずれも口縁部ないしその付近の破片である。84は平縁で、口唇部は丸頭状を呈し、上面には縦位の刻みを施す。口縁部直下には輪積痕によりその下端を区画した幅狭の文様帶を有し、文様帶内には横位の沈線を挟んで上下に縦位の短沈線を施す。その下位には波状の沈線を施す。85も平縁で、口唇部は角頭状を呈する。口縁部直下には輪積痕によって区画された幅狭の無文帶を有し、その下位には波状の沈線を施す。86~88は弧状等の区画文内に斜格子文を施すものである。86は平縁で、口唇部は内削ぎ状を呈する。また87は区画文の下位に LR 単節斜繩文を施す。

89・90は中期前半の土器で、いずれも脣部片である。89は三叉文や円形文・横位の沈線を施す。90は上下に沈線を沿わせた横位の隆帶や斜位の沈線を施す。

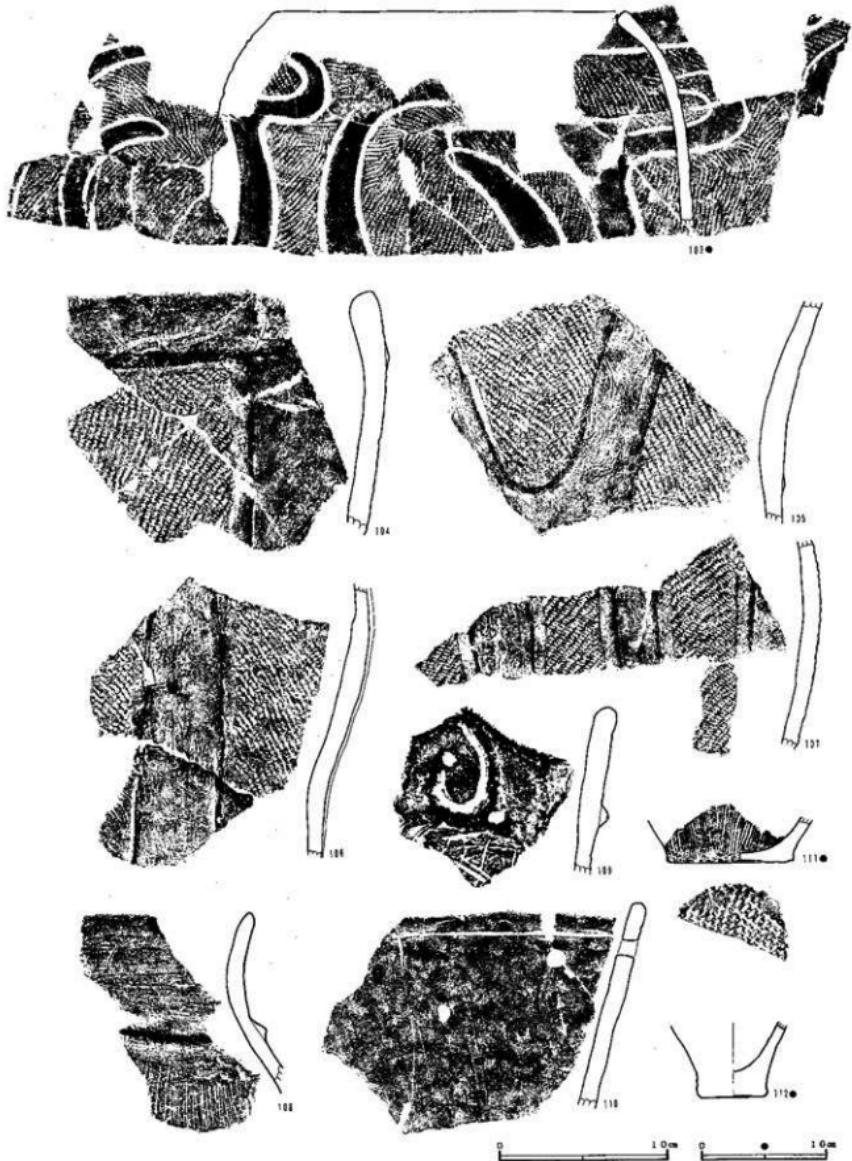
91~112は中期後半から後期初頭の土器である。91~94は沈線や隆帶により弧状の区画文を施す口縁部片で、いずれも波状縁である。区画内には RL 単節斜繩文を施すが、94は脣部に縦位の条線を施す。95~97は口縁部直下に沈線により区画された幅狭の無文帶を持ち、脣部に「匚」字状の区画文を施すもので、区画文内には LR ないし RL 単節斜繩文を充填する。97は波状縁で、波頂部は肥厚する。98も波状縁で、波頂部が肥厚する。口縁部直下には沈線により区画された幅狭の文様帶を有し、2段の円形刺突列を施す。脣部には沈線による幾何学文を施し、単節斜繩文を充填する。99も波状縁で、波頂部には柾状の突起を付す。口縁部直下には沈線により区画された幅狭の無文帶を持つ。脣部は RL 単節斜繩文を地文とし、沈線により弧状等の文様を施す。100は盃型土器の脣部片とみられ、口縁部直下には幅広の無文帶を持つとみられる。脣部には柄状把手や隆線による弧状の文様を施し、RL 単節斜繩文を充填する。101・102は沈線を垂下させて縦位区画した脣部片で、RL 単節斜繩文を施した縄文帶と無文帶を交互に持つ。103は口縁部～脣部上半の復元個体で、キャリバー形の器形を呈し、平縁とみられる。口縁部直下には沈線により区画された幅狭の無文帶を有し、脣部には沈線による幾何学文を施し、RL 単節斜繩文を充填



第53図 遺構外出土遺物③



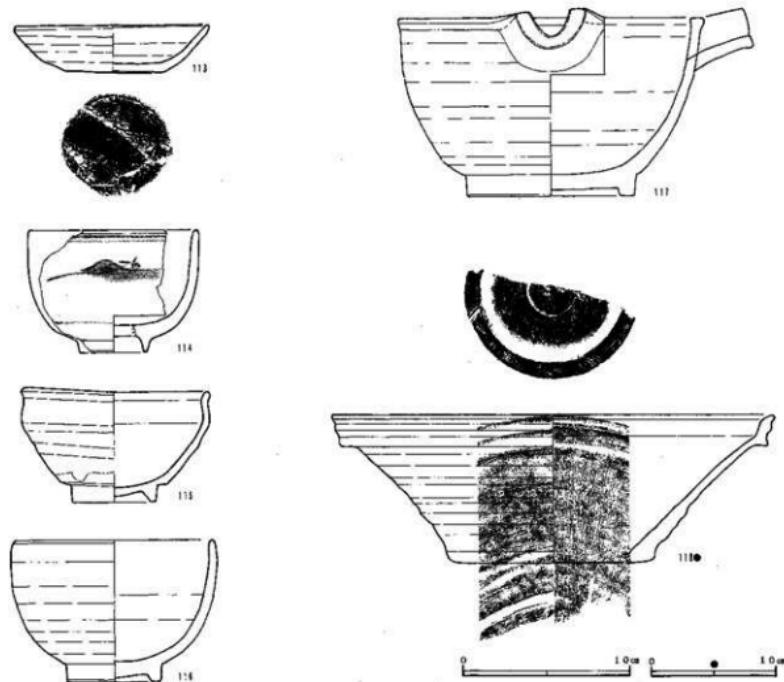
第54図 造構外出土遺物④



第55圖 遺構外出土遺物⑤

する。104は平縁で、口縁部直下には隆線により区画された無文帯を有する。胴部には隆線を垂下させて縦位区画し、RL 単節斜繩文を充填した繩文帯と無文帯を交互に持つ。105～107は隆線により「U」・「H」等の文様を施した胴部片で、いずれも RL 単節斜繩文を充填する。108は壺型土器の口縁部片で、口縁部直下には隆帶により区画された幅広の無文帯を持つ。以下は縦位の条線を施す。109は波状縁で、波頂部が肥厚する。口縁部直下には隆帶によって区画された文様帯を有し、波頂部には沈線による「J」字状の文様を施す。胴部には沈線による斜格子文を施す。110は無文の口縁部片で、口縁部直下に1条の沈線を巡らせる。また焼成後の穿孔を持つ。111・112は底部片で、111は胴部に縦位の条線を施し、底部に網代痕を持つ。112は無文である。

113～118は中世～近世の土器・陶磁器類で、113はカワラケ、114は陶胎染付の碗、115は天目碗、116は尾呂碗、117は片口鉢、118は擂鉢である。



第56図 遺構外出土遺物⑥

第10表 遺構外出土遺物観察表

遺物番号	種類 器 皿	残存状態	法量 (cm)	釉薬または①胎土②焼成③色調	整・成形技法の特徴
113	土師質土器 皿	口縁部～底部 90%残存。	口 11.4 底 5.7 高 2.8	①黒色粒・白色粒・砂粒②酸化 焰③にぶい赤褐色	ロクロ成形。底部糸切り無調整。 底面に粉粙痕。
114	陶器 碗	口縁部～底部 30%残存。	口 10.0 底 6.0 高 7.3	陶胎染付。	肥前系。山水絵。
115	陶器 天目碗	口縁部～底部 70%残存。	口 11.2 底 5.0 高 6.9	鉄釉。	瀬戸美濃系。
116	陶器 尾呂碗	口縁部～底部 70%残存。	口 11.8 底 5.6 高 8.4	うのふ釉。	瀬戸美濃系。
117	陶器 片口鉢	口縁部～底部 60%残存。	口 18.3 底 10.0 高 11.2	灰釉？	瀬戸美濃系。
118	陶器 擂鉢	口縁部～底部 30%残存。	口 7.6 底 5.1 高 2.1	鉄釉。	備前系か。

第2章 付 編

前報告(「市之関前田遺跡III」)では、縄文時代中期後半の住居址・配石遺構より出土した石器・石製品について、整理作業の都合上、一部の石製品しか掲載することが出来なかった。本報告においても石器の実測図の掲載はかなわなかったが、その観察表と写真を掲載して概略のみを報告したい。

第11表 縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器等観察表

遺物番号	写真図版	種類	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
1住	1 PL-30	石 鋸	黒色頁岩	4.3	3.0	1.0	11.8	未製品。
	2 PL-30	打製石斧	ディサイト	13.3	4.6	1.7	139	短冊形。完形。
	3 PL-30	打製石斧	ディサイト	(7.3)	4.4	1.5	53.0	短冊形。基部欠損。
	4 PL-30	磨 石	粗粒安山岩	7.5	5.6	4.3	212	完形。
	5 PL-30	磨 石	粗粒安山岩	(10.5)	(8.3)	5.6	489	端部欠損。
2住	1 PL-30	磨 石	粗粒安山岩	11.0	8.7	3.0	520	完形。
	2 PL-30	磨 石	粗粒安山岩	6.3	5.3	5.3	169	完形。
	3 PL-30	石 盤	粗粒安山岩	(25.7)	21.1	5.8	4,435	両端部欠損。
3住	1 PL-31	打製石斧	黒色頁岩	(5.4)	3.5	1.4	29.8	短冊形。刃部欠損。
	2 PL-31	磨 石	不明	7.5	6.5	2.3	183	完形。
	3 PL-31	磨 石	ひん岩	10.8	(3.5)	3.6	20.3	左半部欠損。
	4 PL-31	凹 石	粗粒安山岩	10.3	7.5	4.9	511	両面に凹部あり。完形。
9住	1 PL-31	打製石斧	ディサイト	(9.9)	5.1	1.7	125	基部・刃部欠損。
	2 PL-31	打製石斧	ホルンフェルス	11.3	4.4	1.5	106	短冊形。完形。
	3 PL-31	スクレイパー	黒曜石	3.4	1.8	0.8	4.0	
10住	1 PL-31	石 盤	粗粒安山岩	(10.8)	(9.6)	7.0	624	裏面は多孔石として使用。
11住	1 PL-31	打製石斧	ディサイト	16.6	5.8	3.5	410	短冊形。完形。
	2 PL-31	打製石斧	黒色頁岩	9.3	4.0	1.1	56.2	短冊形。完形。
	3 PL-31	打製石斧	ディサイト	9.8	3.6	1.2	67	短冊形。完形。
	4 PL-31	打製石斧	ディサイト	10.3	4.4	2.2	119	短冊形。完形。
	5 PL-31	打製石斧	ディサイト	12.1	6.2	2.3	171	短冊形。基部欠損。
	6 PL-31	磨 石	粗粒安山岩	9.7	8.4	3.7	439	完形。
13住	1 PL-31	磨 石	粗粒安山岩	12.0	7.9	5.1	746	裏面に剝落あり。
	2 PL-31	凹 石	粗粒安山岩	18.5	12.1	6.8	1,703	片面に凹部あり。
17住	1 PL-31	磨 石	粗粒安山岩	8.5	(5.8)	5.5	319	
	2 PL-31	磨 石	ひん岩	(10.8)	(8.0)	3.4	325	
	3 PL-31	石 盤	粗粒安山岩	(8.5)	(6.0)	2.8	222	破片資料。
21住	1 PL-31	石 鋸	黒色安山岩	2.4	2.2	0.2	1.3	先端部欠損。
	2 PL-31	石 盤	粗粒安山岩	(20.2)	(15.1)	4.4	2,080	破片資料。
22住	1 PL-31	石 鋸	黒色安山岩	3.3	(1.8)	0.4	1.9	脚部欠損。
33住	1 PL-31	凹 石	粗粒安山岩	10.1	7.3	4.7	509	両面及び側面に凹部あり。
	2 PL-31	凹 石	粗粒安山岩	13.8	8.5	4.8	709	両面に凹部あり。
	3 PL-31	石 盤	緑泥片岩	(12.6)	(11.3)	3.2	792	破片資料。
35住	1 PL-32	凹 石	粗粒安山岩	16.6	6.5	4.3	631	両面に凹部あり。
	2 PL-32	石 棒	緑泥片岩	11.5	5.2	(2.8)	143	破片資料。
	3 PL-32	石 製 品	軽石	7.3	5.1	1.9	31.3	完形。
38住	1 PL-32	ヘラ型石器	黒色頁岩	6.7	4.3	1.1	48.5	完形。
	2 PL-32	石 棒	石英斑岩	(9.4)	11.3	11.3	1,165	尾部のみ残存。
39住	1 PL-32	石 鋸	黒色頁岩	(3.1)	2.4	0.4	2.5	先端部欠損。
	2 PL-32	垂 銛	不明	4.1	2.6	2.3	29.7	完形。
	3 PL-32	石 製 品	軽石	5.7	4.7	1.3	20.5	端部欠損。
41住	1 PL-32	ヘラ型石器	黒色頁岩	6.6	4.1	0.8	26.7	完形。
2配	2 PL-32	打製石斧	黒色頁岩	10.0	4.4	1.5	51.0	刃部欠損。

第3章 自然科学分析

市之関前田遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

赤城火山南麓の比較的平坦な場所には、火山灰土（火山噴出物を母材とする土壤）が認められる。火山灰土は、下位の旧石器時代に形成された厚いローム層と、上位の黒ボク土に区分することができる。宮城村市之関前田遺跡の発掘調査では、これらの火山灰土の中から、旧石器時代から中世にいたるまでの多くの時代にわたる遺構や遺物が検出された。ここでは、旧石器時代と縄文時代の環境をさぐる目的で、市之関前田遺跡で認められる土壤試料の分析を行う。分析に先だって野外調査を実施した。分析対象とした土壤断面は、29-36グリッド内の旧石器時代テストピット（以下第1地点とする：図1）および9~11-14~17グリッド内の調査区西壁（以下第2地点とする：図2）の2ヶ所である。前者では旧石器時代の土壤、すなわちローム層を、後者では縄文時代以降の土壤、すなわち黒ボク土層をそれぞれ分析の対象とした。

野外調査では、まず断面の土壤学的な記載を行った。次に土壤断面中に時間軸を設定する目的で、土壤断面の観察を行った。一方、室内での各種の分析を行うための試料の採取を行った。試料は、厚さ5cmで連続に採取した。なお採取された試料については、分析の際に適宜選択した。

室内分析では以下の分析を行った。最初に各土層の「粒径組成」（7点）を明らかにした。次に1/4-1/8mmの粒子について「鉱物分析」（18点）を行い、重鉱物組成および軽鉱物組成を求めた。さらに各土層について火山灰土であることの目安となる「リン酸吸収係数」の測定を行った。併せて、「腐植含量」（7点）も求めた。また土壤形成当時の植生を知るために、「花粉分析」（11点）を行った。なお、年代資料を得るために、ローム層に含まれる炭化物1点について放射性炭素年代測定により年代を求めた。

I. 層序

1. ローム層

旧石器時代の文化層が検出された調査区南部の土壤は、上位より第I～第X層までの13層の土層に区分される。このうち、第II層以下のローム層で旧石器時代とされる石器が出土地（図1）。ローム層のうち、第IX層は色調の暗い暗色帶である。またこの断面では、合計7枚の指標テフラ層が確認された。肉眼で確認された指標テフラの多くは、軽石に富む下部テフラ層である。ここでは、下位より順に前田第1～7テフラ（ME-1～ME-7）と呼ぶことにする。以下、下位より順に記載を行う。

(1) 前田第1テフラ (ME-1)

黄色の降下軽石層（第IV層）である。層厚は5cm以上、含まれる軽石の最大径は19mmである。軽石の発泡は比較的よい。軽石には班晶として角閃石や斜方輝石が含まれる。本テフラは層相などから、約5万年前に榛名火山から噴出した榛名一八崎軽石層（Hr-HP：新井，1962；町田・新井，2003）に対比される。

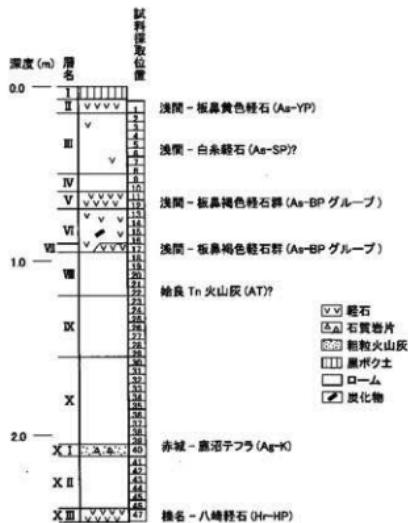


図1 第1地点の層序と分析試料の層位

(2) 前田第2テフラ (ME-2)

灰色がかった紫色の降下火山灰層（第Ⅺ層）である。灰色の石質岩片が多く含まれている。層厚は7cm、含まれる石質岩片の最大径は3mmである。本テフラは層相から、約4.5万年前以前に赤城火山から噴出した赤城一鹿沼テフラ層（Ag-K：新井，1962；町田・新井，2003）のうちの上部を占める水沼降下火碎岩層（水沼ラビリ：守屋，1968）に対比される。なお鹿沼土として有名な鹿沼軽石（Ag-KP）は、鹿沼テフラ層の下部に堆積する。

(3) 前田第3テフラ (ME-3)

色調の暗い、いわゆる暗色帶（第Ⅻ層）の上位（第Ⅹ層）に堆積するガラス質の細粒火山灰層である。市之間前田遺跡においては、野外で肉眼により確認することはできない。洗い出しによってその火山ガラスを検出することができる。火山ガラスは平板状のいわゆるバブル型で、無色透明である。このテフラは火山ガラスの形態的な特徴や層位から、約2.6-2.9万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976；町田・新井，2003）に対比される。

(4) 前田第4テフラ (ME-4)

橙色の降下軽石層（第Ⅶ層）である。層厚は6cm、含まれる軽石の最大径は4mmである。本テフラは層相から、約2.0-2.5万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻褐色軽石群（As-BPグループ：新井，1962；町田ほか，1984；早田，1990；町田・新井，2003）の一つに対比される。

(5) 前田第5テフラ (ME-5)

橙色の降下軽石層（第Ⅴ層）である。層厚は11cm、含まれる軽石の最大径は7mmである。本テフラは層相から、上述のAs-BPグループの一つに対比される。

(6) 前田第6テフラ (ME-6)

白色の軽石粒である。ローム層（第Ⅲ層）中に散在しており、層は成していない。従って正確な降灰層準を設定することは難しい。軽石の最大径は、2mmである。軽石はよく発泡している。軽石の岩相や層位から、本軽石は1.5-2.0万年前に浅間火山から噴出した浅間一白糸軽石（As-SP：町田ほか，1984；町田・新井，2003）に由来すると考えられる。なお石器は、第Ⅲ層中から検出されている。

(7) 前田第7テフラ (ME-7)

ローム層最上部に濃集する黄色軽石粒である。軽石の最大径は6mmで、よく発泡している。本軽石は、層位や岩相から約1.5-1.65万年前に浅間火山から噴出した浅間一板鼻黄色軽石（As-YP：新井，1962；町田ほか，1984；町田・新井，2003）に対比される。

2. 黒ボク土

第1地点において第I層とされた黒ボク土からは、縄文時代以降の遺物や遺構が検出された。第2地点の土層断面では、黒ボク土は合計12の土層に区分された。黒ボク土の色調は土層によって異なるが、全体としては暗色を呈する。しかし、このうち第8層は明るい色調を呈し、いわゆる淡色黒ボク土とよばれる土層に相当する。今回の調査で合計3枚の指標テフラが確認された（図2）。ここでは下位より順に、前田第8～10テフラ層（ME-8～10）と呼ぶことにする。以下、順に記載する。

(1) 前田第8テフラ層 (ME-8)

黒ボク土（第6層）中に濃集した黄褐色の軽石粒である。軽石の最大径は3mmである。軽石には斜方輝石や不透明鉱物（おもに磁鐵鉱）などが斑晶として含まれる。軽石は比較的よく発泡している。本軽石は、4世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間C軽石（As-C、新井，1979）に由来すると考えられる。

(2) 前田第9テフラ層 (ME-9)

ME-5の上位の黒ボク土（第5層）中に散在する、比較的粗粒の灰色または白色の軽石粒である。軽石の最大

径は18mmで、あまりよく発泡していない。斑晶として角閃石や斜方輝石が認められる。本テフラは、軽石の岩相から6世紀中葉に株名火山二ツ岳火口から噴出した株名ニツ岳伊香保テフラ(Hr-FP: 新井, 1962; 早田, 1989) に由来すると考えられる。

(3) 前田第10テフラ層 (ME-10)

第4層中に多く含まれる砂状の粗粒火山灰である。火山灰の多くは淡褐色の軽石粒とガラス質石質岩片である。軽石の最大径は、2mmである。軽石の岩相から、天仁元年(1108年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ層(As-B: 新井, 1979)に対比される。

II. 土壌の性質

1. 土壌の色調

(1) 分析方法

現地において、各土層毎に現地土壤をマンセル土色粘により判別した。

(2) 結果

7層~12層の土壌では、7層で著しい黒色を呈し、8層で黒色が淡くなり、9~10~12層で再び黒色が濃くなる。また、浅間一板鼻黄色軽石が含まれる13層及び下位の14層については、その黒色がさらに淡くなっている(表1)。

2. 土壌硬度

(1) 分析方法

各層毎に山中式硬度計を突き刺し、その硬さを測定した。

表1. 第2地点(黒ボク土)各土層の土壤理化分析結果

層位	土 色	土壤硬度 (mm)	番号	粒径組成(%)				土性	腐植 (%)	リン 酸 吸収係数
				粗砂	細砂	シルト	粘土			
7	10YR2/1	燃	16-2	17.5	31.1	25.9	25.5	LiC	7.54	2,030
8	10YR3/3.5	暗褐	18	13.4	32.6	33	21.1	CL	4.83	1,990
9	10YR3/3.5	暗褐	19-2	14	33.8	30.8	21.4	CL	4.65	2,030
10	10YR2/2	黑褐	21	14.5	31.7	29.1	24.7	LiC	6.43	2,020
12	10YR2/2	黑褐	26	11.8	35.8	29.4	22.9	CL	4.96	2,040
13	10YR3/4	暗褐	28	17.6	30.5	23.4	28.5	LiC	2.28	1,500
14	10YR5/6	黄褐	32	15.7	25.2	24.4	34.7	LiC	1.25	1,460

1) 粒径組成……粒径区分は、国際土壤学会法による。数値は、粗砂、細砂、シルト、粘土の4成分の合計を100とした重量%で表示

2) 土性……国際土壤学会区分による土壤三角図より求めた(CL: 植原土, LiC: 軽塩土)

3) 腐植……全炭素×1.724



図2 第2地点の層序と分析試料の層位

(2) 結果

7層で20mmの値を示し、土色の淡くなる8層では18mmとやや軟らかくなる。また、9・10層では7層と同じ硬度を示すが、12・13・14層では徐々に硬くなる傾向にある(表1)。

3. 粒径組成

(1) 分析方法

採取した土壤を風乾後、土塊などを軽く粉碎し、2mmの篩を通過させ、分析試料とした。以下に示すリン酸吸収係数でもこの試料を使用し、腐植についてはこの試料の一部を乳鉢で微粉碎し、0.5mmの篩を全通したもの供試した。

分析試料10.0gに蒸留水と30%過酸化水素水を加えて、沸騰した湯煎上で4~5時間有機物分解を行った。分離終了後、水を約500ml加えて、攪拌しながら30分間音波処理を行い、1ℓ沈底瓶に試料をすべて移した。分散剤に1N HClを加えて、往復振とう機で1時間した後、水で1ℓに定容した。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから10mlのホールビペットで懸濁液を採取した。これを、湯煎上で蒸発乾固し、乾燥、秤量してシルト・粘土の含量を求めた。再び1ℓの沈底瓶を1分間振り、前と同様な操作で粘土含量を求めた。求められた粘土含量をシルト・粘土の含量から差引きシルト含量を求めた。沈底瓶に残ったシルトと粘土をサイフォンですべて洗いだし、残査を乾燥、秤量して粗砂・細砂の含量を求めた。これを0.2mmの篩でふるい分け、篩上を秤量して粗砂含量を求め、粗砂・細砂の含量から粗砂含量を差引き細砂含量を求める。求められた粗砂・細砂・シルト・粘土含量は、4成分の合計を100とし、重量百分率で表示した。また、土性は粒径組成を基に国際土壤学会法による土性三角図より求めた。

(2) 結果

いずれの試料も比較的近似した組成を示し、土性も堆積土あるいは軽質土に区分される。ただし、14層(試料番号32)については、あきらかに他の試料よりも粘土含量が多い(表1)。

4. 鉱物組成

(1) 分析方法

各土層の母材となる1次鉱物の組成を知るために鉱物分析を行い、重鉱物組成および軽鉱物組成を明かにした。ローム層については、第1地点のAs-BPグループのなかの上位の軽石層以上の層準を対象とした(図3)。また黒ボク土については、第2地点の黒ボク土の各土層を対象とした(図4)。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料50gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置と分析篩を用い、泥分(1/16mm以下)の粒子を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) テトラブロモエタン(比重2.96)により比重分離。
- 5) 重鉱物、軽鉱物各々250粒ずつについて偏光顕微鏡下で同定し、重鉱物組成および軽鉱物組成を求める。

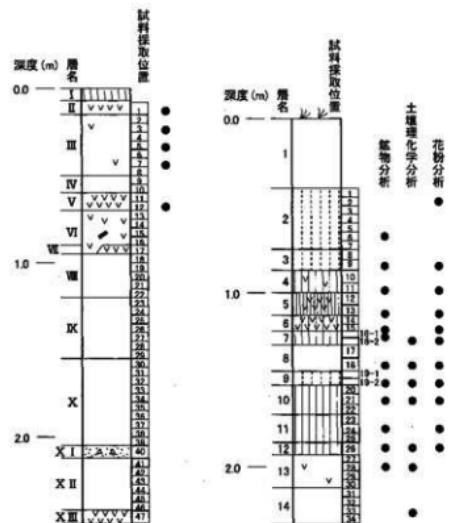


図3 第1地点の鉱物分析
試料の採取位置

図4 第2地点(黒ボク土)
の各分析試料の採取位置

(2) 結果

ローム層の重鉱物組成をダイヤグラムにして図5に、その内訳を表2に示した。重鉱物では、いずれの試料においても斜方輝石が最も多く含まれている。次に多く含まれる重鉱物は単斜輝石である。ただし、第III層上部以上（試料番号3と1）では、不透明鉱物（おもに磁鐵鉱）と単斜輝石の量がほぼ同じになる。不透明鉱物（おもに磁鐵鉱）の次に含まれる重鉱物は、角閃石である。As-SP由来する軽石粒が多く認められる第III層の中位の試料（試料番号5）には、わずかに角閃石が他の層準よりも多く産出する傾向が伺える。

このことはAs-SPの降灰層準がこの試料付近にあることを示唆するが、微細な差異であり、これ以上の旨は避けることにする。なお、第II層（試料番号1）には、ごくわずかではあるがカンラン石が含まれている。

次に、ローム層に含まれる軽鉱物組成をみると、軽鉱物組成をダイヤグラムにして図5に、その内訳を表2に示した。全体として上位の試料ほど含まれる火山ガラスの量が多い。一方、斜長石は上位ほど少なくなる傾向にある。火山ガラスの形態は多い順に中間型、軽石型、バブル型である。中間型とは、黒曜石の破片状を呈する分厚い火山ガラスを指す。また軽石型とは、スボンジ状や織羅東状に発泡した火山ガラスを指す。この中間型および軽石型の火山ガラスは、浅間火山起源のテフラに特徴的に多く含まれる火山ガラスである。さらに、バブル型とは平板状の火山ガラスを指す。分析した試料に含まれるバブル型の火山ガラスはいずれも透明で、ATに由来するものと考えられる。

黒ボク土の重鉱物組成をダイヤグラムにして図6に、その内訳を表3に示した。全体として重鉱物組成は、斜方輝石>単斜輝石>不透明鉱物（おもに磁鐵鉱）で表される。なお第7層（試料番号16-1）より上位で角閃石の割合が増加する傾向にあり、とくに第13層において角閃石は斜方輝石について主要な重鉱物となる。これは、同層準に角閃石を多く含むHr-FPの降灰層準があることに由来する。なお、淡色黒ボク土に相当する第8層（試料番号18）は下位の層準に比較して、斜方輝石および単斜輝石（併せて両輝石と呼ばれる）の量が多く、不透明鉱物の量が少ない傾向にある。しかしこれはより下位の層準より引き続き認められる傾向であり、とくに淡色黒ボク土の母材が下位の層準の母材と大きく異なることはないと考えられる。すなわち、重鉱物組成に関する限り淡色黒ボク土と下位の黒ボク土との間に大きな差異はないようみえる。なおAs-YPの軽石が多く含まれているローム層の最上部（第13層：No.28）には、カンラン石がごく少量含まれている。カンラン石は第1地点のAs-YP層準でも確認されているが、これはAs-YPにわずかながら特徴的に含まれており、赤城山南麓において今後As-YPの指標鉱物となる可能性を秘めている。

次に黒ボク土の軽鉱物組成を検討することにする。軽鉱物組成をダイヤグラムにして図6に、その内訳を表2に示した。全体として第13層（試料番号28）より第5層（試料番号13）に向かって火山ガラスの量が減少し、斜長石の量が増加する傾向がある。さて、本地域においてAs-YP以降、As-Cまでの層準には中間型や軽石型の火山ガラスを多く含むようなテフラの降灰は知られていない。したがって、火山ガラスの量比の減少は、第13層（試料番号28）に降灰層準をもつAs-YP起源の火山ガラスの量の変化に起因している可能性がある。すなわち、As-YPの粒子がAs-YP降灰直後に形成された土壤の母材になったことを意味しており、土壤形成層準がAs-YP

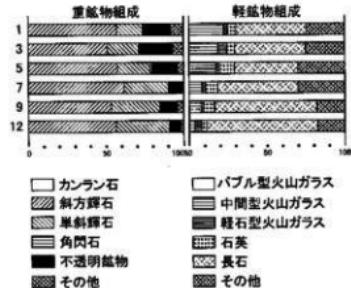


図5 第1地点（ローム層）の重軽鉱物組成ダイアグラム

表2. 第1地点（ローム層）の重軽鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
1	1142	42	1	45	19	250	2	56	6	14	113	59	250	
3	127	51	1	55	16	250		47	14	13	113	63	250	
5	143	53	3	41	10	250	2	43	5	25	102	73	250	
7	154	71	1	23	1	250	1	21	5	20	129	74	250	
9	133	79	1	28	9	250	2	19	4	18	164	43	250	
12	141	86		18	5	250	1	9	11	8	178	43	250	

の上方に発達するにつれ、As-YP以外の粒子が母材に占める割合が増加したものと考えられる。軽鉱物組成上からも、淡色黒ボク土の母材と下位の黒ボク土の母材に大きな違いは認められない。

第4層(試料番号11)では火山ガラスの量が再び増加する傾向が伺える。これは同層準にAs-Bの降灰層準があるためと考えられる。

5. 腐植含量

(1) 分析方法

微粉碎試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤量し、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、ロートを入れて、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸させた。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アノミウム液で滴定し、有機炭素量を求めた。その値に係数1.724を乗じて腐植含量とした。

(2) 結果

7層(試料番号16-2)では7.54%の値を示し、試料中最も多い含量が認められる(表1)。8層(試料番号18)・9層(試料番号19-2)では4.83%・4.65%の値を示し、7層に比較してその含量が少なくなっている。10層(試料番号21)では6.43%の値を示し、その含量が多くなっている。12層(試料番号26)ではその値が4.96%と、8層(試料番号18)に近似した値を示すが、10層(試料番号21)に比較して、再びその含量が少なくなっている。一方、13層(試料番号28)・14層(試料番号32)では2.25%・1.25%の著しく低い値を示し、さらにその含量が少なくなっている。この結果は、土色(黒色)の濃淡の変化と同じ傾向にある。

6. リン酸吸収係数

(1) 分析方法

乾土換算で10.00gになるように分析試料を秤量し、pH7.0の2.5%磷酸アノミウム液を正確に20ml加え、時々振とうしながら室温で24時間放置した。その後、これを乾燥滤紙で滤過し、その滤液0.1mlを50mlのメスフラスコに正確に採取し、蒸留水約35mlを加え、さらにリン酸発色a液10mlを加えて50mlに定容した。30分間放置後、420nmでこれを比色定量した。この定量されたリン酸量を(pH7.0)の2.5%磷酸アノミウム液のリン酸量から差し引いて、リン酸吸収係数を求めた。

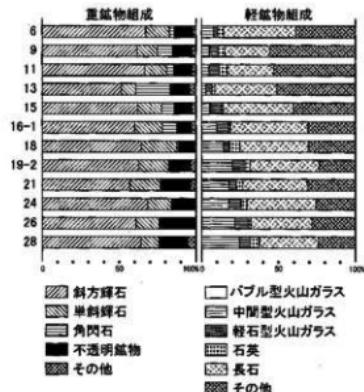


図6 第2地点(黒ボク土)の重軽鉱物組成ダイアグラム

表3. 第2地点(黒ボク土)の重軽鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	半斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	パブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他	合計
6	168	39	8	30	5	250	2	20	6	10	117	95	250	
9	154	33	25	31	7	250			13	14	11	73	139	250
11	166	36	12	29	7	250			12	17	13	75	133	250
13	128	24	56	31	11	250			7	10	5	100	128	250
15	155	39	21	28	7	250			14	18	3	114	101	250
16-1	150	45	24	23	8	250			25	19	3	126	77	250
18	161	58	3	25	3	250	2	36	10	17	111	74	250	
19-2	157	49	1	35	8	250	2	50	20	9	112	57	250	
21	142	50	2	49	7	250	2	45	12	10	105	76	250	
24	171	39	2	37	1	250			44	20	10	112	64	250
26	152	38	1	59	250	1	54	22	4	99	70	250		
28	2	160	30	1	46	11	250	1	62	17	15	96	59	250

(2) 結果

7層(試料番号16-2)・8層(試料番号18)・9層(試料番号19-2)・10層(試料番号21)・12層(試料番号26)では、いずれも2,000前後の著しく高い値を示す(表1)。一方、13層(試料番号28)・14層(試料番号32)では、その値が1,500前後を示し、上記試料に比較して、やや低い傾向にある。しかし、いずれの試料とも火山灰土判定基準の1,500以上の値を示し、火山灰土壤としての特徴が認められる。

各土層の土壤理化性は、上記した粒径組成・腐植の結果を含めて考察すると、浅間C軽石層直下の7層は、粘土含量25%、腐植含量8%、リン酸吸収係数2,000の腐植に富む細粒質な火山灰土壤といえる。

8層・9層は、その理化性がほぼ同じであり、粘土含量20%・腐植含量5%・リン酸吸収係数2,000の腐植を含む中・細粒質な火山灰土壤といえる。ただし、土壤硬度の結果によれば、8層の方が堅密度はより疎であるといえる。

10層は、粘土含量25%、腐植含量6%、リン酸吸収係数2,000の腐植に富む細粒質な火山灰土壤といえる。

12層は、粘土含量23%、腐植含量5%、リン酸吸収係数2,000の腐植を含む中・細粒質な火山灰土壤といえる。

13層は、粘土含量29%、腐植含量2%、リン酸吸収係数1,500の腐植を含む細粒質な火山灰土壤といえる。

14層は、粘土含量35%、腐植含量2%未満、リン酸吸収係数1,500の腐植が少ない粘土化の進んだ細粒質な火山灰土壤といえる。

7. 土壌に含まれる花粉化石

(1) 分析方法

繩文時代以降の植生に関する情報を得るために、第2地点(図2・4)の黒ボク土層の各土層について花粉分析を行い、各土層中に含まれている花粉化石の種類・量を調べた。分析は次の手順で行った。

- 採取した試料約20gを100°Cで24時間加熱乾燥させた後、乾燥重量を測定する。
- HF処理→重液分離(ZnBr₂:比重2.2) 2回→アセトトリス処理→KOH処理の物理・化学処理を行い花粉・孢子化石を抽出する。
- 分析残渣を一定量に希釈し良好に攪拌した後、一定量をマイクロビペットで秤り取り、グリセリンで封入してプレパラートを作成する。
- 光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する化石の種類(Taxa)の同定および計数を行い、1g中の花粉粒量および花粉化石群集組成を調べた。

(2) 結果

黒ボク土各土層における1g中の花粉粒量を図7、出現した花粉化石の種類およびその個数を表4に示す。各土層における1g中の花粉粒量は、7層で約8,200粒、それ以外の土層では1,000粒~5,000粒であった。また、検出される花粉化石は全て保存が良くなく、著しく変形・変質しており種類の同定が困難なものが大部分を占める。種類の同定ができたものは、木本花粉10種類、草本花粉9種類、シダ類胞子1種類であり、主に草本花粉の出現数が多かった。これらは、形が特徴的で風化が進んでも同定可能な種類や、花粉外膜が厚く風化に強いと思われる種類に限られている。

このように今回の各土層の試料では、花粉化石の保存状況が良くなく、堆積後に花粉化石が変質作用(土壤微生物による分解、化学的な酸化分解など)の影響を受けてい

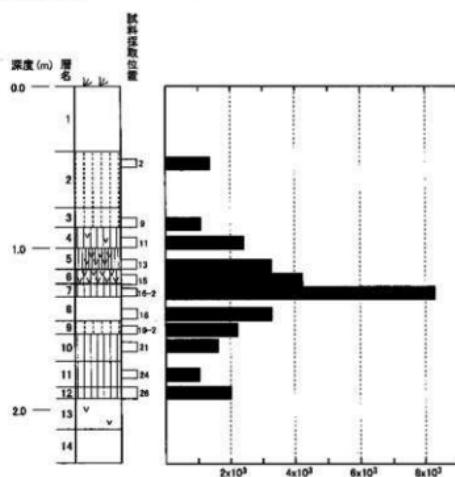


図7 第2地点(黒ボク土)の各土層の1g中の花粉粒量

表4. 第2地点(黒ボク土)各土層の花粉化石の組成

種類	試料番号	2	9	11	13	15	16-2	18	19-2	21	24	26
木本花粉												
ツガ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クマシデ属—アサダ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハシバミ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
コナラ属コナラ亞属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クリ属—シイノキ属近似種	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
エノキ属—ムクノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウルシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズキ属近似種	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
草本花粉												
イネ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カヤツリグサ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ナデシコ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カラマツソウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
セリ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オナモミ属—カノコソウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他のキク亞科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
タンポポ亞科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明花粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シダ類胞子												
ヒカゲノカズラ属	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ゼンマイ属	—	1	57	4	2	2	17	2	—	—	—	—
サンショウモ	5	—	3	—	19	—	—	—	—	—	—	—
他のシダ類胞子	7	15	330	126	1321	28	61	92	1	2	2	2
合計												
木本花粉	254	2	64	237	106	270	284	1	2	3	3	3
草本花粉	177	0	54	257	153	1083	34	3	0	3	3	3
不明花粉	5	0	1	15	3	8	8	0	0	0	0	0
シダ類胞子	12	17	391	130	1342	30	79	94	1	2	2	2
総計(不明を除く)	443	19	509	624	1601	1383	397	98	3	8	8	8
再堆積化石												
カリアグルミ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
フウ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—

ることが伺われ、堆積後に分解・消失した花粉が存在することが示唆される。また、各土層中の花粉粒量は泥炭や湖成堆積物のそれに比較してかなり少ない値を示すが、これもまた、各土層生成時に堆積した花粉が少なかったことを示すのではなく、むしろ変質作用の影響を受けた結果を示す可能性が高い。すなわち、今回の各土層の花粉化石群集は、各土層生成時に堆積した花粉組成を正確に反映しているとはいえず、むしろ淘汰されて残存している群集である可能性が高い。したがって、今回の結果からは各土層堆積当時の植生について言及することはできない。赤城山南面地域の古植生変遷に関しては、前橋市の二宮千足遺跡の結果(パリノ・サーヴェイ株式会社、1992)などで述べられている。これによれば、約1万年前から中世はじめ頃までは、ナラ類を主とする落葉広葉樹林が中心であったと考えられている。今回検出された種類をみても、この結果と矛盾するような種類は検出されておらず、これらが当時の調査地点周辺の植生を構成していた要素であった可能性は充分考えられる。

III. 考察

(1) 石器の出土層位

市之関前田遺跡の旧石器時代の文化層は、第III層中より検出されている。約1.5-2.0万年前の噴出年代をもつAs-SPの降灰層準が不明確なために、同テフラとの層位関係について言及できない。しかし、石器包含層である第III層が、約2.5万年前から2.0万年前にかけて噴出したAs-BPグループの上位にあり、約1.5-1.65万年前に噴出し

た As-YP の下位にあることは確実である。すなわち、現在のところ、火山灰層位学の立場から市之関前田遺跡の石器包含層である第Ⅲ層の年代は約1.5-2.0万年前と推定することができる。

(2) 淡色黒ボク土の成因

淡色黒ボク土の成因としては、次の 2 つが考えられよう。一つは、外来からの粒子の混入である。これには具体的に地すべりの堆積や風塵の増加、さらにテフラの降灰が考えられる。もう一つは、植生変化にともなう土壤形成作用の変化である。

鉱物組成からみて、黒ボク土から淡色黒ボク土にかけての層準で、重鉱物組成および軽鉱物組成が変化するようなことはなかった。少なくとも淡色黒ボク土において、両輝石型のテフラ以外の降灰はなかったことが言える。また軽鉱物組成からも、ガラス質のテフラの降灰はなかったと考えられる。さらに粒径組成でも、黒ボク土と上位の淡色黒ボク土の間に大きな違いは認められなかった。これらは、下位の黒ボク土と上位の淡色黒ボク土の間で土壤の母材に大きな変化がなかったことを示唆している。腐植含量では、明らかに淡色黒ボク土の層準で少なくなっている。また、黒ボク土と淡色黒ボク土生成時の植生については、花粉化石の保存が悪かったため、検討することができなかつた。

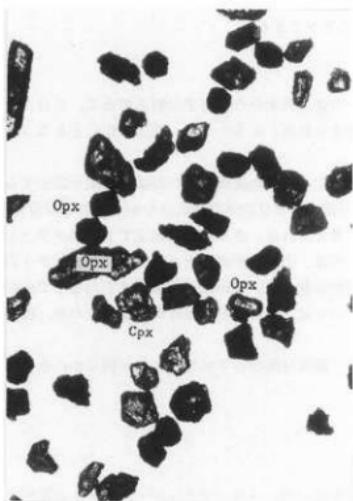
今回の分析では、少なくとも淡色黒ボク土の形成に、テフラの降灰は関与していないことが明らかになったと言える。

IV. おわりに

今回の分析では、土壤形成時の古植生を知るために花粉分析を行った。一方、プラント・オパールは花粉に比較して風化に対する抵抗性が大きく、土壤形成時の古植生を知る上で有効と考えられている。いまのところ、同定可能な植物の種類が少ないという問題があるが、今後の分析ではプラント・オパール分析も併せて行われることがより望ましいと考えられる。

引用文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, 1-79.
新井房夫 (1979) 関東地方北西部の繩文時代以降の指標テフラ層。考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.
加藤芳明 (1983) 1. 火山灰土の生成メカニズム 腐植層生成の条件。「火山灰土一生成・性質・分類」, 日本土壤肥料学会編, 博友社, p.19-23.
熊田恭一 (1981) 土壤有機物の化学 第2版。学会出版センター, p.44-45.
町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—。科学, 46, p.339-347.
町田 洋・新井房夫 (2003) 新編 火山灰アトラス。東京大学出版会, 336p.
町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原東夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—。古文化財擁集委員会編「古文化財に関する保存 科学と人文・自然科学」, p.865-928.
大羽 裕・本名俊正 (1984) 黒ボク土判定のための腐植の分析法。土壤肥料学雑誌, 55, p.55-61.
パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992) 二宮千足遺跡の古環境解析、「群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第125集 二之宮千足遺跡 国道17号(上部道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(自然科学分析編)」, p.61-111, 建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団。
坂口 一 (1986) 桧名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.
平田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.
平田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土。群馬県史編纂委員会編「群馬県史 通史編1 原始古代1」, p.37-129, 群馬県。



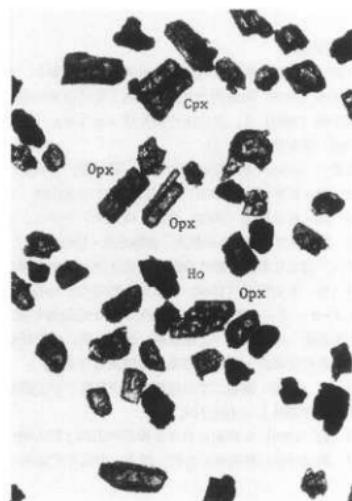
第1地点 試料番号1 重鉱物



第1地点 試料番号5 重鉱物



第2地点 試料番号18 重鉱物

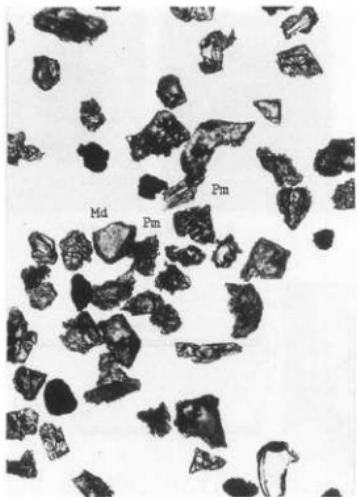


第2地点 試料番号22 重鉱物

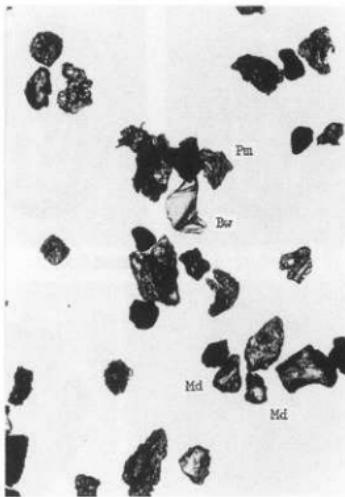
Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石, Opq: 不透明鉱物



図版1 重鉱物



第2地点 試料番号18 軽鉱物

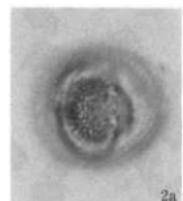
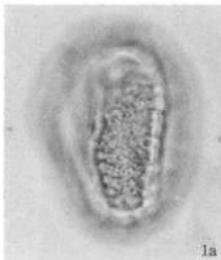


第2地点 試料番号21 軽鉱物

Bw: バブル型ガラス, Md: 中間型ガラス, Pm: 瓢石型ガラス

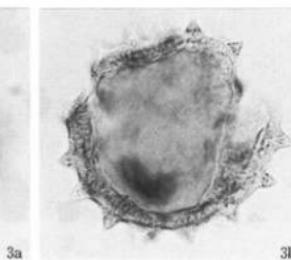
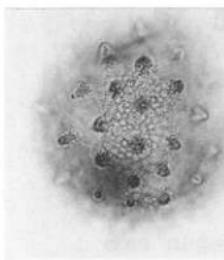
0 1 mm

図版2 軽鉱物



1. コナラ亜属 試料番号24

2. ヨモギ属 試料番号2

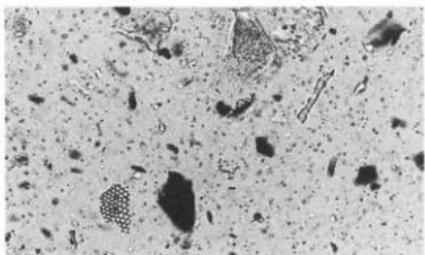


3. キク亜科 試料番号24

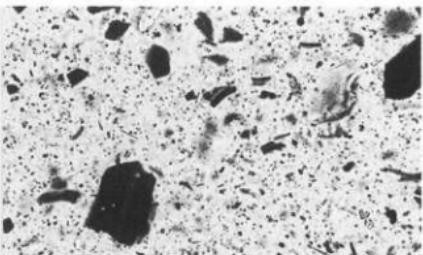
0 (1a・1b・2a・2b) 50 μ

0 (3a・3b) 50 μ

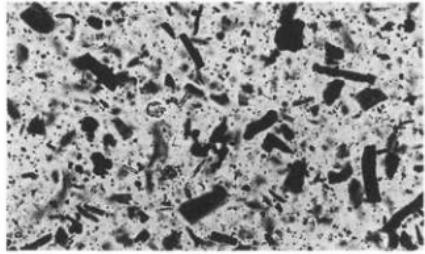
0 (4~7) 100 μ



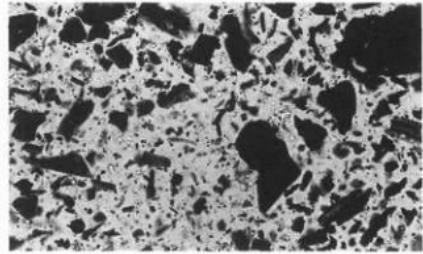
4. 状況写真 試料番号2



5. 状況写真 試料番号9

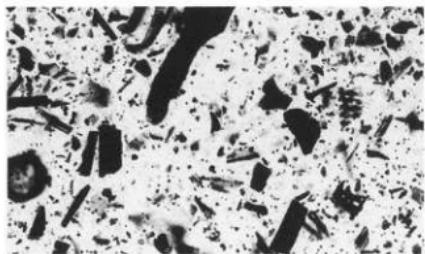


6. 状況写真 試料番号11

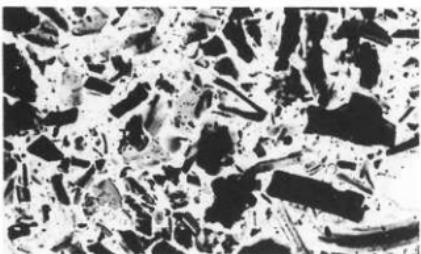


7. 状況写真 試料番号13

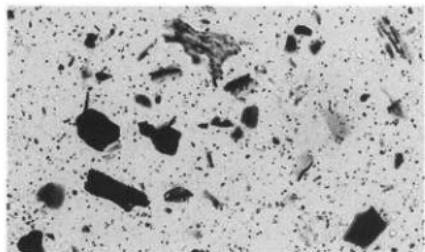
図版3 花粉化石・花粉分析プレパラートの状況



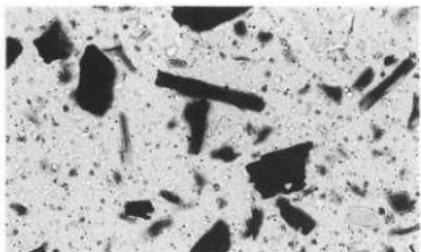
8. 状況写真 試料番号15



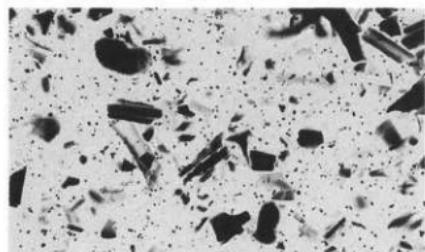
9. 状況写真 試料番号16-2



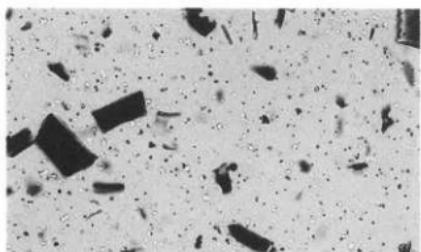
10. 状況写真 試料番号18



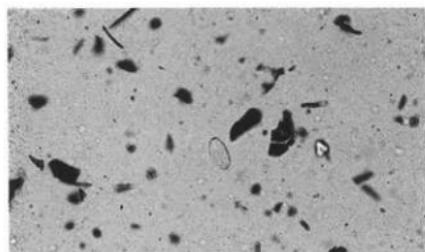
11. 状況写真 試料番号19-2



12. 状況写真 試料番号21



13. 状況写真 試料番号24



14. 状況写真 試料番号26

0 100 μ

図版4 花粉分析プレパラートの状況

写 真 図 版

PL-1

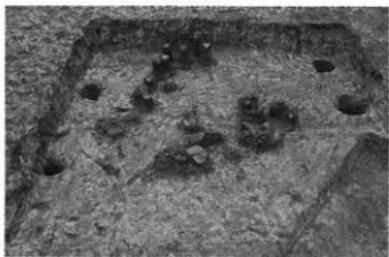


1 第6号住居址完掘状况



2 第8号住居址完掘状况

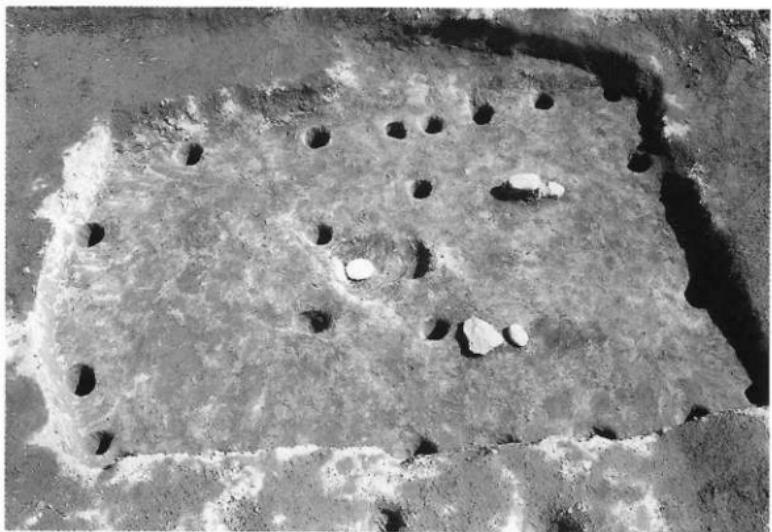
PL-2



1 第6号住居址遗物出土状况



2 第8号住居址炉址完掘状况



3 第12号住居址完掘状况



4 第12号住居址土层观察状况



5 第12号住居址遗物出土状况

PL-3



1 第12号住居址炉址上层堆积状况



2 第12号住居址炉址完掘状况



3 第20号住居址遗物出土状况



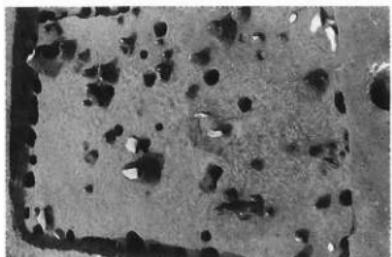
4 第20号住居址炉址完掘状况



1 第30号住居址完掘状况



2 第31号住居址出土状况



1 第30号住居址遺物出土状況



2 第31号住居址土層觀察状況



3 第31号住居址完全掘出状況



4 第32号住居址炉址完全掘出状況



5 第32号住居址遺物出土状況



1 第6号土坑土层觀察狀況



2 第6号土坑完掘狀況



3 第7号土坑遺物出土狀況



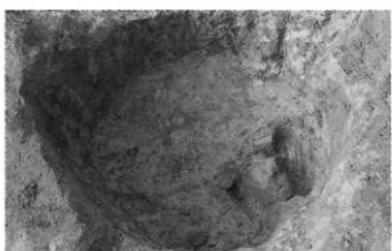
4 第18号土坑七層觀察狀況



5 第18号土坑遺物出土狀況



6 第18号土坑完掘狀況



7 第19号土坑完掘狀況

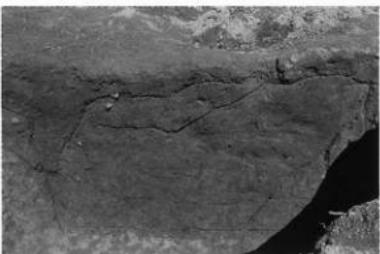


8 第20号土坑完掘狀況

P L - 7



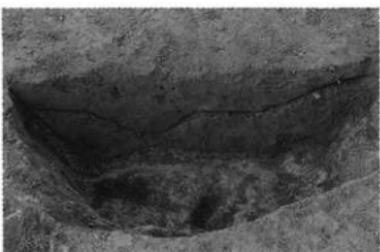
1 第21号土坑土层觀察狀況



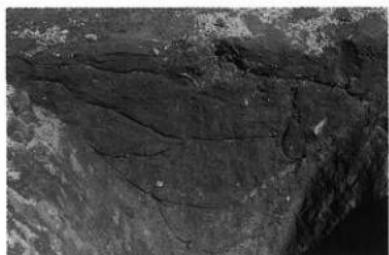
2 第22号土坑土層觀察狀況



3 第22号土坑遺物出土狀況



4 第23号土坑土層觀察狀況



5 第27号土坑土層觀察狀況



6 第27号土坑完掘狀況



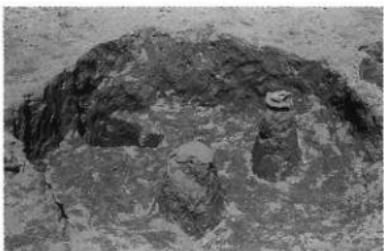
7 第28号土坑土層觀察狀況



8 第36号土坑土層觀察狀況



1 第36号土坑完掘状况



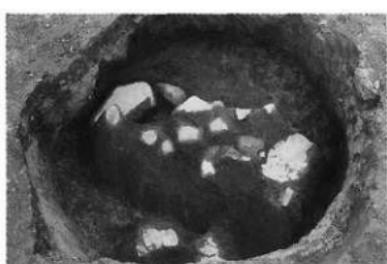
2 第37号土坑遭物出土状况



3 第50号土坑土层观察状况



4 第55号土坑土层观察状况



5 第55号土坑遭物出土状况



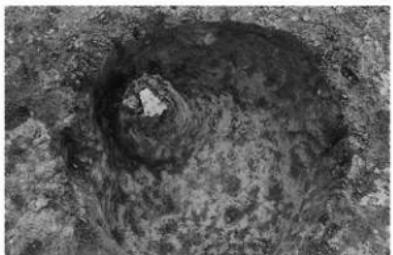
6 第55号土坑完掘状况



7 第56号土坑完掘状况



8 第66号土坑土层观察状况



1 第102号土坑遗物出土状况



2 第107号土坑完掘状况



3 第155号土坑完掘状况



4 第156号土坑土层观察状况



5 第156号土坑完掘状况



6 第161号土坑土层观察状况



7 第172号土坑土层观察状况



8 第174号土坑土层观察状况



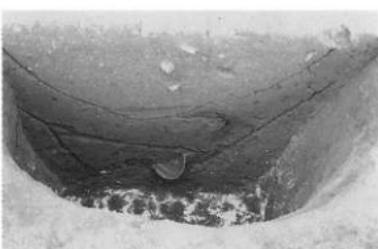
1 第180号土坑上层观察状况



2 第180号土坑完掘状况



3 第181号土坑土层观察状况



4 第185号土坑土层观察状况



5 第1号土坑遗物出土状况



6 第2号土坑壁土层观察状况



7 第2号土坑完掘状况



8 第3号土坑完掘状况



1 第25号土坑遗物出土状况



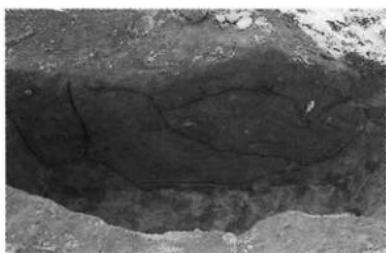
2 第53号土坑土层观察状况



3 第53号土坑完掘状况



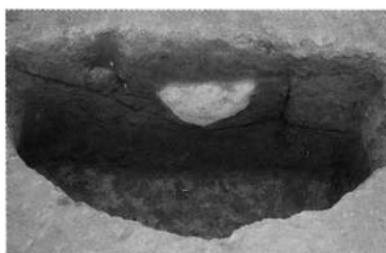
4 第111号土坑遗物出土状况



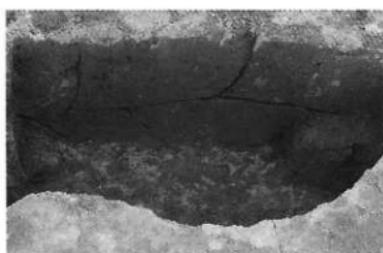
5 第26号土坑土层观察状况



6 第38号土坑完掘状况

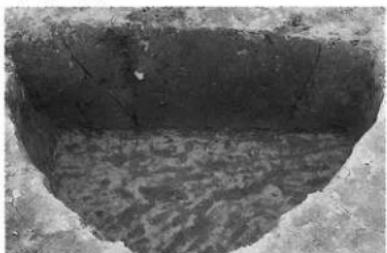


7 第40号土坑土层观察状况



8 第68号土坑土层观察状况

PL-12



1 第74号土坑土层观察状况



2 第75号土坑土层观察状况



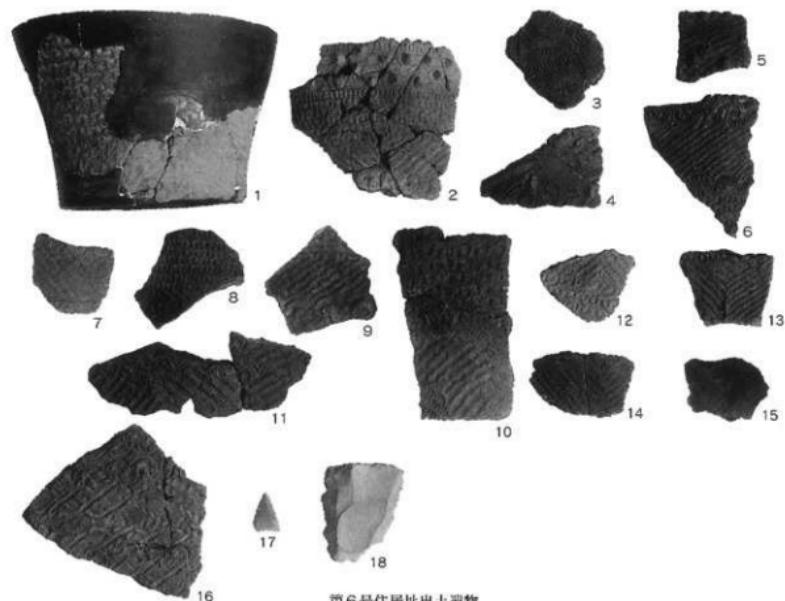
3 第109号土坑完掘状况



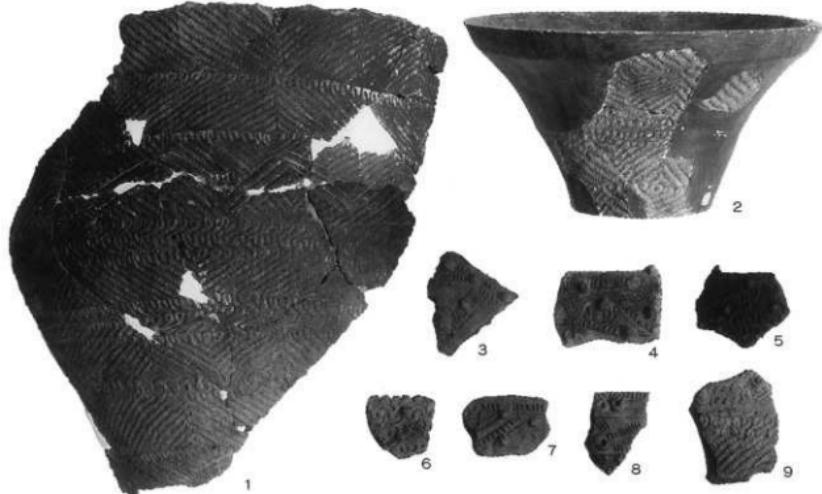
4 第130号土坑完掘状况



5 第173号土坑土层观察状况

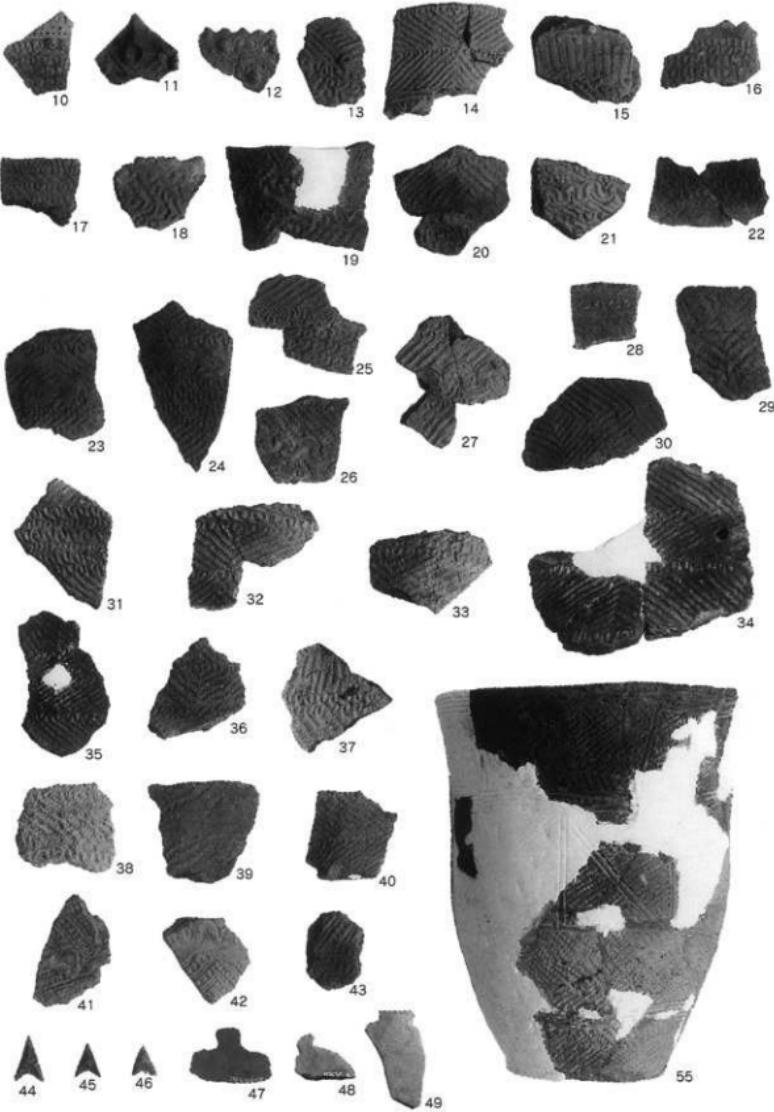


第6号住居址出土遺物



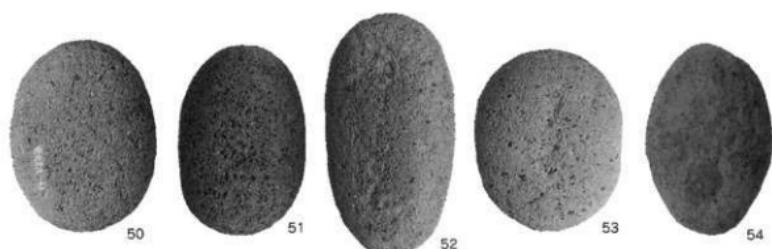
第8号住居址出土遺物①

PL - 14

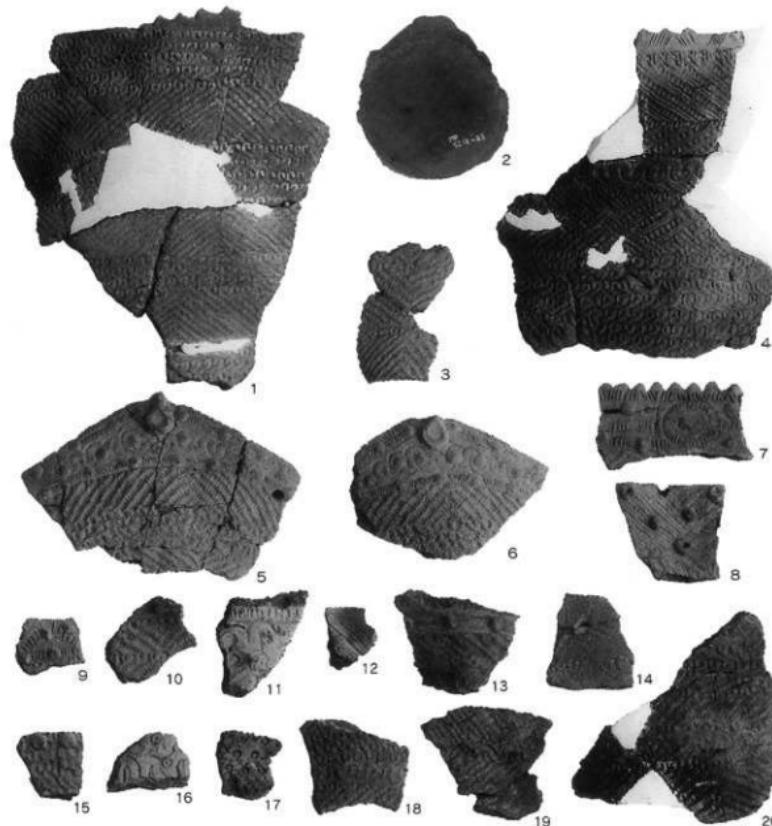


第8号住居址出土遺物②

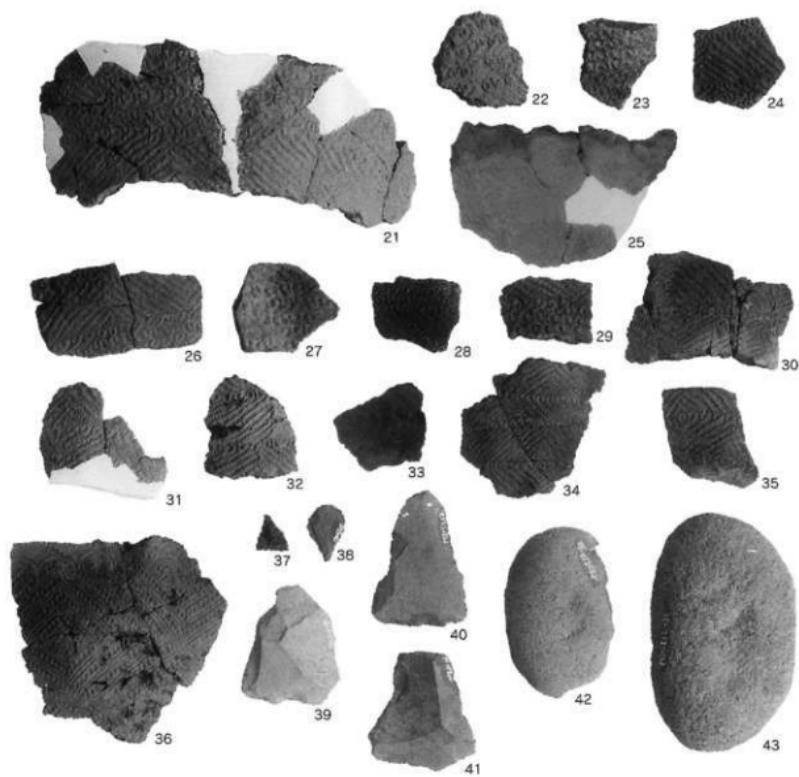
P L - 15



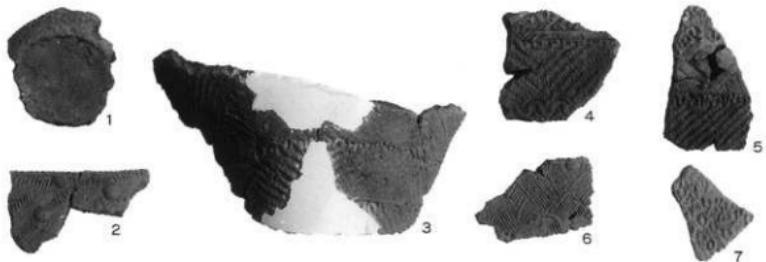
第8号住居址出土遺物③



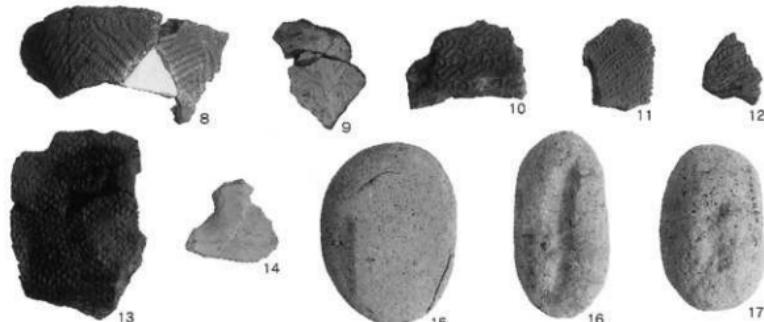
第12号住居址出土遺物①



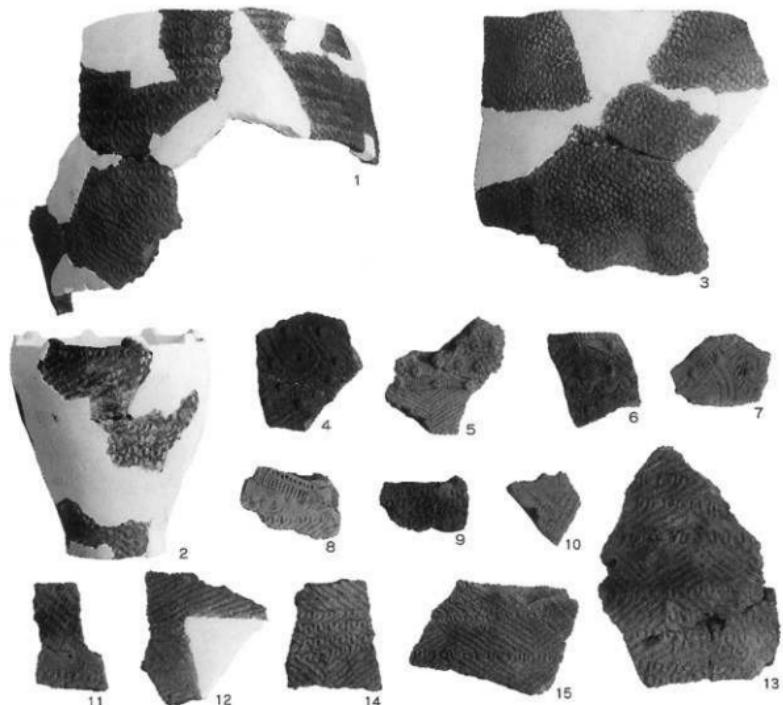
第12号住居址出土遗物②



第30号住居址出土遗物①

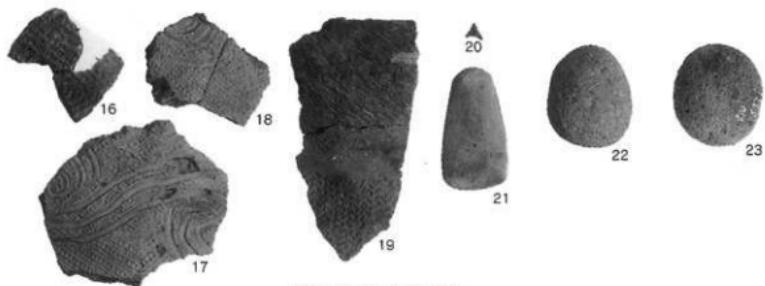


第30号住居址出土遗物②



第31号住居址出土遗物①

PL - 18

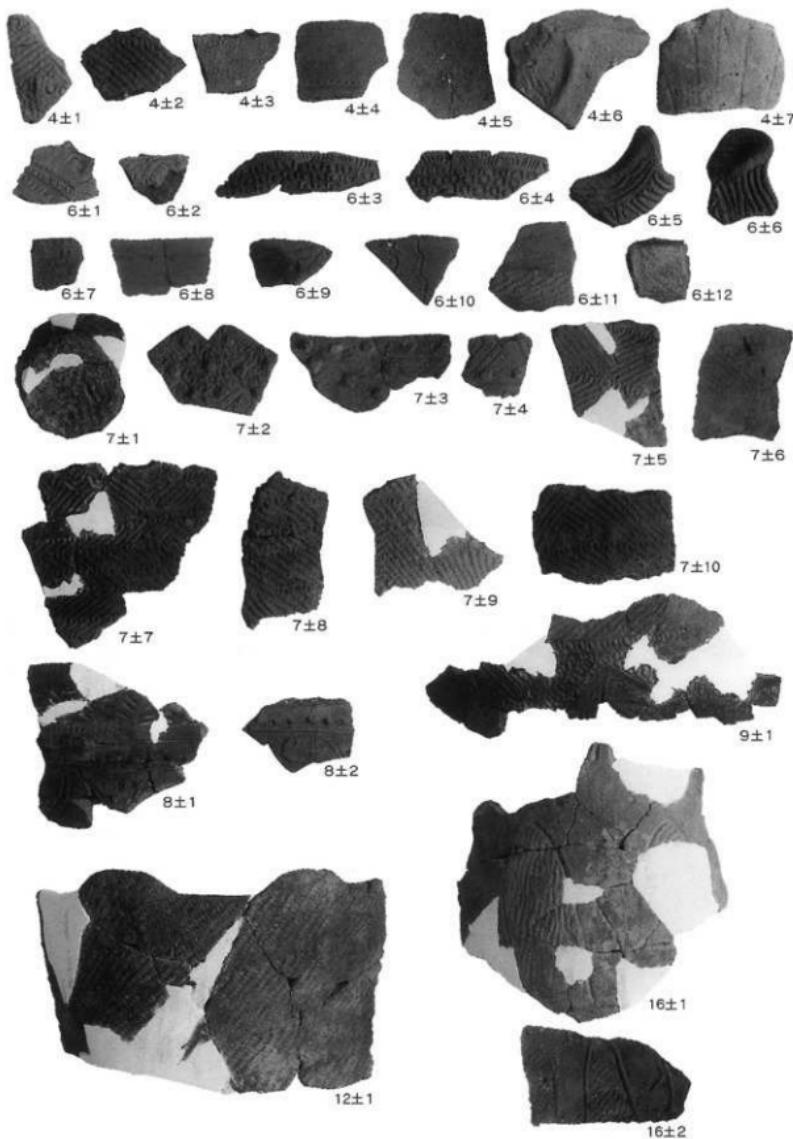


第31号住居址出土遺物②



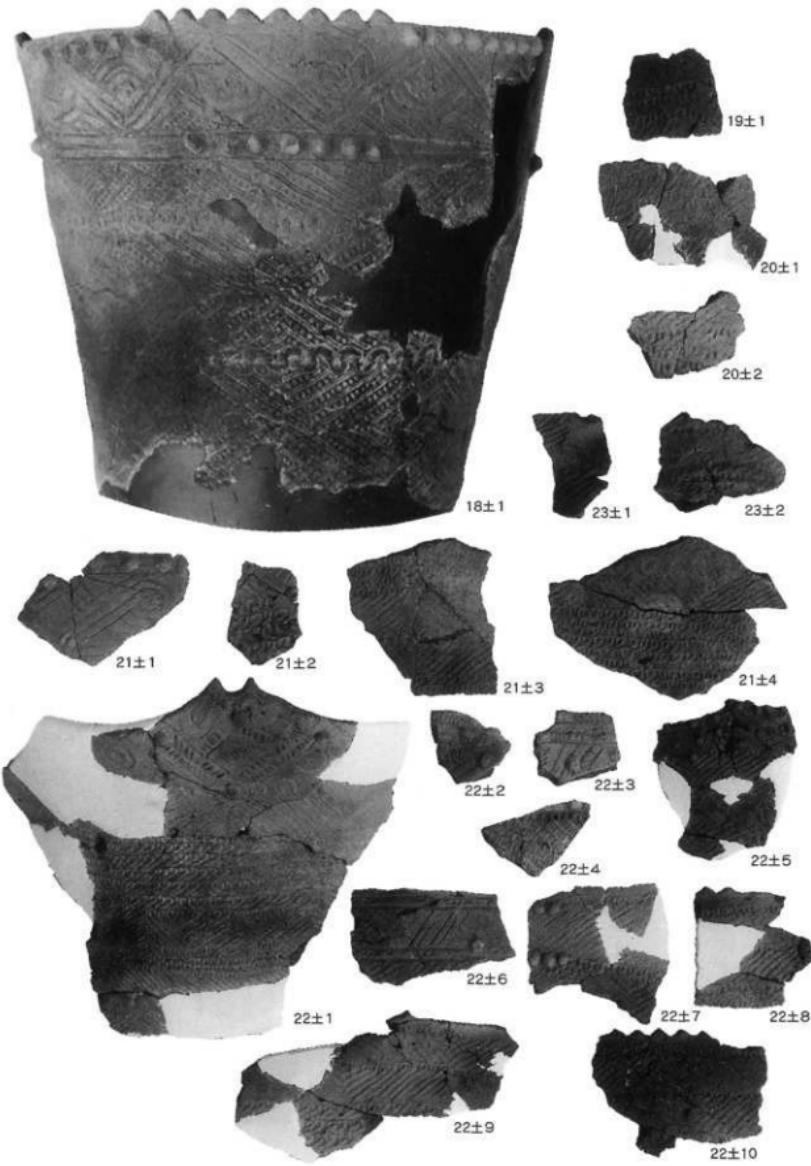
第32号住居址出土遺物

PL - 19



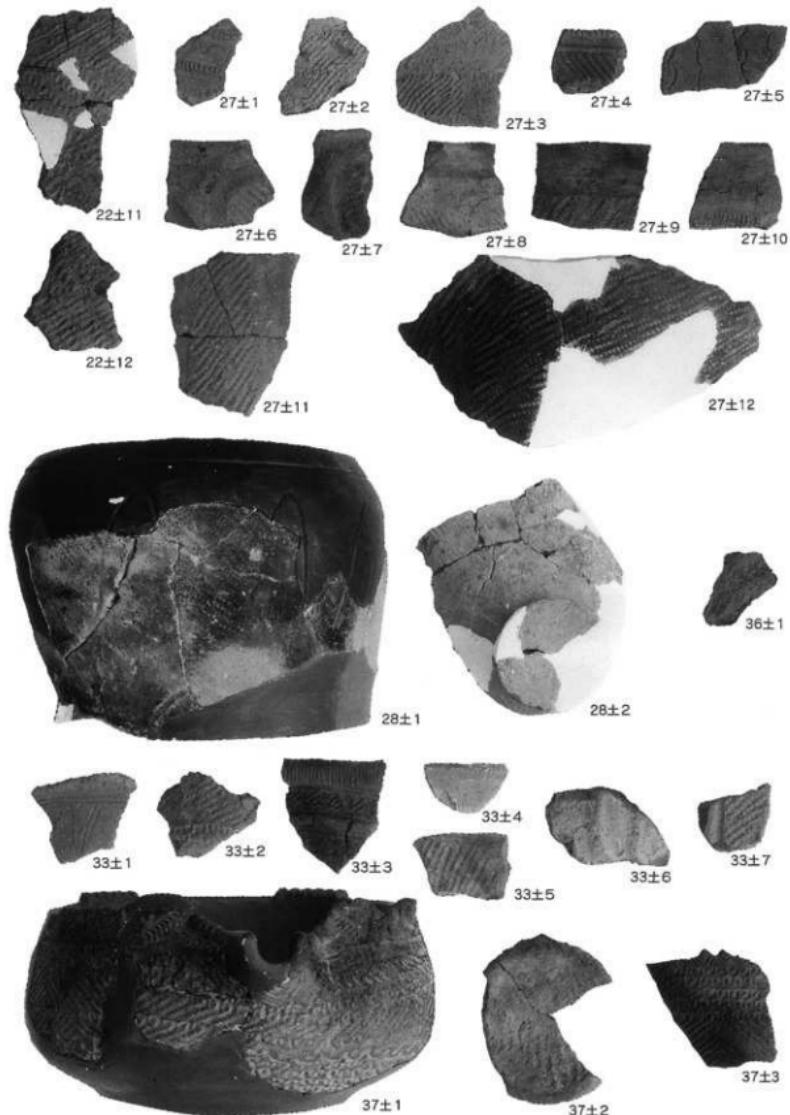
土坑出土遺物①

P L - 20



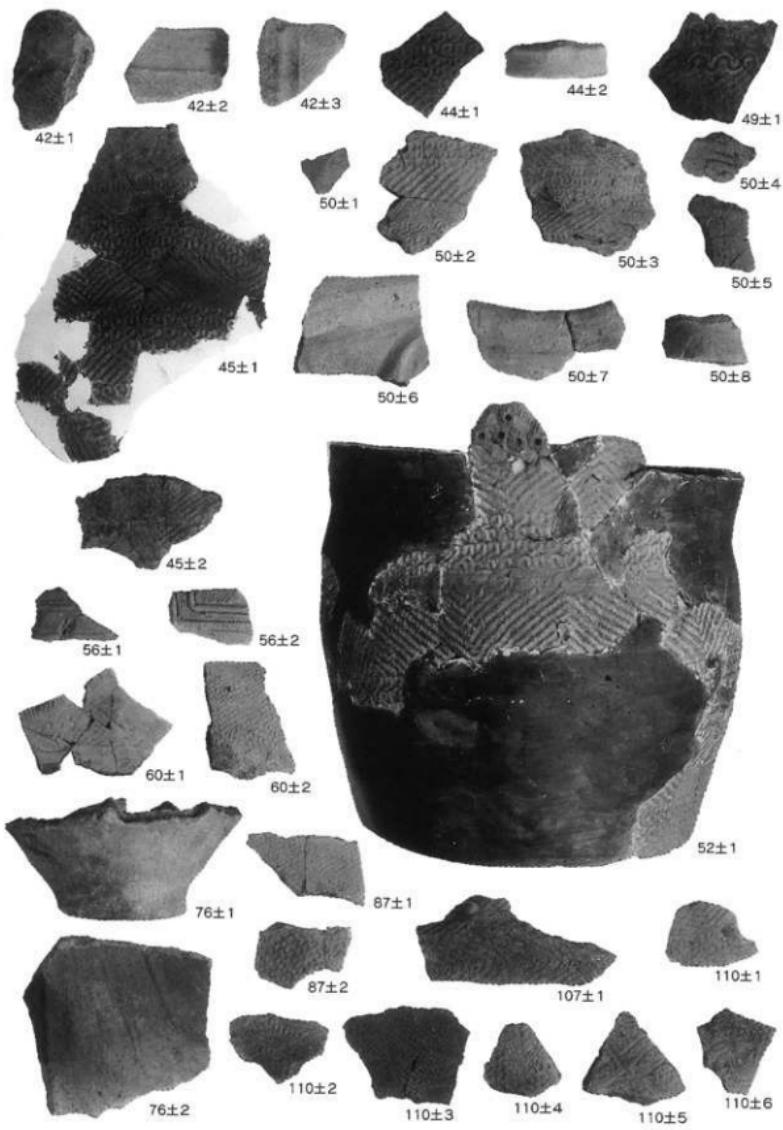
土坑出土遗物②

P L - 21

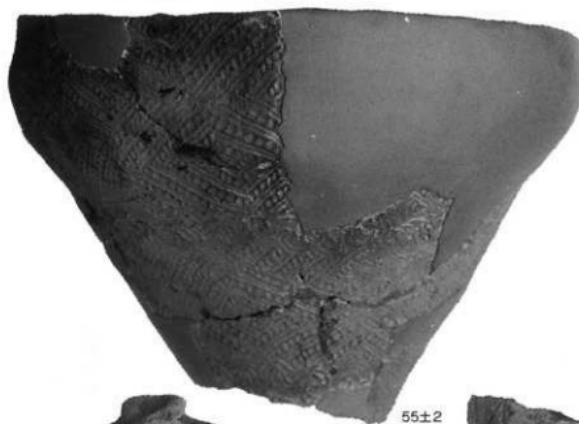
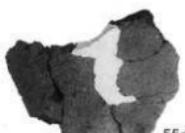


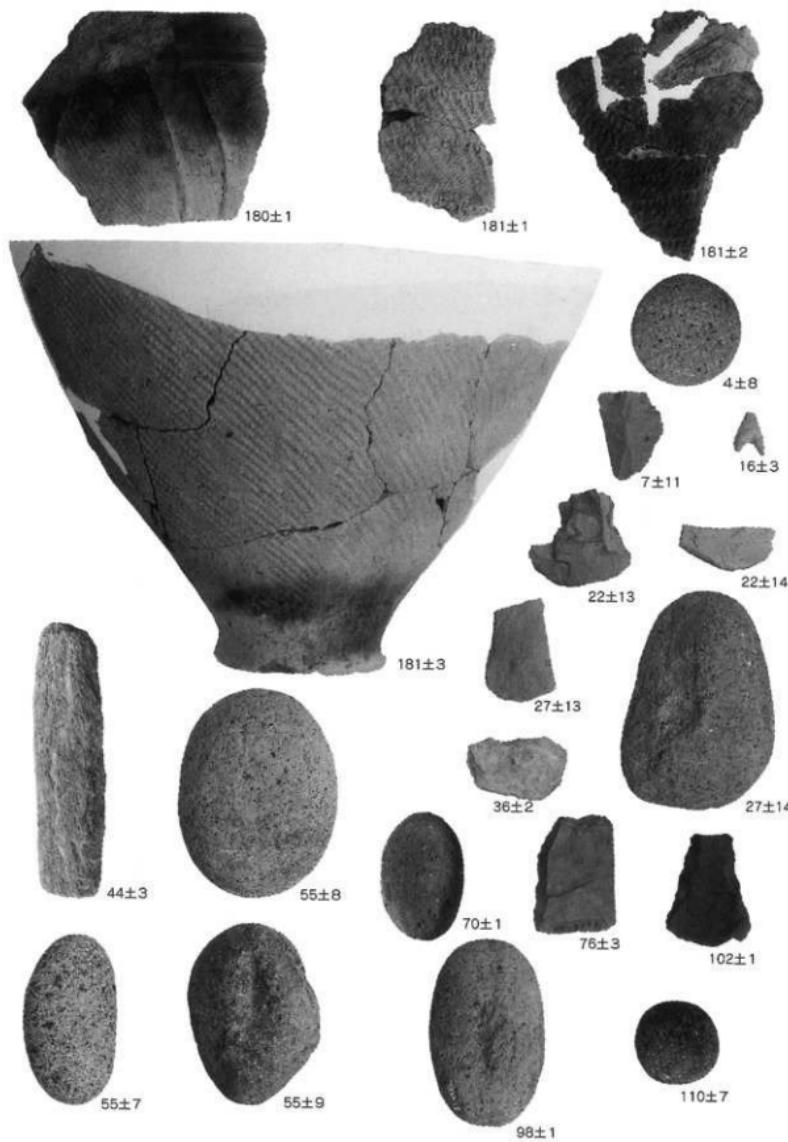
土坑出土遺物③

P L - 22

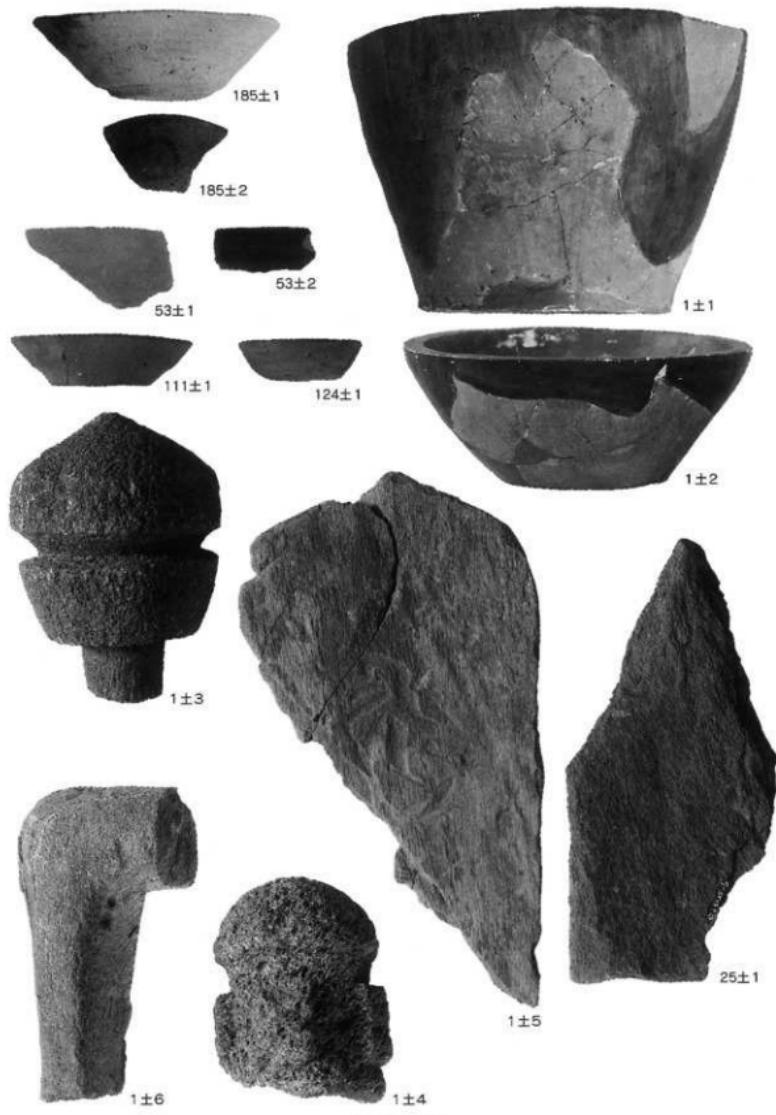


土坑出土遺物④



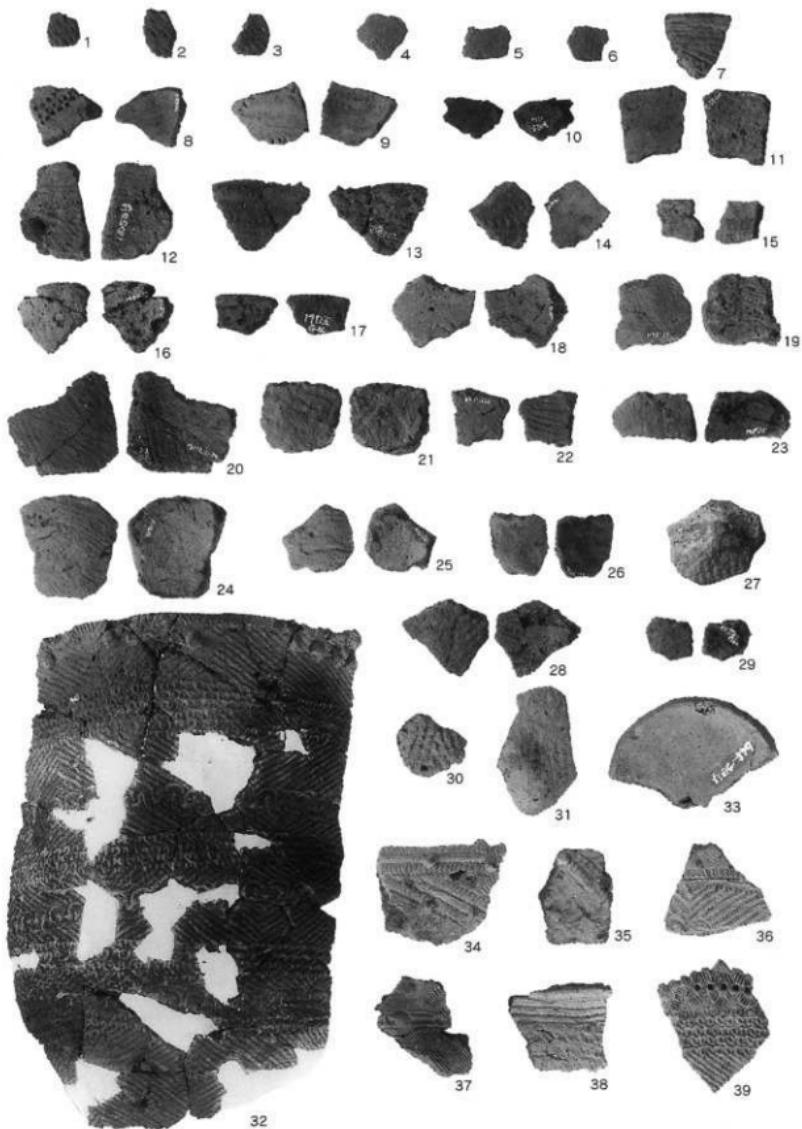


土坑出土遗物⑥

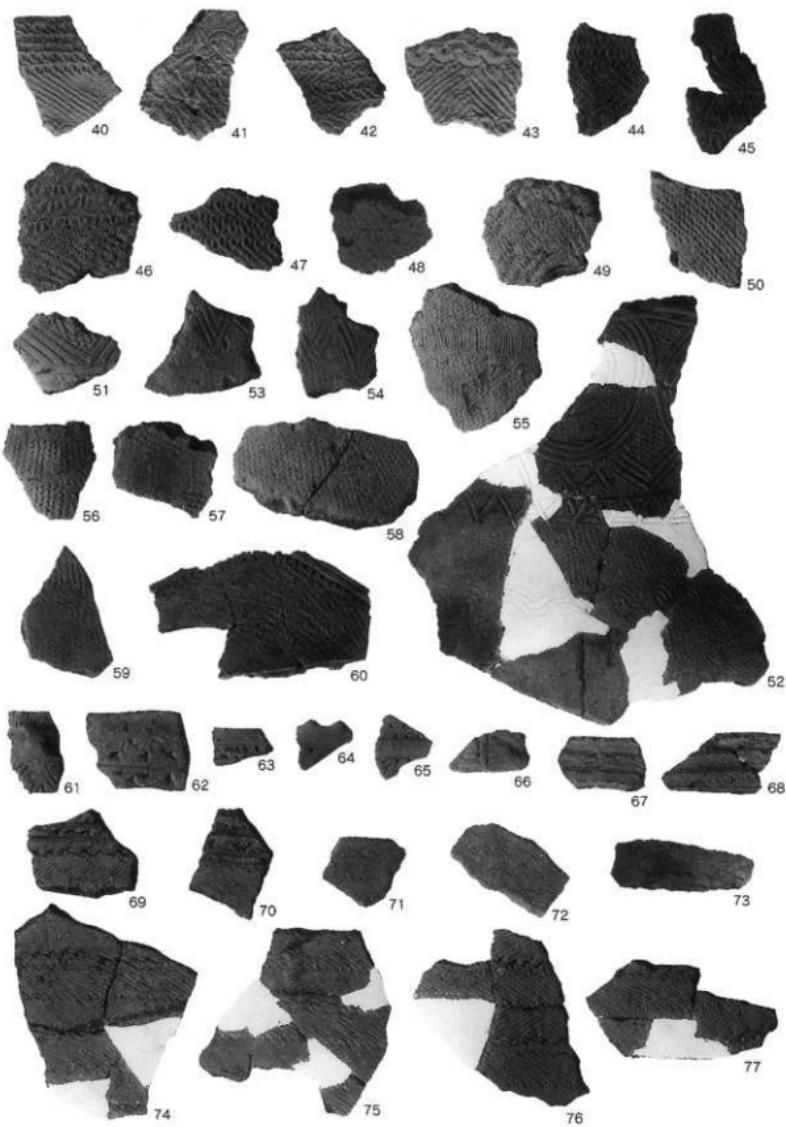


土坑出土遺物⑦

PL-26

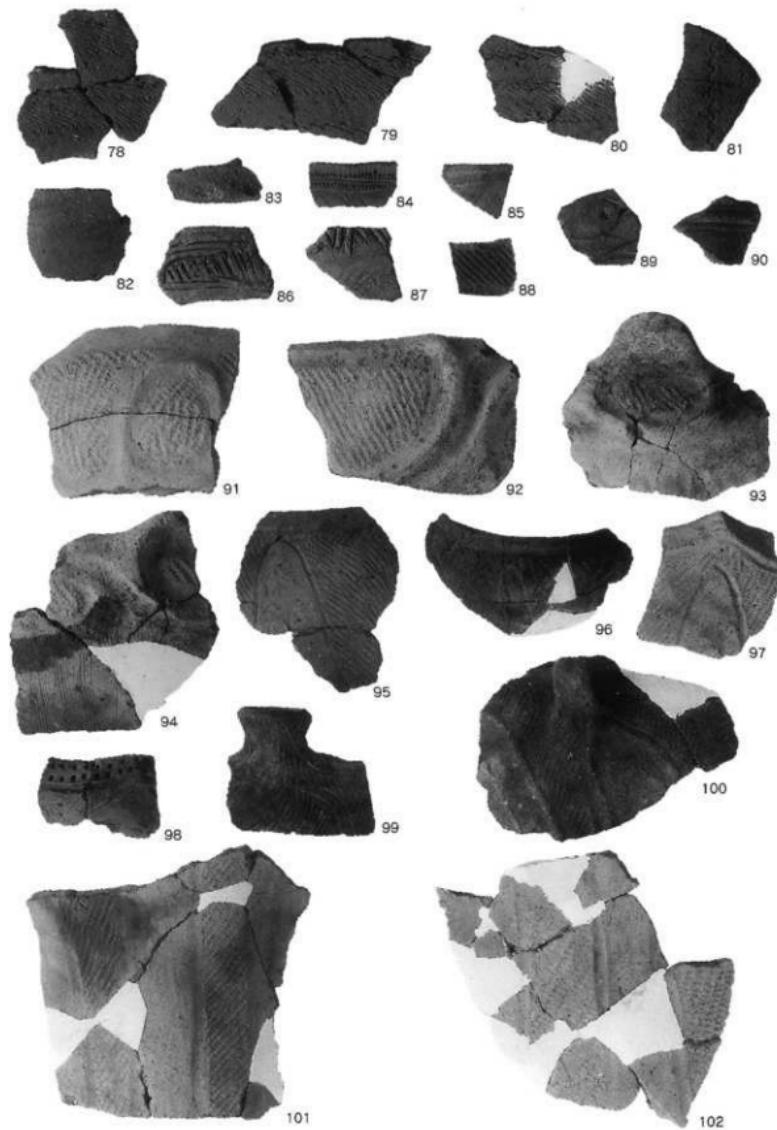


遺物出土遺物①

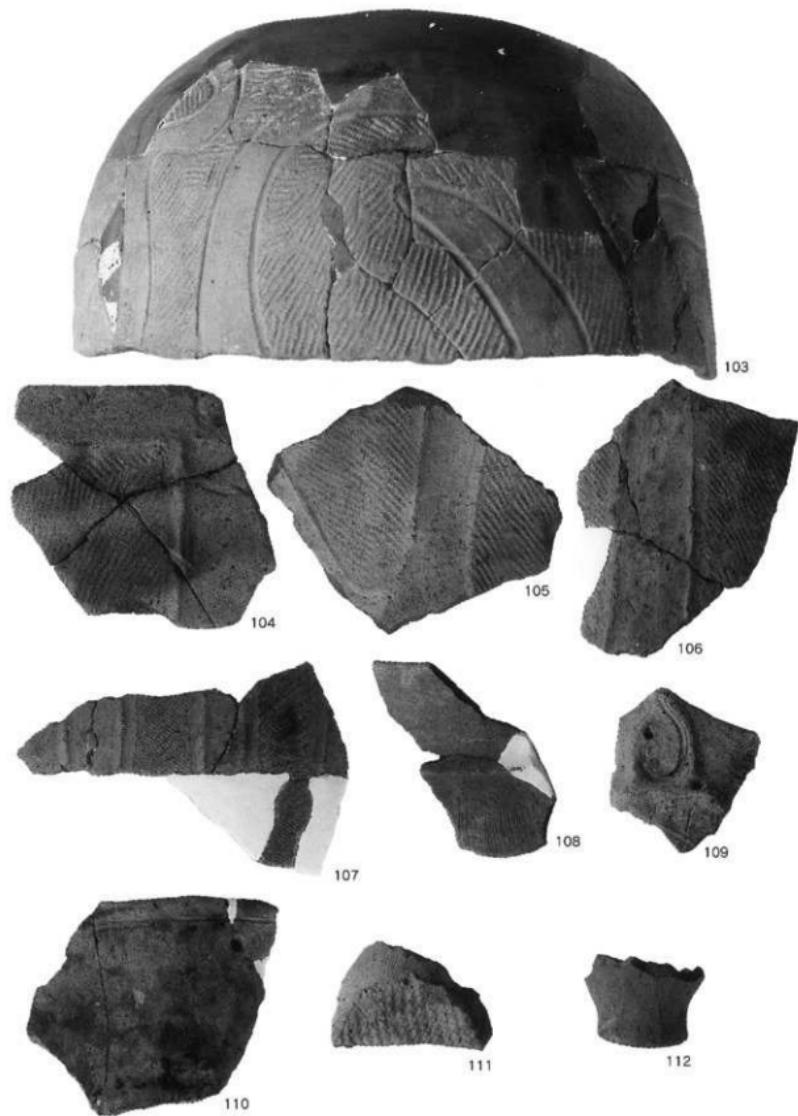


遺構外出土遺物②

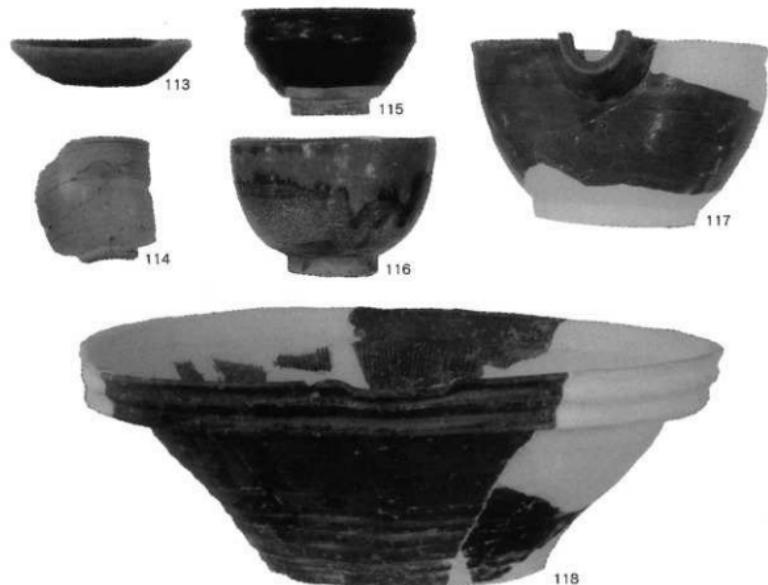
PL - 28



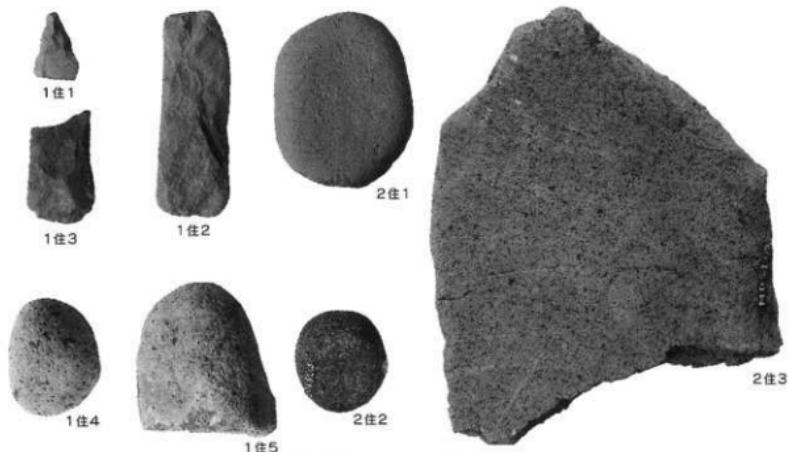
迺構外出土遺物③



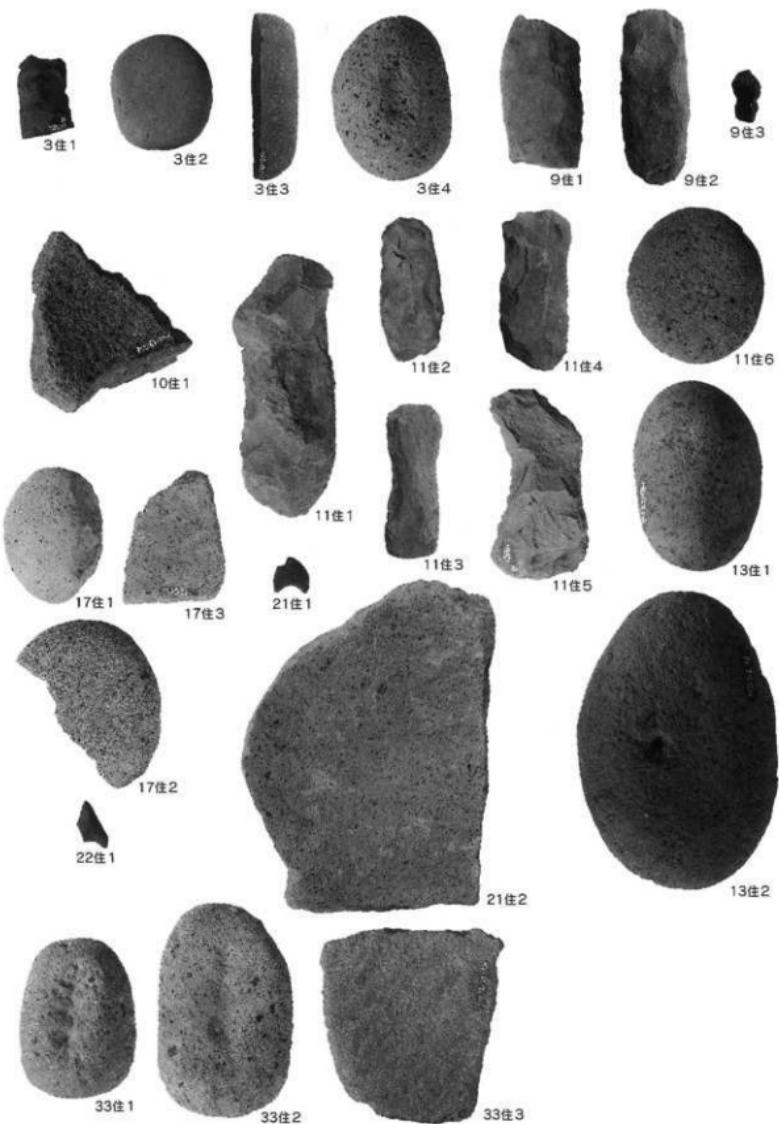
遺構外出土遺物④



遺構外出土遺物⑤

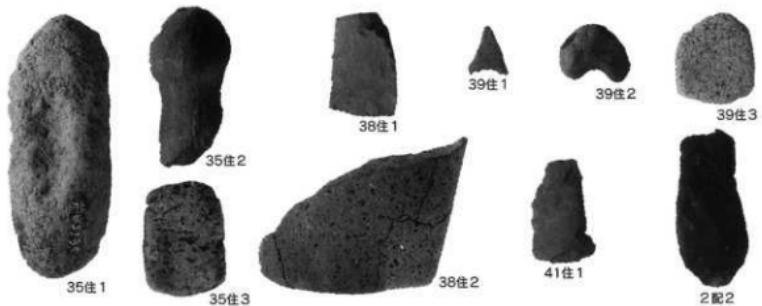


縄文時代中期住居址・配石遺構出土石器①



绳文时代中期住居址・配石遣柄出土石器②

P L - 32



縄文時代中期住居址・配石道構出土石器③

市之関前田遺跡 II

2005年3月20日印刷

2005年3月25日発行

編集発行 前橋市教育委員会文化財保護課
群馬県前橋市三保町2-10-2
〒371-0018 電話 027-231-9875

印刷 朝日印刷工業株式会社

